［懐　想］

夙川雑記（しゅくがわざっき）

岡本幹輝

はじめに

この雑文は、私たち夫婦の新生活から中年にかけての記念譜である。また、舞台が阪神間の夙川（しゅくがわ）を間に挟んだ、西宮から芦屋にいたる住宅街であり、時代が一九六二（昭和三七）年から、七年の間を置いて、一九七三（昭和四八）年までの、ちょうど日本の歴史上で特異な一時期と見做された、謂わゆる高度経済成長の只中に当たるので、ある意味では、おこがましくも、谷崎の名作『細雪（ささめゆき）』の現代版（パロデイ？）とでも云い得るものが書けたと自負している。

ここに描かれた登場人物は全てみな実在の人物である。したがってジャンルとしてはノン・フィクションに属するものではあるが、乾いた記録というより、できるだけ詩情に溢れた懐旧の情感を漂わせるよう心掛けたつもりではある。

書き始めたのは、実際に私たちが芦屋に転居したときからで、いわば同時進行的に事件の推移を追っかけたので、私にも結末が判らないで書いていたものである。そして二年後再び芦屋を去って東京に戻ってきたときに、書き終わったものを時が経てば登場人物の価値も定まり、その生死もまた定まってくる筈なので、渦中にあったときより一歩離れた目で書き改められるのではないかと思い、更に五年を経て書き直しを試みて見たのだが、最初に書いたものと比べて殆んど大差がなかったのは不思議な想いである。その五年の間、この雑文の中に登場した人物でこの世から姿を消したのは、端役のような形で登場した私の父だけである。六麓山荘の元大臣閣下を始め、ほかの人々は、まだまだ悪業を重ねつつ『生』との葛藤を続けている。

一九七八（昭和五三）年八月末日

私は、結婚した当座の足掛け三年の間、兵庫県西宮市の越水（こしみず）町という所に住んでいた。阪急神戸線の西宮北口と夙川（しゅくがわ）の二駅の中間よりやや夙川よりで、線路より百メートル程山手側のところである。地元の人が小金を貯め畑を潰して新しく建てた文化式と名付ける木造アパートの二階を、大阪に本社のある私の会社がまとめて借りたので、その四軒（区画）並んだうちの一軒が、私の新所帯と先ずはなったわけである。

初めて婚約中の妻と連れ立って、会社の指定した不動産屋の案内でこのアパートを下見したときは、正直言って私には気に入った住宅環境とは思えなかった。道路から空き地越しに、剥き出しにアパートの裏が覗かれて殺伐な感じがしたし、周囲の状況も、なにか新開地風で落ち着きがないように一見された。しかし、会社に就職して一年で結婚生活に入るのにそう贅沢なことも云える立場にもなく、また、その頃妻が下宿していた国鉄東海道線摂津富田（せっつとんだ）駅の近くに新しく建ったアパートを探してきて、それを会社に借り上げてくれるよう申し入れたのに、風呂が付いていない安物だとして会社の方が受け付けてくれなかったので、仕方なくといった気持ちで、その西宮の物件に住むことになったのだった。

だが、住めば都とはよく云ったもの、私たちは西宮市越水町に住み始めてからは、その辺りが、交通の便と自然環境に恵まれていて、しかも歴史的にも古い背景を持った土地であることに次第に気が付き、だんだんと離れがたい愛着を覚えるようになって行った。

当時、一九六二、三（昭和三七、八）年のその界隈は、国道西国（さいごく）街道は旧官幣大社廣田神社の前で折れて南下し、西宮市役所のところで阪神国道に合流する形になっていたがために、私の住んでいた越水町の方へと通じる道路は、ちょうど盲腸の虫様突起のように約三百メートル程はみ出した恰好になっていた。その道を私の新居の傍を緩やかなカーブで曲がって阪急の線路を渡り、そこからは直線で阪神国道に出られるのにもかかわらず、その途中の直線の札場筋という商店街が狭かったせいもあってなのか、幸いなことに車の交通量はそれ程激しくはなかった。しかし土地の人は、この盲腸の突起のような道路をも、やはり、西国街道という名前で呼んでいたようである。

西国街道はその昔、山陽道から大坂に出ずに直接京に抜ける主要な旧街道であって、江戸へ参勤交替する西国の大名たちがよく通ったものである。往時の西国街道が、果たして廣田神社の前を南下していたのか、あるいは私の住まいの方へと伸びていたのかはよく知らない。しかし、街道の歴史よりも神社の歴史の方が古い筈なので、おそらくは廣田社の参道を兼ねた方が矢張り旧街道だったのであろう。それほどこの神社は由緒ある神社なのである。伊勢神宮と匹敵する社格を有し、中世には広大な荘園を持っていた程で、東の伊勢神宮に対する西の宮なる地名もこの社に由来するらしいが、今では阪神西宮駅の近くの恵比寿神社の方が有名で、エベツさんと呼ばれて商売の神様としても人気があり、西宮もこのお宮さんから付いた名前であると一般には思われているようである。しかし私は、廣田神社に西宮なる都市の名前は由来する

のが正しいと思う。エベツさんと異なり日頃は訪れる人も少なく閑散としていて、わずかに毎年四月下旬の躑躅（つつじ）の咲く頃にのみ人の集まる社なのであるが、ビニール栽培の畠の中を長く突っ切る参道の松並木を見るにつけ、往時の威風を偲べるからである。

ちょうど私たち夫婦の住んでいた辺りが、阪神間を併走する阪急神戸線、国鉄東海道線それに阪神電鉄の三線が一番近接している区間であって、阪急の線路より直ぐ北にある私の住居から、阪急の駅では一番近い夙川までは歩いて十五分ぐらい、また阪急の南に走る国鉄の西ノ宮駅、カタカナの『ノ』の字を間に入れて表示しているのが、いかにも厳密さを守る官営の国鉄らしく微笑（ほほえ）ましいのだが、その駅には二十分はかかるのに、併走する線路では一番南の阪神電鉄へは、阪急の踏切を渡り札場筋を真っ直ぐ南下して国鉄のガードを潜り、更に阪神国道を渡ってその先の駅、こちらの駅名は西宮駅で『ノ』の字は入らないが、そこには徒歩約十分と一番近い駅になるのであった。だから初めのうち梅田にある会社への通勤には、勝手が解らなかったので夙川駅までの長い道のりを歩いて阪急電車を利用していた私も、結婚前に住んでいた芦屋にある会社の独身寮時代の通勤定期券を切り替えずにそのまま援用できたのも理由の一つだったのだが、その期限が切れると早速、阪神電車に切り替えたのであった。

阪急の踏み切りから国鉄のガードまでの約八百メートルの間を札場筋と云い、幅七、八メートル程の狭い商店街をなしていた。はじめ、札場筋という名前から私は、札付きとか賭場の入れ札とか、あまりよくないイメージを連想し、この辺りに賭場でもあったのかと思ったりしたが、後で知ったことだが、その昔、海陸の要衝であるこの辻に高札を立てて、為政者が布告をなしたところから付けられた名であるという。ここで云う海陸の海とは瀬戸内の水路のことで、難波津（なにわづ）、つまり今の大阪へ出ずに京へ上るには、この西宮の浜に上陸したと云われている。この札場筋を私は毎日、朝晩歩いて通勤していたし、妻も買い物にこの商店街を利用していた。特にこの商店街の中を西側に横に入った『双葉市場』と名付けられたマーケットは、関西によく見られる横丁マーケットなのであるが、マーケットが独自に運行する無料買物バスを、遠く六甲山麓の甲陽園の方まで巡回させていることで知られていた。

越水町はその名のとおり、六甲山系から流れ来た地下水が、関西（かんせい）学院のある上ヶ原の台層を越して湧き出る所にあって、すぐ北側を丘陵地帯として背負った低地になっていて、私の住んでいた近所にも三箇所に弘法大師開掘と伝えられる露天井戸が湧いていた。その湧水は夏冷たく冬暖かなので、冷蔵庫のまだ買えない私たち若夫婦はよく汲みに行ったものである。建て込んだ民家の狭い路地を伝って行くと、ガラス戸と金網で手厚く保護された湧き水の取水口は、地元の人たちが祖先から受け継いだ信仰の対象のように、大切に保護されていた。

越水町が背にした北側の丘陵地帯は城山（しろやま）と呼ばれていた。戦国時代に誰か名のある武将の居城だったらしいが、今は、高級住宅地となっていて、銀行や大手企業の寮が建っている。其処にはまた市の経営する墓地と浄水池があり、萬池谷（まんちだに）と称されると

ころから、谷を利用して造ったのであろうが貯水池が三つあって、春には一般に開放されて桜の名所となっていた。その貯水池に沿って、日本一の大富豪松下幸之助の大邸宅が、東京の青山御所のように芝の土手を築いて建っている。この辺りは私たち夫婦の日曜の格好の散歩コースであった。梅雨どきにはこの貯水池には大きな蛙が鈍い動作で動いていた。

この萬池谷から北はなだらかな丘陵が起伏して六甲山に連なっている。その六甲山はこの西宮が東限で、したがって、西宮市は西隣の芦屋市と違って六甲山に阻まれずに北へと広がっており、その先が宝塚市になるのだが、ちょうど六甲連峰の東の終点には、ピリオドを打つような形で、お椀を逆さまに伏せたような半円球の小山がある。甲（かぶと）山と云って謂わば西宮市のシンボルのように市内のどこからでも眺められ、市民から愛されている小山であるが、その美しい形がこの貯水池に姿を映している様は、広大な関東平野に位置する東京などでは絶対に味わうことのできない光景である。

関西系の大企業に就職するまでの長い間東京で生活していた私にとって、関西の生活で特に気付いた風土の違いとでも云うべきものが二つあった。その一つは土壌の違いで、もう一つは、川の水の色である。関東ローム層という富士火山灰の堆積によって造られた東京の土壌は、黒くまさに泥土であり、私は土とは泥のことだとばかり長い間信じていたので、黄色い砂地からなる土があることを関西に来て知って驚きを憶えたものである。しかもその砂も、湘南の海岸に見る灰黒色の細かな砂とは異なり、粗く軽いものであることにも興味を惹かれたのである。恐らくこれも土壌の違いから来るものなのであろうが、川の流れも同じことである。関東の堆積した泥土の川床の上を流れる川水は、堀のように不透明な深みを湛えた色をしているのに反して、関西の川水は、硬い川底の上を浅く透明に冽（せせら）ぎのように流れている。兵庫県という県名の淵源ではないかと私が思っている武庫（むこ）川は、六甲の山脈に阻まれることなくその東の果てを流れ、西宮市と尼崎市とを隔てているが、その大河は遠く丹波の山奥から流れて来ても、その川よりも西側にある阪神間の幾つかの川は、いずれも六甲山から源を発し、したがって距離も短かく流れも急で、水量も少ない辛うじて干上がらない程度の流れとして、街の風景に彩（いろどり）を添えてささやかに流れている。その一つが夙川である。甲山の西側から流れ来るこの川は、阪急電鉄夙川駅と阪神電鉄香櫨園（こうろえん）駅との間で、両側に土手を築かせ市民に憩いの場所を提供して、その間をサラサラと陽を照り返しながら流れていた。

山陰から九州にかけての新婚旅行から帰って直ぐ、私は、札場筋商店街にある一軒の写真店に入った。私たち新夫婦の旅行中に写したスナップ写真の現像焼付けを依頼するためである。ちょうど五月の連休が終わった頃のことであった。その小さな写真屋は、『フタバ写真店』と云い、私の住まいからは阪急の踏切を渡ってすぐ右側に店を設けてあり、初老の夫婦が二人仲良く店番をしていた。私はフィルムを預けてか

ら、いつ頃出来上がるのかを確かめると、直ぐにその店を去り、後は妻を指定された日に取りにやらせたので、特にその写真屋が印象に残っていたわけではなかった。その後しばらくは、私の頭の中からは、『フタバ写真店』の名前が消えていたのも当然のことである。あいにく私は当時カメラを持っていなかったので、知人から借りたカメラで撮った新婚旅行の記念写真が一通り出来上がると、もう新たに写真屋に出かけて行く必要もなかったからである。

しかし妻の方は持ち前の人懐っこさから、最初の用件で、もう老夫婦とすっかり親密な間柄になってしまったらしい。近くの『双葉市場』への買物帰りに、よく立ち寄っていたのか、「写真屋の小父さん、小母さん」という言葉が、彼女の口からよく出ていた。妻の話によれば、老夫婦には子供がいないので、自分のことを実の娘のように可愛がり、何くれとなく相談に乗ってくれるというようなことをよく言っていた。そして、まさかと私は思うのだが、妻の為に貯金を積み立てておいて上げる、と言われたというようなことまで私に言っていた。実際にも私の給料日の前に二、三度お金を用意してもらい、苦しい結婚当初の家計の助けになったということもあったらしい。どちらもサッパリした人たちで、特に小父さんはなかなかに一徹なところのある人らしく、商売気が全く無いところが却って気持ちがいいとも評していた。ときどき店を閉めては夫婦で京都や奈良などに写真を撮りに出かけるとかで、私たちも年を取ったらああいうように、二人で寺社巡りをしましょうよと、妻はこの老夫婦の睦まじさを羨ましがったりしていた。

その年の夏であったか秋であったか、いずれにせよ私たちの長女が生まれる前のことと思うが、妻と写真屋の小母さんとの間にちょっとした気まずいことが起こってしまった。

写真屋の小父さんは、その頃、詩吟に凝（こ）っていたらしい。市の図書館長ら数人の同好の仲間とともに、会を創って時々唸っているようなことを、チラッと妻から私は聞いたことがある。ある時、妻は、おそらく自発的に彼女の方から申し出たのであろうが、小父さん達の詩吟の会の練習のためにと、わが家にあったテープ・レコーダーを貸したことがあった。

当時、私たちは、準備期間も短かく慌ただしく新婚生活に入ったので、文字通り何の貯えもなくゼロから出発せざるを得なかった。初めから持っていた物とては、二人それぞれがそれ迄独身生活で必要としていた夜具ぐらいなもので、押入れの中は閑散としたものだった。私などは、芦屋神社前の設備完備した会社の独身寮に居たため、箸や茶碗も持っていなかった。独身寮から引越しのため会社が用意してくれた軽トラックの荷台に、二、三枚の布団と衣類を積んだだけなので運転手も苦笑していたが、その他に僅かな旅行用の洗面用具を狭い浴室に置いていただけである。一方の妻の方も、単身で故郷の九州を後にして短期間しか一箇所では働けないアルバイトを繰り返しながら大学受験に備えるとかで、転々と京都やその周辺の下宿を移り変わっていた。食うや食わずやのその生活からは道具類も買えず、そのとき住んでいた摂津富

田の下宿先から西宮の新居に移る際には、全財産は一台のタクシーに積めるだけで、使用中の醤油まで持ち運んだためそれが途中で漏れて、一緒に包んでおいた夜具を汚した程であった。したがって、新所帯は、先ず生活に絶対欠かせない食器、電球、たらい、ちゃぶ台といった細々としたものを、まだ乏しい給料の中から買い始めて行ったので、無くても済ませる物、たとえば、電球の傘やカーテンなどは、不体裁ではあるが後回しにせざるを得なかった。だから当時三種の神器と謂われたテレビ、冷蔵庫、洗濯機の電器製品は勿論のこと、箪笥や水屋、本箱などの耐久消費財を買い求めることなど、とても入社一年そこそこの身にとっては、資力から云ってもムリなことであった。それで、我が新居を訪れた会社の同期入社の友人たちは、徹底して何も無いのに驚き呆れたことであったろうことは、想像に難くない。取引先の商社員で、仕事を離れても付き合っていた同じ年の友人が、私の家を訪ねて来て何もないのに驚いたのか、その会社から結婚祝いとして灰色の洋服ダンスを寄贈してくれて、それが目立っているだけである。

その私たちの新居に、その頃一般にもまだそれ程普及していなかった大型のテープ・レコーダーがあることは、甚だバランスを欠いたことであったが、これは、一人五百円の会費を、出席した会社の同僚ばかりか上司、更には両親や弟からまでも徴収して、やっと開かれた私たち二人の結婚記念パーティで、その一部始終を収めた録音テープとともに、会社の同期入社の友人たちが祝いの印にと、寄贈してくれたものなのである。その他には、会社の同じ職場の課の人たちから贈られたラジオも一台あって、それがブリキ製の衣類箱の上にポツンと置いてあったことも付け加えておきたい。そのラジオから好きな音楽を採録したり、あるいは残業で聴けないプロ野球ナイターの実況放送を妻に採らせるために、結婚パーティを収録したテープの他に、もう一本別に、私はテープを買い求めておいた。問題は、そのスペアテープのことで起こった。

そのテープは中身を消した上で、レコーダーの頑丈な蓋の裏に付けて貸したことに間違いないと妻は主張するのだが、写真屋から返って来たレコーダーの裏蓋にはそれが付いていなかった。小母さんの方は、借りたときからテープは付いていなかったと言い張り、そこで二人の女性は押し問答をしたらしい。

「お金の問題やないわ。私がウソついているみたいに思われるのが癪なのよ。」

妻は息巻いていた。

「小父さんは何て言ってたんだい？」

「小母さんが何か思い違いしてるんやないかって。小父さんは、よくもう一度家の中を探してみると言わはってるんやけど、小母さんの方は強情やわ。とに角、貴方、うちには何にも無いんやもの、それこそ隠しようないんやから、あったらすぐ判るわよねえ。」

私たちの住む文化式アパートは、六畳、四畳半の二間に、台所、それに小さな水洗便所と浴室が一緒になって備わっていたが、その狭い家の中が広く見えるほど何も置かれていないので、これでは隠し物など有りようがなく、どうやらこの諍いは妻の方に分がありそうである。しかし二、三日このゴタゴタは続き、一時は写真屋の小母さんと妻の間は険悪になりかけた。その頃、休日に妻と二人で買い物に出かけたとき、狭い札場筋の片側の、溝の上を蔽った石の蓋が並べられてある歩道を歩いていた私たちを、反対側の店の前から写真屋の小母さんが声を上げて呼び止めたことがあった。背の高い痩せぎすの小母さんが突っ立ったまま、傲然と右手を上げてこちらを手招いているのを見て、私は瞬間、困ったことになったと思ったが、二人で招じられるまま店の中に入った。

「家の中探して見たけんど、出て来んかったよ！　そやけどな、このテープ買うて返したるからな、持ってけ！」

小母さんは突っけんどんな調子で言い放った。その傍らで小父さんは、当惑した顔で目を瞬かせながら黙って座っていた。

結婚した翌年の早春、私たち夫婦には長女が生まれた。まだ新家庭の経済基盤も定まらないうちの出産ではあったが、若い二人には、それ程の大事と思わず、妻も九州の実家にも帰らず頑張って、市内の個人経営の産婦人科病院で産み落とした。全てに楽観的に対処できるのも若さの特権であったのだろう。何も無くとも産まれて来た我が子への最大のプレゼントとして、私は、バケツを下げて、近所の弘法大師開掘の清水を産湯に汲んでやった。ちょうどお産の前から、私の仕事は忙しさを増し、出産予定日を差し挟んでその前後十日ほど、九州、四国と出張が続いて、出産前日には急遽、高松市から呼び戻されたのであったが、出産の後もその忙しさは続いて、私には月日が殊の外早く過ぎて行くように思われた。その忙しさの中で私たち夫婦は長女を抱いて、日曜ともなれば、満池谷や夙川界隈を歩き回っていた。

暑い夏も過ぎ、そろそろ寒気を感じるようになってきた晩秋のある日、私は妻から写真屋の小父さんが脳溢血で倒れたということを知らされた。幸いにも生命は取り留めたのだが、左半身麻痺の状態で市内の中央病院に入院しているとのことで、私たちは早速に、その次の日曜日に、見舞い品を持って病院を訪れた。

西宮中央病院は、阪神電車の今津駅と西宮東口駅との間の、線路よりは少し南側にある市立病院である。私たちの思いがけない訪問に、写真屋の老夫婦は非常に喜んでくれたのだった。私たちの行動半径からすれば、歩いて行く距離としては決して遠くはないのではあるが、寒いのに遠いところを赤ちゃんを抱いて、わざわざ見舞いに来てくれるようなことを日頃してないのにと、小父さんはベッドの上で恐縮していた。医者の話では生命に別状はなく、左半身の麻痺は、これはしようがないが、あとは順調に回復を待てば、間もなく仕事にも復帰できうる見通しゆえに、ご心配なくとも言っていたそうである。

その言葉通り、年が明けて暖かくなってから、私は札場筋を通る折に、『フタバ写真店』の店内に、再び老夫婦が仲良く店番をしている姿をガラス戸越に見て、黙礼して通り過ぎたこともあった。また小父さんの体を支えるようにしながら、長身の小母さんが杖代わりになって歩いている姿を、遠くから認めたこともある。

ちょうどそのような時期に、私たちは散歩の途次に、夙川の堤の近くで、喫茶店『ラ・パボーニ』を見付けたのである。一見して私たちを惹きつけたほど、特徴を持った外観の店だった。

阪急の夙川駅から橋を渡って、土手を東に下りて札場筋の方角にしばらく歩むと、右側に、西洋風と云っても南欧の様式と云った方が正確であろうが、白い壁に蔦を這わせた二階建ての建物がある。前面に小さな花壇を設（しつら）え、其処に鉢植えの植物が置かれていて、また入り口に生えた二本の棕櫚（しゅろ）の木が、二階を飾る白い欄干の笠木と恰好の釣合いを見せていた。建てられてから相当の年月が経っているように見受けられたが、今でもハイカラな感じを強く残していて、全体として何となく芸術的な雰囲気を漂わせている。初めは何の店なのか判らなかったが、『営業中』の看板でそれと判って中に入った私たちは、店の内部の薄緑色の壁一面に、びっしりと刻まれた線画にまず目を奪われたのであった。

其処には、天使、悪魔が跳梁し、全裸の男女が性器も露わに乱舞しているではないか！　さながらに天国と地獄の祭典の如くである。

私たちが入り口に吊るされた銅製の鐘をカランカランと鳴らすと、品のよい老婦人が室内から現れた。私たちは注文もそこそこにして早速にその婦人に壁画の由縁を質問したのであった。

老婦人の話すところによると、この店の主、つまり彼女の夫は大阪出身の画家であり、若くして上京し洋画界の巨匠岡田三郎助に師事したロマンチストで、斯界ではかなり名の知られた人であるという。生来の芸術家と云ってよい人で、生家は大阪の豊かな商人なのに本人は名利を求めずひたすら芸道を追求し、あの放浪の天才画家山下清にマジックインキの使い方を教えたこともあるという。彼の最大の尊敬する人物はオランダのゴッホだそうで、その心酔から、いま彼は、ゴッホの愛した南フランスの風景に似た広大な土地を、丹波の三田（さんだ）近辺の山中に探して其処を手に入れ、たった一人で『アートガーデン（芸術の園）』と名付ける理想の楽園を建設中なのだそうである。何度もマスコミなどで『荒野のゴッホ』として紹介され、地元の阪神間ではかなり名の通った人であるらしい。店の名前もイタリア語かスペイン語でオスの孔雀を意味するらしいが、なぜ、孔雀と名付けたのかその時は聞きそびれてしまった。

その店は彼の生活の根拠なのであるが、今はガーデンで制作中なので、一週間か二週間に一、二度帰宅するだけで、その留守を奥さんが喫

茶店を経営して支えているようなのである。壁面の線刻画も勿論画家の手になる作品で、また、これは後で知ったことだったが、集会場として利用できる別室が他にあって、学生たちが寄り集まることがあるそうである。

その話に興味をそそられた私たち夫婦は、早速四月末の祭日に、生まれて一年二ヶ月の長女を折りたたみ式ベビーカーに乗せて、阪急で宝塚に出て、そこから国鉄福知山線で武庫川を遡り、三田の隣の広野（ひろの）という小駅に出かけたのであった。

この駅に降り立って初めて私は、『荒野のゴッホ』が『広野のゴッホ』から命名されたのではないかと気付いたのだが、ガーデンはその小駅から更に三十分以上も離れた小高い丘のような山中にあった。偶（たま）に出遭った土地の人に尋ねて探し当てたその『芸術の園』は、小砂利混じりの農道から左に入った丘の上にあって、老画伯は、話に聞いていた通りに、たった一人で作業に取り組んでいた。油気のない白髪混じりの髪の毛を振り乱しゴム長靴に粗末な作業着を纏って、泥まみれの土方そのものの姿をした画家は、はじめ私たちが乳母車を押していたので近所の人だと思ったそうであったが、西宮から来たことを知ると大層喜んで、制作の手を休めていろいろと親切に園の中を案内してくれた。

背後に広大な山林を控える丘陵で、彼は今、敬愛するゴッホの記念碑を造り上げたばかりで、この一月にフランス公使を迎えて除幕式を執り行なったそうであるが、折悪しく風雨が激しく、泥んこの中で文字通り荒野の式典になってしまったらしい。次いで、夙川カソリック教会の神父シルベン・ブスケ師立像の制作に取り掛かり中で、更には民芸の父、柳宗悦のモニュメントも建てる計画であるという。

これらの記念碑が建つ丘の背後には、木造の一棟の古びた民家があった。此処は老画伯の居所になっている場所なのだが、おそらく、この土地を彼が購入した際の旧所有者の建物なのであろう。その建物の周囲にも手が加えられて、日本風の家屋が西洋風の外観を備えるほどに巧みに石材を用いて装飾が施されていた。庭を仕切る丈の低い石塀、貼り絵のように配置された薄紫の敷石の道、セメントに石を嵌めた壁の中ほどを銃眼のように刳（く）り貫き、蔦を這わせて白い漆喰に対比させた暗い納屋など、なかなかに手の込んだ造りなのである。民家の庭には深い井戸があり、私たちも釣る瓶（べ）で水を汲み上げて掃除の手伝いをしているうちに、とうとう日が暮れてしまった。

老画伯は、このガーデンを独力で建設する以上、大工、左官から土木作業に至るまで何でも自分でやらなければならない。私たちの見ている前でも、まことに小まめに動き回っていた。しかしそれよりも何よりも私たちを驚かせたのは、彼の大変な熱弁ぶりである。滔々と、しかも理路整然と、まさに止まるところを知らずに天下国家を憂え、民心を語り、まるで永遠の書生のごとく情熱を傾けて、何かを創り上げようとして倦むところを知らない。さすがに私も辟易し話の腰を折るのに苦労して、

「暗くなりましたから、この辺で失礼します。」

と辞去の挨拶をすると、彼はいい機会だから久しぶりに夙川の自宅に帰ると言い、我々は一緒に山を下りることにしたのだった。

何日か振りで山を下りる老画伯ともども私たちは、掘りたての筍をぶら下げて、外灯もない薄暗い山道を広野駅に向かった。彼は相変わらず熱弁を振るいながら、途中すれ違った土地の人から丁重な挨拶を受けると、立ち止まって二言三言言葉を交わし、また、気が付いたように道端に族生する小竹を切り取って、画筆にすると最適だと教えてくれた。

学生時代から私は柳宗悦に影響を受けていた。というよりも、かなり心酔していたと云ってよい。それも私の場合、宗悦が広く知られている民芸運動の面においてというよりは、むしろ、彼が民芸を通して辿り得た、名も無き民衆の心を支えた念仏の世界についての面の方に、より大きな評価を私が与えていたと云ってよい。というのも、学生時代から坐禅を続けていた私は、いわゆる『聖道（しょうどう）門』と謂われる、厳しい自力での修行を行う禅の道と対比させて、無学な民衆に門戸を開いた『易行（いぎょう）門』と謂われる、他力での救いを求めて唱える念仏の道の方に、心を惹かれるところがあったからである。西宮に移り住んでからも私は、阪神電車の線路の北側に、西宮東口駅近くに『海清寺』という臨済宗の名刹を知り、その寺で毎週日曜日の朝早く開かれる禅会に参禅していたとはいえ、心の中では、大学時代の後半から絶えず禅に対する懐疑と、念仏に対する憧憬とが同居していたのであった。そのとき偶然その私の前に現れた老芸術家が、柳宗悦を畏敬する言葉を述べ、画家のライフワークである『アートガーデン』の中に、第三番目のモニュメントとして宗悦讃碑を加える計画を語ってくれたとき、何か不思議な力が作用しているのではないかと私が思ったのも無理のないことであろう。

殊勝にもその時私は、老画伯のこの計画に、何とか微力ながらも協賛したいものとの気を起こしたのであるが、そのような私の期待に応えるかのように、何日か置いたある日、『ラ・パボーニ』の店の棚に置いてあった一枚の色紙が私の目に留まったのであった。それは、柳宗悦讃碑建立の資金集めのために画家が描いた、数枚がシリーズとなった水彩画のうちの一枚であった。私は色紙全部を見せてもらった。それらは、『明石港』、『小豆島（しょうどしま）寒霞渓（かんかけい）』、『明石大山寺』、『鞆（とも）の仙酔島』など、主に瀬戸内近辺が画題に選ばれ、明るいタッチで描かれていた。確か一枚二千円程度で、全部でも赤い縁取りの額縁ともども壱萬五千円前後の価額であったと思うが、私は、老画伯が丹波の山に行っていて居なかったので、留守を預かる奥さんに頼んで、月賦払いで支払うことを了承してもらい、シリーズものを手に入れて満足した。何の家具調度もない私たちの居間にその額を掲げて、時折、中の絵を取り替えて新鮮な気分に浸りながら、私は、孤独な芸術家に理解を示すパトロンのような満足感を錯覚していたのである。

その年の七月上旬に、私たち一家は転勤のため、満二年二ヶ月住んだ西宮市越水町を去って東京郊外の会社のアパートに引っ越した。ちょ

うど東京オリンピックが開催された年で、その十月には東海道新幹線が開通して、東京と関西とは著しく近くなっていた。もともと大阪本社で私がそれまで携わっていた営業業務は私の性に合わなかったので、私の方から自己申告して強引に変えてもらったので、東京での私の仕事はデスク・ワーク主体の地味なものになっていた。そのせいで出張の機会は著しく少なくなり、大阪に行くこともあまりなかった。それでも次の年早く、泊りがけでの大阪出張があったので、私は妻の頼みもあって、西宮の、もと住んでいた近所に挨拶に立ち寄ってみた。

梅田から阪急電鉄に乗った私は夙川駅で降り、まず『ラ・パボーニ』を訪れた。久闊を叙してから私は、何かいい絵はありませんかと質（たず）ねてみた。そのときは生憎よいものが無かったのだが、このように絵の話を種にして店を訪れ、旧知のごとく話を切り出せるのは社交下手の私にとっては気が楽であった。老画伯はその日も山に行っていて、店には奥さんだけであった。柳宗悦讃碑建立は、すでに着工して順調に進捗しているとのことである。私は、いい絵があったら取っておいてくださいと言い置いて、そのまま札場筋の方に足を伸ばした。

『フタバ写真店』を訪ねると、小母さんは不在で、小父さん一人が店番をしていたが、私は妻から頼まれた手土産を渡すと、早々にその店を辞して越水町のアパートに向かった。妻ならば、必ず立ち寄る筈の、西国街道が札場筋の方に曲がる角にある八百屋さんにも挨拶しなかった。この店は、かつて妻が買物で店にいたとき、たまたま一人の若い女が人目を忍ぶように飛び込んできて、持っていた包みを解いて、これは大島紬で大変高い品物だ、いま奄美大島から船で神戸に着いたばかりなのだが、急にお金が要ることになり、荷主や船主には内緒で積荷の一部を抜いて急いで持って来たのだ、安くしておくので買ってほしいと、マッチで布に火を点けて燃えないことを確認させ、本物であることをその場にいた妻やほかの人たちに信じ込ませ、早く早くと急がせた。妻も、これは良い物だ、お金があったら私も買いたいなどと同調し、ついには八百屋さんに数万円とかの値段で買わせたことがあった。結局は後で贋物と判り警察沙汰になったという経緯があるのだが、そのとき私は「お前もサクラの役をしていたことになって、詐欺幇助か教唆（きょうさ）罪として共犯になる惧（おそ）れがあるのだぞ！」と注意したのであった。そのような店に挨拶に立ち寄ることは、妻に「寄ってみて欲しい」と言われていても、私には出来にくかった。

元のアパートには、住んでいたという理由だけで行く必要はないと私は思っていた。妻と違って親しく口を利いていた間柄の人たちがいるわけではなく、その意味で気の置けることの方が多いことは分かっていたのだが、とにかくその夜は妻の顔を立てて、予め電話しておいて、元の住まいの隣に住んでいる同じ会社の人の家に泊めて貰うことにした。その夜、写真屋の小母さんが其処へ尋ねてきて、たまたま私が寄ったときに彼女が不在だった失礼を詫びつつお返しを持って礼を言われたので、ちょうど風呂に入っていた私は、タオルを腰に巻いて窓越しに応対して恐縮してしまった。

私が会社の出張を利用して西宮に寄ることはあっても、札場筋から越水の方へ足を延ばしたのはその時が最初で最後であった。阪急、国鉄、

阪神のどの駅からもちょっと離れていて不便であるということもあったが、生来の人見知りゆえに、日常の挨拶を交わす程度の付き合いしかしていなかった人たちと、今更旧交を温める必要もなかったので、妻の頼みで一度だけの義理を果たせば、後は自然に足が遠退いたのも無理からぬことである。しかしその界隈は私の頭の中には、何処でもかつて一度は住んでいた場所がそうであるように、懐かしい思い出の場所として何時までも育（はぐく）まれていて、四国、山陽にある会社の工場への出張の行き帰りの折りなどには、時間的にまだ明るいうちに国鉄東海道線で西宮市を通過するときなど、列車の窓から札場筋を横切るガードを渡る際に、特に意識して街並みを眺めやったものである。また、一度など、ＮＨＫのテレビの日曜夜の大河歴史ドラマで『太閤記』を放映していたとき、秀吉の中国征伐の途次として越水城址が画面に映し出されたことがあった。その真下こそがよく清水を汲みに行った場所なので、私たち夫婦は思わず声を上げて興奮したこともあった。

一方、夙川の『ラ・パボーニ』の店へは、私はその後もよく立ち寄った。阪急の夙川駅から程近いのと、それに老画伯に対する私の関心が強かったからであろう。デッサンに薄く水彩を施した『ハルピン風景』シリーズとか、甲山の姿を描いた小皿（裏表紙参照）とか、会社の出張を利用して訪ねた際に、いずれも月賦払いにしてもらって手に入れたものである。また美術に造詣のある、例の洋服ダンスを寄贈してくれた商社の友人を伴って案内した折には、たまたまその時画家は山から帰ってきて店に居り、私たちに息をも継がずに滔々と、芸術論、政治論を語るので、その友人は辟易していた。

その間、丹波の山の方にも私は一度行く機会に恵まれた。その日はちょうど大阪で開かれた万国博覧会の開会式の日であったが、私の所属する労働組合の定期大会も、一日前からその日に合わせるように、博覧会場の近くの茨木市公会堂で開かれていて、私はその会合に労組東京支部の代表として出席していたのである。その日は土曜日で、翌日は日曜日であるのにも拘わらず、今度は会社の職制上の業務として、新規事業に関する検討会議が宝塚市の武庫川沿いの旅館で予定されていたのを利用して、私は、宝塚からは程近い『アートガーデン』を訪れることにしたのである。

労組の大会は土曜日の昼で終わった。大会の代議員たちは、みな待ちかねていたかのように、万博会場へと足を向けていた。いや、彼らばかりでなく、その日の日本全国の目は茨木市に集中して向けられていたので、国鉄茨木駅では、京都、大阪方面から走り来る電車からかなりの乗客を吐き出していたのだが、私は一人みんなとは逆に、茨木駅を後にしたのである。

もともと労使協調路線を採る労組本部に反発して、労使双方からの陰湿で露骨な妨害の中で、背後組織の応援も無く一般組合員の秘かな支持を得ただけで、会社側の立てた対立候補としての大学の先輩を破って東京支部長の地位を獲ち得ていた私は、政府の画策した、謂わゆる七

十年安保の目晦ましとしての役割を担わされた万国博覧会というお祭り騒ぎに、会社がやるのであればいざ知らず、本部会館の中に、地方組合員のためのベッド設備まで設（しつら）えて積極的に協力する労組本部の姿勢にも不満があったので、その日の午後は、労組の一員として万博会場には行くつもりはなかったからである。

三月半ばとはいえ、その日の関西地方は一時雪のチラつきを見せたほど肌寒く、まして丹波の山中は冷え冷えと寒気は厳しかった。『アートガーデン』に私が辿り着いたときは、すでに夜に入っていた。その時、空は煌々と晴れ渡り、唇が乾いて痛かった。

突然何の前触れもなく現れた私に対して、まだ残光のもと黙々と一人大きな壁を塗っていた老画伯は、驚くとともに大変喜んでくれた。彼は今、新しいテーマである『月に立つ影』を制作しているところだと説明した。昨一九六九年七月のアポロ第十一号によるアメリカ宇宙飛行士三名が、人類として初めて月面着陸に成功したことを記念する碑なのである。なるほど高さが三メートルほど、横幅は五メートルにも及ぼうか、野外の大壁面にはクレータでデコボコとなった月面が広がり、彼方には地球が円形に望まれる。その月面に一人の人影が黒く横に印されているのだが、その真上にはアメリカ国旗である星条旗が立っていて、その旗が全体の中心となるような構図になっていたのが、私の目には何か政治的な意味付けを持って刺激的に映ったのである。幼い頃には敵国の象徴として、また学生時代には他国の自由と民主主義を弾圧するミリタリーな印として眺めて来た旗だけに、私の心の中で拒絶反応が生じたのも無理はない。

「この部分は削除したらどうでしょうか？　人類の代表として月に行ったのであって、アメリカの代表として行ったのではないのですから。」

私は星条旗を指差しながら、率直に感想を述べた。

「いや、事実は事実です。」

老画伯は厳然と言い放った。私の心のうちを見透かすようなその気迫に、私も直ぐに、他人の作品に干渉した非礼を詫びた。

その夜は広野駅の近くでどこか適当な宿を探して翌朝早く宝塚に向かうと言う私に、画家は信じられないほどの親切心を見せて、一人では不案内だから一緒に宿まで随いて行きましょうと言い、すぐ隣の家にでも行くような気安さで、遠慮する私に構わず、わざわざ暗い夜道を山を下りて駅まで案内してくれたのである。

「来る人来る人が、いつ、このガーデンは完成するのかといった愚問を呈するので、いちいち説明するのが面倒くそうなりましてな。」

道すがら老画伯はこんなことを呟いていた。

小さな町には旅館と呼べる宿はたった一軒しかないという。画家が其処に顔を入れ、一人泊めてやってくれと頼むと、出てきた宿の女は、

胡散臭そうに見すぼらしい乞食のような格好の老人を眺めたので、この土地では誰一人として老画伯を知らない者は居ない筈で、恐らく丁重に迎え入れられるものとばかり思っていた私は、期待に全く反して驚いた。画家の後ろに立っている背広姿の私を見つけたその女性は、私が泊り客であることを確かめると、漸く受け入れてもらえることになった。恐らくはその女性は土地の人ではなく、最近他所から移って来たのではないかと思われた。だが、老画伯はこのような非礼な応対にも怒りも見せずに、何の気にもしていない様子である。

ひとまずその宿に鞄を置いてから、私は老画伯と一緒に駅前の寿司屋に夜食を取りに立ち寄った。だがその店では今度は賓客を迎えるような態度で女将から饗応されたのである。この相反する対称的な二つの態度を敏感に感じ取り、私は、何かを画家に言おうと思ったのであったが、彼は先ほどの旅館で見せたのと同様の態度で、全く何の反応も示さない。私は、恥ずべき発言をしないで済んだのだった。

熱燗を二、三本空けてから、私たちは女将（おかみ）さんに見送られて店を出た。私には直ぐ近くに暖かい布団が待っているのだが、画家は、これから再び暗い山道を、誰も居ない寒々とした小屋に戻らなければならないのだ。旅館の前で、私は、暗闇に消えて行く老画伯の後ろ姿を見送っていた。そして、先ほど山を下りてきたときに、小屋の中で敷ききりになっていた布団の枕元で、ラジオが点けっ放しで大きく鳴っていたのが気になっても、その時には言いそびれていたことを思い出して、何か言い知れぬ侘しい感懐に胸が蓋がれたのであった。

その頃から私は、会社の仕事の都合で広島県の三原市にある工場への出張回数が増えていた。東京から三原へは寝台特急『あさかぜ』を利用していたので、西宮市を通過するのは真夜中である。それでも何かのおり偶然にフト気が付き、寝台を下りて車窓から札場筋を探したことがあったが、その狭い通りがどうしても見当たらず狼狽したことがあった。そのうちに昼間通過する機会があったので確かめることができたのだが、通りの道幅がいつの間にか倍以上に広げられて、主要幹線道路に変貌していることが判ったのである。その向こう側に望める阪急電鉄神戸線も高架になっていることは、かなり以前から『ラ・パボーニ』への往復の途次に気付いていたので、これは驚きの対象にはならなかったのだが、それにしても日本列島は、このわずかな年月の内に、少なからず「改造」されていたのだった。

一九七一（昭和四六）年十二月、私は七年余りの東京勤務を経て、再び大阪に転勤になった。

住むべき場所としての私の願いは、出来るだけ会社のアパートではなく一般の一戸建ての家を望んでいたのだが、それはなかなかに困難な要求であることは勿論承知していた。西宮から東京へ移っての初めの三年間は、国電中央線武蔵小金井駅からバスで十分前後の、武蔵野台地に開発された畑の跡に会社が建てたアパートで生活し、そこで次女が生まれたのだが、２ＤＫの窮屈なコンクリート箱の中での暮らしに慣れ

ず、実際は精神的なストレスが大分起因していると思われるのだが、妻は若いときに患った胸の病いが再発したと信じ込んで、そのとき偶々会社が借り上げていた民家で練馬の『豊島園』近くの家が運よく空いたので其処に転宅したのだった。その家で夕刻に強盗に入りかけられ、このときは妻の機転で隣人を装った犯人は玄関先で逃走したのだが、用心のため犬を飼うことにして、この妻の健康と飼い犬がいるという二つの理由から、アパート生活は避けたいという私たちの願いは、我侭なものというよりも切実なものであった。

しかし会社の従業員の住宅政策として、民間の借り上げ住宅（準社宅）は漸次に減らして行くと云うことだったので、やむなく私たちは、大阪の南部で奈良に近い柏原市にある会社のアパートに転宅することとなった。国鉄関西線で法隆寺駅から二つ西にあるその社宅に住むことは、私の趣味の一つでもある大和古寺巡りに便利がよいと思い直して、ともかくも私は転居を決心したのである。

十一月の末のある日、私は古代日本史に関する書物を携えて、柏原アパートを下見した。書物から期待していた河内飛鳥のノンビリとした環境に反して、私の目に写ったのは駅前のゴミゴミとしたマーケットと、その傍らを流れる染料で色付いた汚い川である。アパートはその大和（やまと）川に面して細長い四階建てが数棟建っていた。内部はかつて住んだ東京の小平市のアパートに比べると、最近急速に建築技術が進歩して来ているのか、または、東京と比べると土地代が安いがためなのか、広さも充分にあり便利に出来ている。だが内部を親切にも案内してくれた友人の奥さんが、私が訊きもしないのに何気なく、彼女の隣のヴェランダに飼われている犬が臭くて敵いません、アパートに犬を飼うのは禁じられているのにと呟いたのが強く気になってしまった。

翌朝大阪本社の庶務に手続きのために立ち寄った私は、どうしても柏原アパートしか空いていないのかと訊いてみた。

「犬を飼っているので、何処でもよいので庭のある民間の準社宅が空いていれば、多少狭くても構いません、勿論犬のために我侭を言うことが悪いことは重々解っているのですが、近所迷惑は避けたいので、犬を処分することにもなっては可哀想だし、また子供たちの教育上もよくないので、なんとかなりませんか？」

私は哀願した。

「いや、無くもないんやが・・・」

口籠った庶務係の態度を私は見逃さなかった。

「有るんですか？　有るのだったら何処でもいいですから、お願いしますよ。」

その家は芦屋市東北部の山麓にあった。私より入社が三年ほど先輩の、すでに課長になっていて半年前からニューヨーク事務所に赴任している人が家族を日本から呼び寄せるので、ちょうど十二月初旬に家を空けることになったのである。彼は著名な経済学者の息子で、奥さんの

実家がやはり芦屋の浜手にあって、資産家ということでその伝手でもあろうか、まだ若いのに芦屋の山の手という土地に立派な家を建てて三年というところである。

貧乏暮らしに慣れていた私たち一家にとっては、勿体ないような場所である。まして会社側や労組本部双方からの陰質な妨害工作と闘って、背後関係も無く、たった一人で初めから個人の立場で民主的な労働組合運動をしてきた私にとっては、二年間の任期満了まで東京支部の役員を務め終えて、初めから公言していた決意どおりに、掲げた選挙公約を一応は果たして退任したところである。当時私は、職制上は企画部に所属していたので、そこでそれまで与えられていたテーマとは異なった新規事業が発足するので、その子会社設立によりテーマを変えられて大阪に転勤したのであるから、不当労働行為にもなりうる理由付けである。だから、芦屋に住むことを希望したとしても、別に会社の労務政策上懐柔されたと見られるわけではない。それでも芦屋という高級住宅地の名前に気圧（けお）されたのか、私には何となく後ろめたい気が引ける思いがしないではなかったのだが、飼い犬のための庭付き一戸建てという条件には変えられないと思い、私はその家をぜひ貸してほしいと強く希望した。庶務係が口籠った理由は、察するに、部課長クラス向きの、シャッター付のガレージもあるかなり広い家、と云っても平屋造りの４ＬＤＫなのであるが、私のような平社員には、まず貸し辛いというのが本音ではないかと思われる。そのときに適当な有資格者で大阪に転勤する人がいなかったのか、それとも私の東京本社での労組活動が大阪本社の庶務係にまでは伝わっていなくて、要注意人物というレッテルが行き届いていなかったのか、または、これが本当の理由だと思うのだが、私の家族が、東京で生まれた次女に続いて二年前には長男も生まれていて、合わせて五名という、若手社員にしては平均以上の家族構成を考慮されたのであろう。ともかくもその芦屋の家を私に貸してくれることになったのである。

庶務係の了承を得るや直ぐに、私はその足で会社のある国鉄大阪駅の前に建つ『大阪神ビル』の地階から阪神電車に乗って、芦屋市朝日ヶ丘町のその家に向かった。芦屋川の上を橋渡ししたホームに降り立つと、すぐ北に屏風のように六甲の山並みを控えて、そこから落ちてきた水が、海近く人工的に設えた水路の上を浅く流れている。両側の道路より深く切れ込んだその水路は、内に芝草の河川敷があって、さらに一段低く中央に水流がある。阪神芦屋駅からは見えないのだが、この芦屋川の少し上流の更に下を国鉄東海道線が潜っていて、したがって、国鉄からは上にかかる橋として川そのものは眺められるのだが、このような幾何学的な設計をいつ頃したのかと思いながらも、かつて、いつだったか、たぶん大阪出張を利用してこの辺りを散策した折に、川の芝生で子供たちを遊ばせている人たちを見て羨望を覚えたことがあった。それが自分の手の届くようになることを知り不思議な気持ちになったのも嘘ではない。

朝日ヶ丘町は、阪神芦屋駅からは車で十分ほどの距離である。狭い長方形の形をした芦屋市の対角線を車は北に走って、六甲の下腹を切り

開いて造られた市の霊園の前で私は車を降りた。おりから強風が吹きすさび、初冬の山麓は思った以上に寒かった。

目指したその家は、霊園から右下に急勾配の坂道を下った所にある。ちょうど谷合いになっていて、そこからでも僅かに海は望めるのであるが、見晴らしのいい高台から広い海原が眺められるものと期待していた東京育ちの私は、いささか失望したのだがそれは贅沢というものであろう。

もともと芦屋市は六甲から海に沿った形で東西に町が開かれて、山側には西から山芦屋、山手、朝日ヶ丘それに六麓荘の各町となっているのであるが、その町々の境は明確に川や谷によって仕切られている。私の転居する予定の住居は、古くから開かれた高級住宅街として名高い山手町に境を接する谷合い、といっても三角形状のかなり広い地域で、東端のその家からは、西の山手町までは更に谷の中の小高い山を越えなければならないのだが、そのような所に新居は位置していた。数年前までは山の裾地の一部であったのを、開発の波に乗って宅地造成されたのであろう。山と海に挟まれた市は新たに開発する地域としては、海を埋め立てるか山を切り崩すしかそれよりほかは途がないのだが、山そのものを壊すのは風致上制約が大きいので、今まで放置されていた谷合いが対象となったものと思われる。

帰路国鉄芦屋駅まで歩いた私は、かつて西宮越水町に住んでいたときに、結婚までの間しばらく入っていた芦屋神社前の会社独身寮に友人を自転車で訪ねたことを思い出した。そのとき通りかかった見覚えのある風景を見付けて、この朝日ヶ丘町が西宮市、しかもその西部の、あの夙川界隈と隣接する位置にあることに気付き、私は、この引越しが単なる偶然以上の幸運によるものと思えてならなかった。歩いて行けないことはないがそれはチョット無理で、車のない私でも、自転車ならば簡単に行き来できる近さである。

この発見は私を喜ばせた。関西に再び引っ越したならば、またあの近くに住みたいものと、よく私たち夫婦は話していたのだが、それが本当に実現するようになったのである。夢のようにあまりにも巧い話である。下見をするまでもなく芦屋に転居することは決まっていたので、国鉄大阪駅前の会社に寄って庶務係に下見の結果を報告する必要はない。そのまま東京に帰る新幹線の車中で、私は何度か現実であることの確認をやってみた程であった。

私たち一家は、新居を選ぶ決め手となった肝腎の雑種の白い小犬ともども、一九七一（昭和四六）年十二月九日に芦屋に引っ越した。子供たちは年度が空けて新学期からという考えもあったのだが、上の二人の娘たちはまだ小学校の三年と一年生という低学年なので、それほど学力の学校差を云々する程ではなく、学期の途中でも転校に耐えうる弾力性は持っていると思ったので、そのまま連れて行き、一日休んだだけで翌日から平常通りに通学させた。

むしろ引越しに当たって困ったのは妻の精神状態であった。ひと頃よりは幾分落ち着いて来ていたとはいえ、このような謂わゆる取り込み事の最中ではまた不安定になるのではと気にしていると、案の定、私の母と姉が引越しの手伝いに練馬の家に現れた途端から様変わりして泣き出してしまい、心配した近所の奥さんで、高名な劇画家の夫人が親切にも新幹線の東京駅ホームまで一緒に付き添ってくれた。しかし妻の動揺は収まらず、その夜一泊した大阪駅前の阪神ホテルに入っても続き、次の朝、新居にすでに到着していた大型トラックから下ろした荷物の整理をしているうちに、やっと持ち直してくれたのであった。そのトラックで小さな檻に入れてわが恩義ある忠犬も運んで来たのだが、檻を開けるとフラフラとよろけながら鳴きもせず、その家でそれまで飼われていた犬の大きな小屋に、強い臭いが残っているのでどうかなと私は思っていたのだが、何の抵抗もなく入って行ったのは見ていて可笑しかった。おそらく生きた心地もなく一晩揺らされ続けながら、真っ暗な車中でたった一匹、何処に連れて行かれるのかと怯えていて、判断力も無くなっていたのであろう。彼も無事に引越しを完了したのである。

引っ越してきて最初の日曜日、結婚当初の何にも無かった頃とは違って家財道具も増えていたので時間はかかったのだが、その片付けも一段落した後、私たち一家は、早速夙川に行ってみた。私はあれ以来何度か訪れた場所なのだが、妻にとっては、一度だけ、九州の彼女の実家に里帰りの途中に寄って以来五年ぶりのことである。子供たちにとっては、上の二人の女の子はその際に妻と一緒に連れて行った筈なのに、なにぶんにも記憶を残す年頃ではなく、一方、下の男の子は、もちろん関西自体が初めての土地である。

私たちは『ラ・パボーニ』を訪れ挨拶を交わした。老画伯は相変わらずに三田（さんだ）の山に行っていて店には居なかった。彼に会えなかったのは残念であったが、奥さんが私たちとの再会と、近所に再び帰って来たことを素直に喜んでくれたので、私たちも嬉しかった。妻は、以前、西宮から東京に移る際に店に置いてきた鉢植えのサボテンを懐かしげに覗きこんでいる。その鉢植えは、南欧風の店内の雰囲気によく溶け込んでいた。

その足で私たちは、まだ幼い三歳の男の子の手を引きながら札場筋に向かった。途中、長女の生まれた分銅町の産院の前を通り過ぎたとき、ここでお前が産まれたのだと教えてやると、やっぱり私拾われて来たんじゃないのねと逆襲されて、私たち夫婦は苦笑せざるを得なくなった。

札場筋に出ると、道路の拡張は革命的な印象を私たち夫婦に与えた。古めかしい通りの名称がそぐわない程の変貌である。切れ目なしに走る車の列の向こう側は、簡単には渡れない対岸として、こちら側から切り離されて、独特の新しい商店街を形成していた。あの狭い、カタコトと溝の上の石蓋を歩道として歩いたつい数年前の面影は、その欠けらも残していなかった。名実ともに西国（さいごく）街道は、以前住んでいた我が家の前を通り、阪急の新しく出来た高架を潜って札場筋に抜ける道が本道となったのである。だが、道路の西側は、元のままであ

る。昔懐かしい店の並びが、現実にその前を歩くことによって鮮明な記憶となってよみ帰ってくる。その中の一つに『フタバ写真店』もあった。『三分間撮影』の置き看板が、店の前の歩道の敷石の上に、昔と同じように据えられている。

「こんにちは小父さん、暫くでした。」

私たちがガラス戸を開くと、写真屋の小父さんは、昔と変わりなく、店の左隅に椅子に腰掛けて座っていた。

「アッ、ア、ウゥ！」

小父さんは、軽く吃（ども）ってから、

「ああ暫くや・・・」

と言いつつも、必死に私たちの名前を思い出そうと努力していた。膝に毛布を掛け、足温器に両足を突っ込み、狭い三坪にも満たない店の中はガスストーブが赤々と顔が火照るほど点けられていたが、すっかり年寄りらしい恰好になっている。何より左耳から垂らした重そうな補聴器のコードが痛々しい。

「小母さんは？」

いつも仲良く店番をしていた小母さんの姿が見えないので、妻が当然のように尋ねてみた。

「死にました。」

白髪をきちんと整えた端正な顔をキッと見据えるようにこちらに向けて、老人は平然と言い放った。

「今年の夏死にました。卵巣癌で、まる一年苦しみましたが、この八月二十一日、とうとう息を引き取りました。」

意外な答えに、私たちは瞬間、異様な思いに胸が蓋がれるのを感じたのである。

小父さんはそれから、問われるまでもなくきわめて具体的詳細に、彼の長年連れ添った小母さんの死に至る経過を私たちに説明し出したのであった。

初めの兆候としては腹が異常に膨れだして来たこと、複数の医師の診立てと、それに応じて病院も何度か変えたこと、痛みは相当に激しく、その苦しみは傍で見ているのに忍びがたい程であったらしい。綿密なその説明に一緒にいた子供たちはすっかり飽きてしまい、それに室内の暖房が彼らにとって耐え難くなって来ていたので、私は妻を店に残して二度も中座して、チョコレートやガムを買うために、三人の子供と一緒に表に出たほどであった。

小父さんの懸命の看病の甲斐も無く、一年余りの闘病の挙句、小母さんの命数の尽きたのは如何ともし難かった。

「寂しかったら一緒に死んでやるよ。」
小父さんは言ったそうである。だが小母さんは小父さんに、あなたは長生きしてくれと言い残して、暑い真夏に、後ろ髪を引かれるように逝ってしまったという。
老人夫婦には一切の身寄りが無かった。長崎県對馬（つしま）出身の小父さんの方は、幼時に両親と姉を亡くしての全くの天涯孤独。一方、小母さんの方は、関西の人ではあるが、親兄弟とも断絶の状態であったという。理由は判らないが、恐らく、旧制高等女学校出身の小母さんが、小学校しか出ていない遠い他国者の小父さんと一緒になったことが原因しているとか、いつぞや、妻が言っていたことがある。それが真相なのであろう。子供のいない二人は、どちらが欠けても残された方は一人ぼっちになってしまう。まして、現に残された方の小父さんは、私たちが数年前に西宮に住んでいたときに罹った脳溢血の後遺症で半身不随の状態にあり、更に、持ち前の潔癖な性格から人付き合いのいい方ではないらしいので、小母さんにとってはさぞや心残りのことであったろう。
だが幸いなことに、身寄りは無くとも親身の付き合いをしている人は無くも無いらしい。写真屋さんの自宅は店ではなく、札場筋から少し離れた夙川の下流の堤の横にあって、其処に、今でもそうなのだが下宿人を二階に置いている。その中の一人で、既に十数年前に居た男の人がいる。写真屋の夫婦が媒酌人をしてあげて現在京都で印刷業を営んでいるらしいが、小母さんが亡くなったときにはその夫婦がやって来て葬式の世話を湯灌に至るまで一切やってくれたという。小父さんは徹底した無神論者なのでこのような死者儀礼はむしろ忌み嫌う方で何もしなかったそうだが、それでも近所の人たちが焼香に来るので、香炉の代わりに洗濯ばさみに線香を立てていたという。小父さんは、小母さんの遺体を、かねて二人で話し合って決めていた手筈どおりに、阪大病院に研究用として寄贈し、目の角膜はアイバンクが直ぐに取りに来たという。亡き骸は今頃大阪の大学病院の薄暗い研究室で、ホルマリン漬けになっていることであろう。一年経った来年八月には、病院はその遺体を小父さんに返還してくれるという予定である。其の時までは、と小父さんは言うのだが、喪に服して店を守っているつもりだが、小母さんが家に帰ってくる八月の半ばには、
「私は死にますよ。もう思い残すことは何も無いんじゃから・・・」
嘘か真かさり気なく小父さんはそう言って、私たちをギョッとさせた。
写真屋の小父さんの話は哀れだった。涙も見せず淡々として、よく回らぬ口で語る年老いた孤独の人の態度を目の当たりにすると、一層気の毒でならなかった。
私たちはその夜、芦屋の家に帰っても気が重かった。せめて子供でも一人居たらよかったのにと言ってみたところで始まらない。小父さん

の方が先に死んだ方が良かった、男が後に残るのは悲劇である、というのが、子供たちが三人も居ても、私たち夫婦の一致した結論であった。

「だから、先に死ねないのよ。」

妻はそう言い、私も

「そうさ、俺が先に死んでやるからな。」

と、相槌を打った。

正月の二日、年始周りに私たち一家は自転車で夙川に出かけた。『ラ・パボーニ』には、新年を迎えて案の定、老画伯は在宅していた。画家は、私たちが再び関西に帰って来たことを喜んで、特にすぐ近くの芦屋に居を定めたことを歓迎してくれた。日本の中で、この西宮から芦屋、御影（みかげ）にかけての阪神間の山麓が最高であると彼は力説していたが、それには私も同感である。谷崎の『細雪（ささめゆき）』を引用して私は、戦前の芦屋、夙川界隈の描写が今でもそのまま通用するほどに、その頃の面影がまだまだ色濃く残されていることを述べたところ、老画伯は、『大谷崎』と往時の呼称を用いて、文豪兄弟の兄『潤一郎』の方を弟の『精二』と区別する言い方をして、谷崎といえば潤一郎のことと決めていた私を少なからず感心させた。その大谷崎が昔よくこの『ラ・パボーニ』の店の前を歩いて馴染みのおでん屋に通っていた姿をよく見かけたものだと言う。そのおでん屋とは何処にあるのだろうか？　『細雪』にも確かこの辺り、特に一本松から国鉄の土手の横腹を刳（く）り貫いたマンボウを潜って阪神国道に出る描写があるので、その近くかも知れぬ、などと私は勝手に想像した。一本松はちょうど『ラ・パボーニ』の前を東に少し過ぎて右に細い路を曲がると中央に生えている老松で、保存のために由緒有り気に囲われているのだが、マンボウの方は、トンネルとは別の言葉を特に用いていたので、その言い方が珍しかったので私は覚えていた。オランダ語で、短いトンネルを指す言葉らしい。一般的にはガードのことなのだが、地元の人の用語らしい。

「正月はしばらく此処に居て、松が取れればまた山に引き返すのです。」

老画伯はそう言った。

「冬の方がいいんですよ。夏はいけません。暑うて敵わんのです。冬は汗をかきませんから、仕事が捗（はかど）るんです。」

冬の寒気を慮った私の言葉に、彼はそう答えた。紙巻タバコの『新生』を節くれだった太い指に挟んで、何度も短くなるまで喫い続けながら、老画伯は、青年のように瞳を輝かせていた。大変な意欲である。

その日『ラ・パボーニ』の次に立ち寄った『フタバ写真店』で小父さんは、正月なのにいつもと変わらぬ服装で店番をしていた。妻が持っ

てきたお節料理について、こんなに気を使わんでもええのにと礼を言いながら、京都の知人が買うて来てあげようかと言うのを断ったなどと話した。

「そうよ、京都の錦（にしき）市場のお節は有名よ。でも、うちで造ったこの料理も味はいいのよ。」

京都でしばらく独身時代働いたこともある妻が、この数年の東京暮らしですっかりその関西弁が改まり、完璧な標準語で応じていた。

「もう面倒臭うて、正月も何もないわい。」

小父さんは笑っていた。そして私たちが帰る際にも、この八月には自殺するつもりだと強調していた。

私たち一家の芦屋住まいは、想像していた以上に快適なものであった。子供たちも直ぐ土地に慣れ、使う言葉にもたちまち関西訛りが現れてきた。私個人にとっても、この芦屋暮らしはまるで天国のように快適な通勤を保障してくれた。東京でのあの地獄図さながらの一時間以上にも及ぶ通勤ラッシュが、まるで何処か他の国の出来事であったかのようである。毎朝子供たちを送り出してから、霊園前のバス停でガラガラの始発の阪急バスに乗って、よく整備された急勾配な舗装道路を下って行くと、子供たち十数人が隊伍を作り一列になり、高学年の上級生に引率され市立芦屋病院前の桜並木の連なった坂道を下りて、岩園小学校に登校するのに出会う。その列をバスの後部座席から窓越しに手を振りながら追い抜いて、一〇分程で国鉄の芦屋駅に出る。そこからは、偶に西ノ宮駅に一度停車する電車に遭遇することもあったが、殆どはノンストップの快速電車で二十分足らずで大阪駅前の会社に着く。快速電車では立っていても大阪まで自由に新聞を広げて読めるのだが、各駅電車でなら確実に座れて五分遅れで着くのであるから、本来は日本の何処でも通勤はこうならないといけないとは日頃思っていたのが、それが当たり前ではなかった東京の状況が、まるで遠い昔のことかのような楽な往復であった。

通勤電車の車中では、私は北側の車窓を眺めやるのを常としていた。芦屋駅を出て直ぐに、六甲の山並が東端で尽きる光景を目で追っていると、夙川の堤にやがて電車は差し掛かる。私たちが以前西宮に住んでいたころ、カイツブリが自然の趣を残した池の水に頭を突っ込んで餌を探す姿を、私たち夫婦はよく夙川の堤の上のベンチから眺めていた。その池を干して造られた松下幸之助の寄贈になる公民館が、今は池の上に浮くようにして白い姿を見せていた。その建物を前景として、甲山（かぶとやま）が朝日を受けて美しい姿態を現して来る。その姿を見るのが毎朝の通勤時の私の楽しみであった。十年ほど前までは山火事で右半分が焼け禿ていたが今では全体を草が蔽っている。地質学的には厳密にはそうではないと云われるこのトロイデ式の死火山は、六甲連山の東の外れに飛び出たような位置にあるがため、武庫川の鉄橋を電車が渡り切るまでの間、クッキリと形を際立たせていた。まるで妊婦の突出した腹部のようにユーモラスなその半球状の山形を、閨房を共にす

る気安さから、妻が妊娠するたびに例としてこの山を引用して揶揄したものだった。自分の責任を棚に挙げて妻の人格を傷つけたことを、今は反省しているのだが、そういう例もあながち的外れにはならない愛すべき山なのである。このように、ドア・ツウ・ドアで、バスの待ち時間を入れても片道四十分という優雅な通勤時間であった。

その年の冬は暖かった。特に二月の前半までは異常な暖冬で、私たち一家は、土曜日の午後と日曜日になると決まって軽装で外出した。土曜日は会社が終わるや直ぐに駅に走り、まるで閑散とした空っぽの快速電車に飛び乗って、午後一時までには家に帰り着いて、ゆっくりと子供たちと一緒に昼飯が食べられた。だから、まだ完全な週休二日制に移行していなかったとはいえ、土曜日でもまるまる半日は自分の時間にできたのである。

大阪本社に転勤する前の東京本社ではそうはいかなかった。通勤時間が長かったばかりではなく、私の仕事が残業、残業の連続で、日曜出勤やら土曜日まで暗くなるまで働かされたのである。大体、残業というのは私の居たスタッフ部門の場合、販売など営業部門のように客相手の商売で本当に仕事が忙しいという場合とは異なって、むしろ上司の性格から無理に強いられる要素が大なのである。私はそのような仕事のやり方に反発して、自分の自由な時間を確保するために、たった一人、誰からの誘いも受けずに組合運動に頭を突っ込んだのであった。そのために二、三年の間、かえって自分の時間を失う羽目になり、土、日などもレクレーション活動で忙殺されたのは皮肉であった。もともとそのような個人生活の防衛的な理由から、我（が）を通した組合活動であったので、会社ばかりでなく労使協調路線を本旨とする組合本部や他支部の扱いかねる存在となって、陰に陽に、執拗（しつよう）な嫌がらせやら干渉を、双方の関係者から受けて来たのである。そのような圧力に対しては、私は何ら怯（ひる）むことなく敢然と立ち向かったのであるが、自分の時間まで更に犠牲にして、人生上の使命感を労働運動に見出すほどの情熱は初めから持ち合わせていなかったので、従業員だからとて決して扱い易い道具ではないのだという強い個性を会社に解らせたと思い、初期の目的も一応は達成したと判断して、一期二年の任期が終わると、サバサバと労組東京支部長としての非専従の役職を下りてしまったのであった。

二年前には、会社の立てた大学の先輩候補者を破って選挙に当選したので、私を支持してくれた民主的な組合員は多かったのだが、いずれも密（ひそか）な支援であって、表立って支持を鮮明にしてくれたのは会社では高校卒、短大卒の補助作業職の女子組合員が中心で、他の大学卒の謂わゆるエリート社員は、秘密選挙で投票はしてくれても公然とは姿を現してくれなかった。したがって、このような若い女性組合員のいろいろな相談事を、昼休みや終業後に喫茶店などで聞いてやることが組合活動中自然に多くなり、礼状などが家に来ることもあって、そ

れが妻の機嫌を損ねて家庭不和の一因ともなったのも、組合運動から手を引く他の理由でもあった。後継者と私が頼んでいた数少ない大学卒の社員で執行役員として私に協力してくれていた若い男性も、会社が組合本部の了解を取り付けて、はるばる南半球のオーストラリアのシドニー駐在員事務所に転勤が命じられていて、私の後任としての立候補は阻まれてしまっていた。私に代わって東京支部長の役職は、会社の息の掛かった同期入社者が、多くの不信任票を貰いながらも、対立候補も無く選ばれていた。私は、内心で女性組合員も含めて多くの支持者の期待を裏切ったことに申し訳ない気持ちではあったが、二年前に立候補した際の公約通りに再選に立ち向かうことなく辞めたのである。もしも次期に立候補したとしても私は勝てたことであろうが、協力者となるべき手足をもぎ取られ、本社での女子従業員の労働条件の改善や、隔週休二日制の実現など当初の多くの公約も一応達成したので、次の二年間は極めて不本意で、実りがないというよりも後ろ向きな支部の組合運営をやらされることも解っていたので、身を引いたことを心の中でこれ等の支持者たちに詫びていた。

大阪の子会社での私の業務内容は楽なものであった。まだ事業の立ち上げも先の話で、造るべき新製品の技術も未完成だったので、技術者は日夜大変な苦労をしていたが、事務系の私には、余裕が出来ていた。東京の企画部時代には、労組支部の最高責任者になっていたとはいえ非専従だったので、組合と会社の両方の業務をこなさなければならず大変な激務だった。おりからアクリル繊維の事業化検討という会社にとって最重要課題に従事していたので、賃上げ交渉で他支部の専従支部長たちが中央での労使交渉の結果をノンビリと上野の旅館で待機している間でも、私だけは会社に帰って一人夜を徹して計算機を叩いていたということもあった。だから組合から離れての大阪での子会社生活は、今までの代償として神が下さった自由な時間なのだと、私は専ら土曜の午後と日曜は解放的な私生活を満喫できたのである。

私たち一家は、外出にはよく自転車を利用した。我が家には子供用を含めて自転車は全部で五台あった。一番下の長男だけはまだ二つだったので、補助輪の付いたのを持ってはいたが、遠出するときには、私の頑丈な黒い実用自転車のハンドルに子供用の椅子を取り付けて、それに座らせるのだが、長女、次女それぞれも自分たち専用の中型の自転車に乗って随いてくる。東京で彼らは、一度など練馬の『豊島園』近くの家から、埼玉県新座の平林寺まで、幼い長男まで一緒になって往復しても平気で自信を着け、二、三時間乗り続けても大丈夫だった。

芦屋の新居には、どこの家にもあるように、急坂を刳り貫いて造られた大きなガレージが備わっていた。近所の屋敷ではその中に一、二台の自動車を保有しているのが当たり前である。国鉄の駅や、その近くの関西では有名な生協の『コープ』に買い物に行くには自動車がなければ不便なのは解っていたのだが、我が家は東京にいたときから自動車を持っていなかった。結婚当初は経済的な理由のほかに、まだ世の中一般に車は普及していなかったので当然だったが、その後急速にマイカー時代になっても、本社での残業に追いまくられ、工場経験者なら楽に

取得していた運転免許も、工場への勤務が無かった私には運転練習に教習場へ通う時間的余裕がなかったので、それで持っていなかったのも理由の一つである。それよりも、多くの窮屈な規則に縛られる自動車の運転は、私も妻もそれほど必要性を感じていなかった。特に私は、妻が異常だと笑うほどに自転車が好きで、東京小平市のアパート暮らしのときに手に入れた中古実用自転車を、暇さえあれば乗り回し、長女、次女、長男と、まるでそれが育児の重要な過程のように、幼い頃から前に乗せて、あちこちと走り回って大きくしたのである。そのようなわけで、芦屋に移っても、大きなガレージは自転車専用置き場となってしまい、周囲の高級住宅の住民の顰蹙（ひんしゅく）を買っていたことであろう。しかしこの芦屋の家は斜面のきつい場所にある。往きの下りるときはよいが帰りには、自転車では急坂を押し上げなければならない。それでもみんな、「運動！運動！」とばかりに意に介さなかった。一月末の暖かい日曜日などには我が自転車部隊は甲山まで遠出した。そのように西宮まで足を延ばしたときには、必ず私たち一家は、札場筋の写真店に顔を出し、その帰りがけには『ラ・パボーニ』に立ち寄って、お茶を飲むのを常とした。

二月六日の朝のことだった。日曜日に限っていつものごとく不思議に早く目の覚める私は、新聞を玄関から取ってきて、一人リビングのソファで広げていた。社会面の下段の記事を何気なく見て、私は驚いた。

『荒野のゴッホ死ぬ。享年七十六歳』

そこには老画伯が笑っている写真とともに死亡記事が書かれている。葬儀はその日午後一時自宅にてとある。私は大声を上げて、まだ寝ている妻を起こした。山で死んだのであろうか、奥さんはさぞお嘆きだろう、これから『アートガーデン』をどう運営していくつもりだろうか。

朝食を済ませ、私たち一家はそろって家を出た。空はどんよりと鉛色に曇って、雨が降り始めてきた。肌寒かったので私は、フードの付いた黒いコーデュロイの厚手のヤッケを着込んで、子供たちにも厚着をさせて連れて行った。この私の服は、芦屋に来てからすぐ、西宮の恵比寿神社前の衣料店で見付け、一時親しくしていた練馬の劇画家が似たものをよく着ていたとの理由から妻が買ってきて私に宛がってくれたのだが、一緒に吊るしてあった赤い色の同型を買いそびれ、後で店に行っても無かったとして、妻が後々まで悔しがっていた、曰く付きのコートである。

千歳町の『ラ・パボーニ』の店の前には既に多くの人々が集まっていて、建物には黒白の幕が張り巡らされていた。人々は雨を避け、それぞれが近くの商店の軒先に張り出した陽避けのテントの下に並んで待っていた。

厚かましいと思ったが、私たちは店の中に入って行った。だが其処には誰もいなく、喫茶店の西側で、いつもは閉まっている会議室が式場

で、遺族が詰めているのが判った。そこは三十平方メートル前後の小さな洋風の正方形の一室で、老画伯の創意で、壁には花や鳥が刻まれていて、喫茶室とは対称的にピンクを主体にした明るく淡い彩色が施されて、全体として華やかな雰囲気が醸し出されていた。そのときは注意が散漫で店名が由来するパボーニ、つまり孔雀が描かれていたかどうか覚えていないのだが、多分中心に描かれていたことであろう。昔は学生たちの会議室として開放されていたのに、最近では利用されることも無かったようで、私も初めて入った部屋であった。ちょうど読経が始まって、奥さんに挨拶する機会も無さそうだったので、私たちは直ぐに店の前の道路に出て待つことにした。

雨はそれほどの降りではなかったが冷たかった。式の進行を眺めながら、私は聞くともなしに近くの人の立ち話に耳を傾けた。老画伯はたまたま山から自宅に帰っているときに心臓の発作に襲われて、病院に運ばれて手当てを受けつつ三日前に息を引き取ったらしい。奥さんも看病することが出来たことだし、本人もちゃんと我が家に帰ってきて他人に迷惑も掛けず、思いやりがあって、それでいてあっさりとした、いかにも芸術家らしい理想的な最後だったと、私は感心した。

儀式は葬儀社の係員のハンドマイクによる手馴れた誘導で、きわめて事務的に進められた。読経が終わると焼香が始まって、親族から順に祭壇に導かれ、最後に一般参列者が巡る。西宮市長とか、県会議員、市会議員の名が次々と呼ばれたので、肩書きの無い私たちは遠慮して、行列の最後尾にくっついた。五十名足らずの参列者の列は直ぐに短くなっていく。私たちが室内に入ると、中央の祭壇に祭られた柩には白い布が掛けられ、その上に老画伯の写真が置かれてあった。通常このような葬儀に飾られる故人の遺影は、私のそれまでの経験では、黒っぽい礼服を着用した、畏（かしこ）まった顔付きのものが多かったのだが、画家は断髪のまま、キョトンとした顔でこちらを見つめており、その姿は大変にユーモラスで爽やかな印象を私は受けたのである。

出棺の後で、後続のハイヤーに乗り込む喪服姿の奥さんを認めて、妻がようやく挨拶をすることが出来たのは来た甲斐であった。目を赤く泣き腫らして悄然となったその姿が痛ましく、昨年の夏、写真屋の小母さんに死に別れ、一人残された小父さんもこうであったかと私は推し量った。

パボーニの画家の急死の後にも、私は夙川界隈に足を向けることが多かった。毎週土曜、日曜日はほとんど必ずと云ってよい程、私は一人で、自転車で西宮に出た。芦屋の家から阪急夙川駅の前に出るのには、道順は幾つかある。いつも私が採るコースは、市立芦屋病院の前を横切って、芦屋市と西宮市との境に小山を刳（く）り貫いて造られた約百メートルの岩園（いわぞの）トンネルを下る。オレンジ色のランプが点いた、ほとんど車の走っていない近代的な隧道を、ブレーキも掛けずに自転車を走らせるのはきわめて快適である。トンネルを抜け、その

まま一気に阪急甲陽線という、夙川駅から甲山山麓の甲陽園とのわずかの距離を走る支線の苦楽園口駅前を、右に曲がって夙川堤を走るというのがその一つのコースである。もう一つのコースは、トンネルを出たところで右に入り、深谷町、高塚町、木津川町、殿山町と名付けられた閑静な住宅街の一角を走って、ちょうど右下を走る阪急神戸線に出て、雲井橋という古い石造りの陸橋を渡ってから、例の『アートガーデン』に祀られたブスケ神父が居たカソリック教会の横に出る途である。特にこのコースは、高低の変化があり、また高級住宅の中を屈折する道順にはさまざまな選択ができ、植物に恵まれた、個性ある大邸宅の立ち並ぶ佇まいを観賞しながら走れるので、好きな道順であった。

かつて越水町に住んでいた新婚当初、国策の銀行に就職していた大学時代の親しい友人が東京から訪ねて来たことがあった。彼は職場の女性と関西旅行を楽しんでいたのだが、夜は彼女だけは知り合いのいた夙川の銀行の寮に泊まったので、その寮を私たち夫婦とともに訪問したことがある。その女性と彼はてっきり結婚するとばかり私たちは思っていたのだが、結局はそうならず、彼にとっては触れてもらいたく思い出のその寮を、雲井橋を自転車で渡って夙川に行く途中、近くだと思って探そうとしたが判らなかった。友人と寮を訪ねたその時の印象が強かったのか、東京に転勤した後でも、何度かそのシーンを夢に見ていたので、確認のために、雲井町、木津山町あたりに多く見かけられる銀行のアパート群を調べてみても失望させられるだけであった。最初に歩いた記憶が曖昧なのか、夢の光景が架空なのか、それとも、その後の都市計画で大規模工事が施されたのか、そのいずれかであろう。確かに道路の拡張工事は全国的な風潮からもいたるところで行われていて、西宮のこの辺りでも、阪急夙川駅の西側の狭いガードを潜り抜けたところなどでは、北に向かって道幅が拡げられ堅固な舗装道路が続くなど、数年前にはなかったことなのである。

『フタバ写真店』に寄るのに、私は努めて口実を設けて、小父さんに気を遣わせないように気を配った。相手の商売を考えると写真の現像焼付け（ＤＰＥ）を頼みに行くのが一番自然なのであるが、生憎わが家にはまだカメラが無かった。結婚生活約十年、子供も三人出来て、文字通り無一文から出発したわが家でも、日用の必需品として一般に急速に普及しだした洗濯機、冷蔵庫、カラーテレビの三種の神器は一通り揃えられるようにはなっていた。もっともカラーテレビは、西宮から東京に引っ越す際に買った白黒のテレビが、芦屋に移る半年前に七年で寿命が尽きてしまい、修理にやった電気屋が頼みもしないのに強引にカラーの方を置いていってしまったものであるが、その他の電気製品で欲しかったステレオとカメラまでは手が届かなかったのである。カメラは買おうとして買えない物ではないのだが、日用の必需品の方を優先させて、どうせ買うのなら性能のよい物をと思っていたので、東京に居る間は、国分寺市に住む両親から古いドイツ製のツアイス・イコンを借りて間に合わせていたのである。そのような訳で写真店に寄るのにＤＰＥを頼むという手だてがないので、専ら書物、それも当時再認識さ

れ始めていた種田山頭火（さんとうか）の伝記とか、あるいは私が自費出版した、入社直後に瀬戸内の工場で新人教育を受けていた際知り合った妻との出逢いについて書いた、『実習期』と題する拙い小説を貸すことを思い付いて、それらを口実にしていたのである。

一度など、これは我が家にとって初めてのことなのだが、記念の意味で専門の写真店で家族写真を撮ってもらおうと思い立ち、『フタバ写真店』での狭い店内で、特別の照明を点けて撮ってもらったこともある。撮って貰ったこの写真を見ても思うのだが、小父さんの写真屋としての腕は確かなものである。構図の採り方など素人とはさすがに違っていた。店内に飾ってあった幾つかの作品を眺めても、いずれも美しいものばかりである。専門的な鑑識眼は無いので私には本当のところは解らない。それに小父さん御本人がその徹底した芸術家気質から、展覧会とかコンクールなどへの出品を邪道と決め付けていたので、業界や世間一般の評価を窺い知ることは出来ないのだが、見る人が見れば、相当の腕前の写真家と見做されたかも知れぬ。店の片隅に無造作に積み重ねられていた、大部分が白黒四つ切りの写真の束を取り上げて眺めたこともあったが、二条城や彦根城などの城郭、修学院や選入寺などの庭園に優れた構図を示し、一昔前の海水浴場であった直ぐ近くの香炉園の浜で、網を繕う漁師の赤銅色の背中など、当時の写真が白黒であるだけに却って強烈な効果を表していた。最近の作品では、まだ小母さんの病気が初期の頃、連れ立って行った万国博覧会の会場で撮ったカラー作品に佳品があり、ソヴィエト館で陳列してあった黒海沿岸にある小共和国の偶像を望遠レンズで捕らえて、それを数葉、額に入れてショー・ウインドに飾っていたが、それらの作品は、色の濃淡にブレが無く、描いた絵のように、赤紫のバックを背にして人形が浮き出るように撮れていた。

それまで私たち夫婦は一度も写真屋の小父さんの住居の方へは行ったことがなかった。二月の下旬のことと思うが、夜、初めて其処を訪れる機会を持った。その家は阪急夙川駅から少し下流の、阪神国道に架かる夙川橋の傍にある。それまでに妻は何度も小父さんから、亡くなった小母さんが残した物で使えそうなものを持って行ってくれと言われていたらしいが、特に急ぐほどのことでもないので、そのままにしていたところ、その日再度電話があって、小母さんが入院中に見舞いに来た人から貰った人形があるので、是非子供さんに上げたいからと言われたらしい。雛祭りも間近いことでもあり、それに一度は訪ねておかなければと思っていたところでもあって、妻も、小父さんが札場筋の店の仕事から帰ってきたところを訪ねると約束したそうである。会社から帰ってきたばかりの私に、妻は、相手が年寄りとはいえ、夜、一人暮らしの男の家へ出かけるのは嫌だと言う。物を貰うために他人の家に押し掛けるのは私も気が進まなかったのだが、仕方なく家族みんなで一緒に行くことになった。夙川橋のすぐ近くというので、阪急電車を降りてから阪神国道に出て、その端の東側を探したのだが結局判らないので電話してみたところ、待つほどもなく橋の西側の袂から登るように下から老人が現れて、私たちを手招いた。暗かったので判らなかったが、

近付いてみると、駱駝のシャツにパッチという下着姿のままである。
「年寄りってイヤねえ。」
と妻は小声で囁いた。
老人の家、と云っても借家なのだそうだが、その家は橋の西端の交番の横を、土手の上を国鉄の線路に向かって少し進んだ堤の下にあった。数軒同じような木造の二階家が並んでいて、そのうちの一軒である。もう大分年数が経って、古びて薄汚れてはいたが、借りた当初は、かなりの家格の借家であったことは容易に偲ばせられるものである。下に玄関の間をいれて三部屋、上が二部屋で、その二階は学生姉妹に転貸しているとのことである。小父さんが家主に支払う家賃は月々四千円に足らないというまるで嘘のように安い家賃だそうで、それでも彼から言わせると、借りて以来、瓦の葺き替え、壁の塗り替えその他の修復は一切自分がやってきたのであるから、家主が家賃を取れた義理はないということになるのであるが、その安い家賃よりも高い部屋代を、又貸した姉妹二人から貰っているのだという。
家の中に上がった私たちにはすぐに、本箱の上に飾られた写真が目に入った。小母さんの遺影である。
「変わっていないわねえ。」
いつ頃撮った写真なのかも判らないのに、妻は、まるで十年ぶりに会った知己に対してのような言い方をした。
小父さんは私たちに、床の間の掛け軸や長押（なげし）の扁額に書かれた唐詩を説明し、古いアルバムを持ち出して来て見せてくれた。アルバムは一冊きりで、それもたったの数ページしかないものである。中には、自分の幼い頃から、最近亡くなった小母さんのものまでが、まことに数える程度しか貼ってなくて、写真屋さんなのにこれではまるで紺屋の白袴ではないかと私を驚かせた。そのアルバムを見て、私は、彼が對馬出身といっても幼時は朝鮮で育ったこと、また若い頃、単身でビルマを始め、東南アジヤ各国を回ってきた人であることを知った。日頃口癖として、「わしはしたい事は何でもして来たのやから、もういつ死んでも思い残す事は無い。」と言っているのも頷けた。
子連れとて夜に長居はできないので、私たちは人形のケースと、小母さんが愛用していたという古い針箱と、さらに、菓子用の小皿も持たされて辞去することにした。帰りがけに私たち一家は、本箱の前に正座して、小母さんの遺影に対（むか）って線香を上げた。聞いていたのとは違って、ちゃんと線香立てが供えてある。私は般若心経を唱え、子供たちは揃って目を瞑って手を合わせていた。無神論者の小父さんは顔を紅潮させて痛く感激している。
「ええ躾（しつけ）じゃ。家庭がしっかりしていると立派な人間ができる。」
そう言って長男の頭を撫でてくれた。

表に出て直ぐに、暗い夜道を夙川堤に登って行く途中、ガチャンと音がして、妻の手から皿が一枚滑り落ちて割れてしまった。

「小母さん、きっと心残りなんだわ。」

妻はそう呟いていた。

風は無かったが、真冬のこととて冷えてきた。サラサラと川底を流れる微量の水音が耳に響いている。その夙川の堤を国鉄の線路に向かって直ぐに、地蔵を祀った小さな祠の前で石段を伝わっていったん川底に下り、子供たちに足許に気を付けるように注意しつつ真っ暗な小道を国鉄の鉄橋の下を潜って再び土手に上がると、そこは公民館の池である。阪急夙川駅は数百メートル先ではあったが、下の息子が今にも眠りそうだったので、私たちは日頃の習慣を捨てて、駅前でタクシーを拾って芦屋に帰った。

パボーニの奥さんは、画伯に死なれてから急に窶（やつ）れてしまった。あいにく風邪を引いたとかで、二月の末に私たちが店を訪ねたときは目を赤く鼻を詰まらせていたが、病気だけのせいでないことが解るだけに却って痛々しく感じられた。だが彼女はしっかりと運命に立ち向かおうとしている。これからの生き方をもう決めていたのである。月曜日から土曜日までは店を毎日守り、日曜、祭日には亡くなった夫に代わって『アートガーデン』に出かける決意を述べていた。しかし果たして長く続けられるものか私には危ぶまれた。

この芸術の園の将来は、単なる個人の資産として放置させておくべき種類のものではない。奥さんも私同様にそのような考えである。彼女は地元の文化人としてその名も全国的に著名で東京都知事候補にもなったことのある元兵庫県知事に相談し、ガーデンの運営、管理を兵庫県か三田市に任せるか、あるいは資金の援助を仰ぎたいような口ぶりである。その元知事は私と同じ芦屋の朝日ヶ丘に住んでいると言うので、早速私が後で調べてみると、私の住む家から下に僅か五、六分南の坂の途中に、古い和風の家を探し出すことができた。

『ラ・パボーニ』の喫茶室の西隣の会議室は、しばらくの間、仏間となっていた。店を訪れるたび、私たち一家はその部屋に入って焼香した。画伯の墓は甲山の麓に造成された墓地に葬られることが予定されていたので、私は、満池谷にある墓地とは違い気軽に詣れないが、暖かくなればゆっくりと出かけるのには恰好の場所であると思い、その墓参の機会を待つことにした。

四月に入って間もなく、私たち夫婦にとって大きな出来事が起こってしまった。妻が膀胱炎でしばらく近くの市立病院で治療を続けていたと思ったら、婦人科の方で妊娠の事実を告げられたのである。私たちは愕然とした。まったく予定外のことで、ようやく長男から手が離れることができ、一息ついたときである。それに、家族数は五人だと何とはなしに決めていただけに、この年の十二月に自分たち夫婦と干支（え

と）を同じくする第四子が我が家に加わって、家中を再び戦場のような混乱に巻き込むということは、正直云って私にはヤレヤレという思いである。だが私は直ぐに、そのような身勝手な自分の考えを恥ずべきものとして思い直した。新しい生命の誕生は、厳粛かつ喜ばしいことなのだ、何と云っても一番喜ぶのはまだ幼い長男であろう、もし男の子でも産まれて来るならば上の二人が姉なので、彼にとっては一生頼りになる同性の仲間となるので、弟を生んでくれた両親を感謝してくれる筈だ。天の与えてくれた命（めい）に従うべく、私は自分の気持ちを整理した。

今度こそ妻には気を楽に産ませてやろう、今までは家計の遣り繰りに追われての貧乏暮らしの中での出産ばかりであったが、もう余裕の出て来てよい年齢に私たち夫婦はなって来ている筈である、産後はお手伝いさんでも雇って、退院してからでも家事に手を出すことのないようにしてやろう、漸く夏冬のボーナスが、次のボーナスまで蓄えが残るように家計も黒字化して来ているではないか、幸い、芦屋という高級住宅地での生活も案じていた程の家計費の膨張に繋がらずに、工夫次第で遣って行ける自信が得られのもまずはよかった、ステレオやカメラの購入は将来の楽しみに取って置いて、六月と次の十二月のボーナスで、それぞれ十万円ほどで合計二十万円ぐらい用意すれば、入院費とお手伝いさんの費用は賄えるであろう。

しかし妻の気持ちは複雑であった。なによりも妊娠の事実が判る前に服用した膀胱炎の処方薬が心配だと彼女は言う。泌尿器科の医者は首を傾けたそうだが、産科の先生は大丈夫と保証したそうである。だが気にし屋の妻は、悪阻（つわり）の苦しさの中で、初めて長女を産んだ西宮市分銅町の産科医に相談してしまった。私たちのこの古い知己は、それほど心配なら母体に却って悪いからという意見だそうである。その説明を受けた妻は、即座に私に無断で、処置を頼んでしまったという。その手術予定日の前日、金曜日ではあったが会社の仕事が暇なので、たまたま以前から休暇を取っていて家に居たのだが、病院の治療代に充てるための資金を郵政省の簡易保険口座から借りることができるというので、妻はその金を貰いに芦屋郵便局に出かけると言い出し、私も自転車で一緒に随いて行くことにした。

郵便局は阪神国道沿いにあり、芦屋川を西に渡った川西町にある。其処で彼女は、少ない額ではあるが纏まった金を借り受けた。その金を受け取った妻に私はさり気なく、これから写真屋の小父さんの家を訪ねてみようと誘った。実は、そのことを私は、家を出るときから密かに決めていたのだ。彼ならば出産を取り止めてはならないことを妻に巧く説得してくれるであろうと期待を掛けていたからである。果たしてこの作戦は効を奏した。第一と第二金曜日が店が定休日なので自宅に居ることを予め予期していた通り、在宅してテレビで国会中継を見ていた老人は、妻が何気なく口にした妊娠の事実とその中絶の予定を聴き咎めて、声を荒げて叱ったのである。自然の意思に逆らってはならぬ、生まれるものは産みなさい、たとい片輪でもいいではないか、育て上げるのが親の責任である。

別に打ち合わせていたわけでもないのに、小父さんは厳しく妻を意見した。すると意外にも、日頃強情で他人の忠告などに耳を貸すようなことのない彼女が、素直に納得し、「弱気になっていてつまらないことを考えていました。」と反省の言葉を述べたのである。恐らくずうっと彼女も内心では気が咎めていたのであろう。

その話が片付いて、今度は小父さんが食卓の上に置いてあった一通の封書を取り上げて、私たちに読むようにと差し出した。怪訝な顔をしていた私たちに、彼は、その封書が和歌山県下のさる女性から来たものであると告げ、彼女がかつて新聞の投書欄に投稿して、「亡き夫を慕って自分が死んだなら、果たしてその夫に会えるだろうか」という趣旨の文章が載ったのを読み、それに対して、彼の方から、「会えると信じていれば必ず会える、疑ってはいけない」と、激励の手紙を新聞社気付けで出したことがあったそうである。そしてそれに対する返信がこの封書だと言う。小父さんも物好きなことをすると思いつつその返書を読むと、中には激励に対する感謝の念を述べた文章のほかに、すでに嫁に行っていた彼女の一人娘が先方と折り合いが悪く、最近になって戻って来たところだなどという些細な事柄が綴ってあった。

「可哀相に、女手一つで生きていくのでさえ大変やのに、娘さんの不幸まで背負い込んでしもうて・・・。だからわしが後に残ってよかったんや。家内を残してわしが先に往ったとしたら、死んでも死に切れんわい。」

小父さんはそう呟いていた。

私たちは、その足で産院に向かった。私としては長女の出産以来暫くぶりで会った院長に対し、妻は、「電話でお願いしていた件は思い直します。」と告げて、婉曲な表現で明日の手術の予約を取り消した。

私は気が軽やかになっていた。帰り道に『ラ・パボーニ』に立ち寄って奥さんに、妻が四人目を出産することを告げ、これから当分の間、このように一緒に自転車で気軽に来られなくからと断りを入れた。私が先に店を出た後も妻は暫く奥さんと話し込んでから出て来た。自転車を走らせながら、妻は、画伯が亡くなってから、お子さんが居られないところから甥御さんが相続分として遺産の三分の一を要求して来たのだが、法律のことは面倒なので『アートガーデン』の土地の一部を分割して与えたとか話してくれた。

「何にしても死んだら直ぐ遺産争いが起きるなんてイヤアねえ。甥にそんな権利があるのかしら?」

「子供が居ないとなると、そうなるのさ。亡くなった先生のご両親も既に居られない筈だから、奥さんと、先生のご兄弟が相続人ということなんだろう。そのご兄弟も亡くなっていれば、その亡くなった人のお子さんが親の権利を引き継いで相続人となれると云うんだろう。代襲相続とか、遺留分とか、遺産相続は面倒臭いんだ。もう忘れてしまったよ。」

私は大学で学んだ民法の微かな知識を思い出しながら答えてやった。そのような金銭に関する争いは、他人事として全く興味が無かった。

帰路、私たちは再び夙川の堤に出た。花はようやく盛りを過ぎたところで、いくぶん緑色の小さな葉が顔を覗かせつつあった。それでも例年より僅かに遅い開花時に当たっていて、週日にもかかわらず、いつよりも多くの人々が土手をそぞろ歩いている。先ほど写真屋の小父さんから教えられたので、昔、歌舞伎役者が賞味したという最中（もなか）を駅近くの対岸にある老舗の和菓子屋で買い求め、私たちは、雲井橋を渡り、濃いチョコレート色の阪急電車が走るのを左下に眺めながら、軽やかにペダルを踏んだ。線路沿いの小高い道に老木が連なって、満開の薄桃色の花の間からは、振り返ると夙川カソリック教会の、三角形で突端が透き通り空間となった珍しい尖塔が、青空にそそり立っている。私は伸びやかな満足した気分であった。いま自分が久しぶりに味わった爽快な状態にあることを、妻に誇らしげに告げていた。

夙川の桜に劣らず芦屋の花も見事である。この四月上旬の僅か数日の間、狭い市中は白い花で一斉に埋められた。それほど桜の樹木は芦屋には多かった。わが家近くの霊園は、中でも名所として知られ、朝早く散歩していると、高級車をゆっくりと動かして車内から花見をする年配の人が見受けられた。霊園から真っ直ぐに岩園幼稚園まで下る坂道は私の毎朝の通勤バスの通る道なので、その両側に等間隔に植えられた桜並木も、この時期には文字通り花のトンネルになる。なお、毎朝と云う意味は、この路線は道幅が狭いためバスは一方通行なので、帰路は幼稚園から東に岩が平という岩園トンネルの手前の丘を迂回して、市立病院の背後を回って霊園前に出るというコースになるので、この花のトンネルは通らない。しかし、何と云っても、花の多い芦屋の中でも一番風情を感じさせる名所は、芦屋川の河畔である。人工的なコンクリートで固められた水路の岸辺を飾る白い花が、底浅く光を反射させて煌（きら）めくように流れる水面に生えるさまが、私は好きである。だから会社が終わると私は、国鉄芦屋駅前で直ぐにはバスに乗らず、月若橋で川を渡って、阪急芦屋川駅の前に設けられた始発のバス停に据えられたベンチに腰掛けて、何となく、何をするわけでもなく、ただボンヤリと川風に頬を吹かせながら、まだ明るいうちに花を眺めたものだった。東京でならこのような場所は、前日からゴザを敷いた場所取りの人たちで埋まり、喧騒の花見騒ぎとなるのであるが、身近にあるこの美しさを芦屋の人々はその価値に気が付かないのか、それとも人口が少ないせいなのか、私のように川端で花を独占するように楽しむ人がそれほど多くないのは不思議であった。

花の季節も終わり、暫く夙川方面から足が遠退いていたら、催促するように、『フタバ写真店』から妻に電話があって、店の法人化の件で私に相談に乗って欲しいので直ぐに来て欲しいとのことである。私は、学生時代に使った古い六法全書を本箱から拾い出して自転車の籠に入れ、単身で札場筋に向かった。暖かい土曜日の午後のことである。

かつて何かの折りに、私が写真屋の小父さんに、個人商店ではなく店を法人化して誰か共同経営者を求めたら、老人一人で店を守るという責任からいくらなりとも解放され、店の手伝い程度をするだけで余生を気楽に送れるのではないかと言ったことがあった。その際、会社設立の手続きなら簡単に登記事務をして上げましょうとも言って上げた。というのも私は、芦屋に来る半年前には自分が配属される人工皮革事業を親会社から分離して、別会社組織に作り上げたばかりで、そのための法務局関係の登記実務を、司法書士を通さずに自分でやっていたので、その辺のことなら何とか手助けできる気がしたのである。だから妻からの電話内容を知ったとき、これで小父さんも生きる望みを持ち直してくれたのかと、嬉しくなったのだった。

しかし会ってみると小父さんの考えは違っていた。彼は、あくまでこの八月に死ぬという姿勢をいささかも崩していなかった。しかし死んだ後そのまま店を潰してしまうのはいかにも惜しい、戦後二十数年かかって築いてきた店である、しっかりした客も付いて名前も売れ、しかも立地条件にも優れているので、無形ではあるが営業権という財産が確立されていよう、だから、それを誰かに譲ってやりたいのだが、最大の障害はこの店が借家だということである。家主は店の二階に住んでいて、以前から早く出て行けと追い出しがきつく裁判で何度も争っているほどである、だから他人に店を譲るというのはきわめて難しい、もし法人化してその共同経営者として自分が関与すれば、自分の死後はそのもう一方の共同経営者に店を譲ったと同じことになるのではないか。写真屋の考えはザッとそのようなものである。

越水町に住んでいた頃から、私は既に、写真屋夫婦が家主とゴタゴタを起こし裁判沙汰になっていることを妻から聞いて知っていた。そのときから、訴訟は一徹者の写真屋夫婦の側から提起されたものではないかと私は思っていた。しかし目の前の大きな紙封筒に納められた一連の訴訟関係の書類をザッと見るに及んで、原告が家主の側で、小父さんの方は被告の立場にあったことを初めて知ったのである。家主は公務員とかなのだが、自分で商売をしたいと考えているらしく、そのための訴訟提起なのだろうが、小父さんの話では異常とも思えるほど冷酷な訴訟魔らしい。なるほど訴訟は十年ほどの間に、『請求の趣旨』をその都度変えて数回起こされていたが、大体において原告側の敗訴、つまり請求棄却となっていた。大体という意味は、一部で原告の請求が認められたものがあり、写真店としての業務に必要はないと判断される被告が使用する居間の原告への返還を命じた判決もあったからである。判決の『主旨』は一貫して被告、つまり写真屋の営業活動を保障したものであった。だがその裏返しとして、小父さんの主張する、彼の死後もこの店を存続させたいとの工作は通らないだろうと私は判断した。

「小父さん、難しいですね。会社を作るのは簡単ですからやって上げてもいいですが、どうもそんな問題ではないですね。問題は、貴方が死んでからも此処での写真業が成り立って行けるかどうかでしょう？

貴方が死ぬまでなら、どんなに長い期間であれ、家主の意向に関係なく借主の『フタバ写真店』の営業の継続を保障するというのが生存権

を保護する法の精神だからなのです。しかしこの店そのものが貴方から切り離されても存続出来るかどうか、裁判所はそこまでは今は認めないと思います。

店を会社組織にして貴方の労力を軽減し他人に手伝って貰いながら、暫くの間でもその会社が営業を続けているのであれば、たとい貴方が居なくなっていたとしても、会社法人の営業権が成立していると主張できるようになるかも知れません。しかしそうなるまでにはまだかなりの年数がかかるでしょう。何よりも小父さんご自身がこの夏死なれるお覚悟なんですから、とても無理でしょうね。

それとも小父さん、これから何年も長生きして、会社が自らの営業権を主張できるようになるまで、頑張ってみますか？」

私は、写真屋の小父さんの顔色を窺いながら笑顔でそう訊いた。

「そうか、駄目ですか。弁護士も難しいと言ってましたよ。」

首を大きく左右に振りながら、老人は寂しそうに呟いた。

「家主に対する小父さんのお気持ちはよく解ります。しかし、ご自分の時代だけにして、その後のことまでは主張しないことですよ。意地になってしまいますからね。」

冷酷のようだったが、私はハッキリと言ってあげた。

「そうか、意地か。なるほどそうなのか、それなら止めとこう。」

老人は素直に同意してくれた。その態度はあっさりとして、非常に爽やかだった。偏屈で強情張りな頑固老人という目で眺めていただけに、意外に開明な態度に、却って私は感心させられるよりも、それまでの自分の偏見が恥ずかしくなっていた。

四月の中ごろから、ガレージの真上の小高い我が家の庭に高々と掲げられた鯉の幟は、五月に入って薫風を腹いっぱいに膨らませて翻翻（ひるがえ）った。この幟（のぼり）は、芦屋山麓に立ち並ぶ邸宅の中でも一際目立つ風格のあるもので、私たち一家の鼻も高々となる思いであった。長男が東京練馬で生まれて最初に迎えた五月の節句のために、私たち一家が浅草の問屋街を歩いて物色し買い求めた自慢のものなのである。私の勤める会社が合成繊維業なのにもかかわらず、一般によく見受けるナイロン製の軽い幟を嫌い、重量感のある木綿の発色のよいものをと探して得たものである。縁が黒く描かれた鱗（うろこ）の内部が金粉で塗っていて、それが美しく見栄えがして、一家の自慢の種なのである。

「なにしろ金（きん）が入っているんだからね、家（うち）の鯉幟は！」

これが私の口癖で、その全長五メートルにも及ぶ大きな父親役の真鯉に四メートルの母親役の緋鯉、それに吹流しの三匹を、『豊島園』近傍の準社宅の庭に揚げたとき、まだ四月に入って間もない時季だっただけに、

「上のお二人がお姉ちゃまで、ようやく立派な跡取りのお坊ちゃまを儲けられて、ご主人様のお喜びが目に見えるようですね。」

近所の人から妻はそう冷やかされたそうである。その東京練馬の庭は、それでも狭い家の割には広かったのだが、其処は東京という土地柄のこと、近くを電線や電話線が走り、隣家の屋根やら樹木にも邪魔されて、ちょっとした風でもそれらに引かかったり巻きついたりして、その都度、妻のイライラを高じさせる原因となったのであった。

しかしこの芦屋の高台の家周辺には遮るものはない。鯉は大きく伸び伸びと翻めいて、下の商店街で買い物をしてそれを送り届けてもらう際にも、朝日ヶ丘で大きな鯉幟を立てている家といえばすぐ判る筈と、目印にすることができた。その幟を支える竿は、阪神国道で芦屋川を西に渡り、神戸市の東はずれの森市場の直ぐ手前にある、芦屋市では西はずれに位置する清水町の竹屋まで、交通の障害を避けるために早朝まだ暗い四時頃に子供たちと歩いて受け取りに行き、国道では車の走行の間隙を狙って横に転がして走って渡り、その後は私が肩に担いで坂道を家まで持ち登って来たものである。

その竿を、上の二人の姉妹たちは恰好の攀登棒（はんとうぼう）としていた。私は会社の商品企画の商売道具である望遠レンズ付のカメラを休日に借り受けて、このような女の子のお転婆遊びを撮ったりして楽しんでいた。

私は、望遠レンズ付カメラを初めて使ったのであるが、ファインダーから覗く構図が全く新鮮な感覚を与えてくれるのに驚かされた。芦屋という地形が東京の平面的な地形と異なって立体的な変化に富んでいることにも影響されていよう。家から百メートルほども離れていない西側の小高い崖の上に立って見下ろすと、我が家は肉眼では小さな箱庭のように切妻の屋根を露わにして見下ろされ、その中で演ぜられている生活臭漂う人間模様など、まるで存在しないかのような錯覚を覚える。しかしそれを、望遠レンズ付カメラのファインダーから覗くと、窓の中の人影まで目に入り、生々しい生活の実態が、背景の家並みと重なって、奇妙な位置付けを帯びて迫って来る。距離感を捨象することで、あるいは、全く別の尺度の距離を置いて事物を見ることにより、私には、新しいものの見方を学べたことは思いがけない収穫であった。

そのような発見に刺戟されつつ、私は、興奮しながら、山手町の古い大邸宅の並びで、色とりどりに花を付けた躑躅（つつじ）の球形の植え込みが、幾重にも続く折れ曲がる坂道や、その一角に経つ歴史の古い山手町小学校の何十メートルにも連続したジュラルミン製の滑り台、それと同様に段差を持って流れ落ちる芦屋川などを、いっぱしの写真家気取りで撮りまくった。この山手小学校の滑り台は、巨大なジャングルジムの真上から段差を設けて崖下の狭いグランドまで降下できるように安全性を考慮して設計されていて、我が家の二人の姉たちの学校区

域ではない別の小学校なのであったが、私たちは揃ってよく遊びに来たものである。休日であっても、よそ者の私たち一家の他は、全く誰も遊びに来ていないのも、東京の学校とは異なっていた。まだ三つにもならない長男は、生来活発で、平気で姉たちと一緒に滑るので、私は心臓の凍る思いがしたものである。

このようにして撮った私の写真を見て、本職である『フタバ写真店』の主は、素人離れがしたスジのいい腕前だとお世辞を言ってくれて、私を内心喜ばせた。

梅雨の走りなのか小雨のパラつくある日、会社にいた私に妻から電話があった。帰宅途中で店に寄ってくれと写真屋の小父さんからの伝言である。何でも、例の新聞投書欄に投稿したことのある和歌山の女性のことで、緊急に相談したいのだという。

「小父さんも物好きねえ。他人（ひと）の事より、自分の事の方が、よっぽど問題なのに・・・。」

妻は呆れたように付け加えていた。

午後五時に会社が退けると直ぐ、私は国鉄の各駅電車に乗って、大阪駅から五つ目の西ノ宮駅で下車すると、そのまま北口から阪急の線路まで真っ直ぐ歩いて北上した。この辺りは、かつて越水町に住んでいた頃、朝早く出張のため重い鞄を提げてよく通った所である。その頃、販売部で学生服用の生地を扱っていた関係上、毎週のように岡山県の児島産地に日帰りで行っていたからである。大阪発朝七時の特急『うずしお』に神戸駅で乗り移るために、冬などまだ真っ暗な中を急ぎ足で乗り遅れないよう走ったものである。一度などは私の乗った各駅電車がその『うずしお』に三宮あたりで追い抜かれ、信号の都合なのか結局はスピードを緩めてくれたので、同じ下りホームであっただけにその特急に何とか飛び乗れて肝を冷やしたことさえあった。

西ノ宮駅は芦屋駅などとは格の違う大きな駅であるのに、当時その北口は、商店街さえ形成されていなくて、未開発のまま古い民家が不揃いに立ち並んでいた。所々にある、瓦を白い漆喰で固めた古い造りの大きな屋敷の庭には、土蔵を囲むように年代を感じさせる松が植えられていて、何かこの一帯だけが、市の中心部にあるだけに特別な雰囲気を感じさせていた。結婚直前に妻が一時京都から引っ越してきて住んでいた摂津富田駅の東側にも、そのような一画があったので、関西はさすがに歴史の遺影を呼び覚ます風景が随所に残されていると当時は思っていた。数年前まではこれらの集落は阪急の線路に近付くにつれて家並みも疎らになって、他の住宅地とは切り離されたような形になっていたのだが、今では家並みも建て込んで、連続して新興住宅が西国街道方面まで切れ目無く続いている。長い歴史の果たせなかった変革が、このたった十年足らずのうちにあっさりと実現してしまったのも、今の時代が日本の歴史の上でも特筆すべき変革の時期として位置付けられる

からなのであろう。
　私は阪急電車の、これも以前には無かった高架に沿って札場筋に出た。小父さんは待っていた。いつもは五時に店を閉めて家に帰るようにしているらしいが、その日は私を待ちかねていて、着いたばかりの私に、老人は早速厚い封書を差し出した。黙って、しかし素早く、私はそれに目を通した。それは和歌山の婦人からのものである。
　彼女の娘さんと、その夫で学校の教師をしているという男との折り合いが悪く、結局別れることにしたのだそうであるが、相手は、娘さんが嫁入りの際に持参した家財道具を返さないばかりか、その上更に、数百万円の慰謝料まで請求するという酷い仕打ちをしてくるという。それでも別れてくれさえすればよいので、泣く泣く我慢して相手の申し入れに応ずるつもりなのだが、それにしても資産家の息子だというのに、あまりといえばあまりにも吝嗇（けち）で、薄情な態度に情けないといった手紙の要旨である。
「論旨が一貫していないですね。何が言いたいのか・・・。単なる愚痴か、甘えですね。小父さん、こんな相談事は、まじめに採り上げないで打っちゃっておきなさいよ、もう。」
　私は読み終わって突き放すように批評した。実際私も、こんなことのため、会社に電話を掛けてきた妻を恨んだ。また、その願いを聞き入れて、わざわざ帰宅途中寄り道した自分が情けなかった。小父さんのことならいざ知らず、その小父さんだって見ず知らずのアカの他人である女性のために、自分が相談に乗る破目になったことを悔いた。真の相談相手が女性だと初めから知っていたら嫉妬深い妻は断ったであろう、だいたい写真屋の小父さんとの付き合いだって、深入りし過ぎではないか、きっかけは全て妻にあるのだから、自分の責任とは必ずしも云えないかも知れぬ、しかし情に溺れやすいのも自分の欠点なのだから、全く自分に責任がないとは云えないだろうが・・・。私は胸の中で自問自答した。
　私の言葉に珍しく老人は気色ばんだ。
「それはね、あんた、女なんですよ！　この人は女なんです！　女はそういう者です。
　私の家内でも、私が留守していたときなどには、チョイとした問題が起こってもすぐ取り乱してしまうんですよ。もし私が先に死んでいて、こんな立場に家内がなったとしたら、どんなに心細い思いをするか・・・。
　亭主に死なれるとこうまで女は馬鹿にされなくてはならんのですか！　男が居ればと、さぞ悔しいことでしょうよ。
　だから、わしは何とかしてこの人の力になってやりたいのです！」
　彼は傲然とそう言ってから、更に言葉を継いで、

「あんた！　こんなことが許されますか！　物も金も全て取り上げてしまった上に慰謝料まで、なんで男に女が払わにゃならんのや！」
老人は興奮を抑えられずに意気込んだ。
「さあ、手紙からだけでは詳しいことは解りませんし、男の言い分も聞いて見なければ一方的ですよ。もしも女の方から離婚を申し入れていて、しかも男の方には別れる原因となる落ち度が全く無くて、逆に女の方に不行跡やら男の名誉や信用を傷つけたり、殴ったり噛み付いたりの暴力を一方的に振るって、男を苦しめていたとしたら、どうなります？
この場合のように、女の方が慰謝料を男に払うケースは、双方の経済力の違いがあるとすれば、全く無いわけでは無いですよ。また、男の方が結婚の際に女に対して多額の物質的援助を与えていれば、女の持って来た嫁入り道具を差し押さえる正当な理由になるかも知れませんね。
とにかく事情をよく調べてみなければ・・・。当事者の一方しかまだ話を聴いていないのですからね。」
相変わらず冷ややかに私は論評した。そして、私たち夫婦だったらどうだろうと思ってみた。双方無一文でお互いに手鍋下げて一緒になったのだから、離婚の際の財産分与は、かっちり二分の一ずつで簡単で、後は離婚原因による慰謝料の問題が残るだけになる筈である。しかしそのような原因は、他の異性との痴情問題こそ二人には無くとも、その他の原因は私には無いのだから、私は支払う立場にはならないだろうと、内心で自問したりしていた。
和歌山の女性の手紙の行間から受け取れる情況を推し量るに、この教師とかいう男は、私の基準から云って実際でも情けない部類の男なのであろう。その意味では写真屋の小父さんの怒るのも解らぬではないが、しかし、私らには知り得ぬ何か特別の事情があるのかも知れない。あるいは手紙の内容が真実を伝えていないのかも知れぬ。
「フン。その辺の事情は今度、手紙を出して確かめてみよう。相手には一度西宮に出て来いと言うてやるんだ。いや、こちらから、懇意の弁護士を連れて訪ねてやるか・・・。」
彼は、一人ブツブツと口の中で呟いていた。チョッと気を損じたようである。私は何も応えなかった。
小父さんは帰り支度をし始めた。支度といってもただ帰るだけなのであるが、半身不随の年寄りでは思ったよりも手間がかかる。塩ビ・レザー製の黒い鞄を肩から吊るし、ステッキとともに傘を手にすると、最後に彼は店の前に出て、歩道に立ててあった看板を中に入れた。シャッターを下ろし外から鍵をかけて、毅然とした態度で老人は胸を張って、先に立って歩き始めた。
「国道バスで通うてますんや。昔は自転車やったけどなあ。今は、歩くんがしんどいんや・・・。」
『札場筋』と名付けられたバス停まで、店からはそれほどの距離ではない。しかしそこまでには交通量の激しい広い道路、つまり、今では

西国街道の一部をなす札場筋通りと、もう一つ、阪神国道との二つの広い通りを横断しなければならない。朝、店に来るときには、この国道は渡らなくともよい。バス停が道路の北側にあるからである。しかし方角として西になる小父さんの住居に帰るのには、神戸方面に向かうバス停は国道の海寄りの反対側にあるので、どうしても国道を横断しなければならない。拡張された西国街道には横断歩道が一箇所設けられていたので歩いて渡れるのだが、其処が簡単に渡れても、もう一つ国道を向う側に渡るのには、更に歩道橋を登り下りせねばならない。

国鉄のガードを潜って札場筋と国道との合流点に出ると、巨大な歩道橋が交差点を真四角に囲むように跨っていた。西行きのバスの停留所は、この四角い歩道橋の東南の地点にある。そのとき老人は制止する私を無視して、堂々と車道を渡って向こう側に行ってしまった。折りよく信号待ちで車の量が途切れた瞬間を見計らってのことなのであるが、私も慌ててその後を追うように走らざるを得なかった。

「危ないことをしますね。」

私は老人の無謀を詰（なじ）った。

「歩道橋を渡らせるやり方が間違いや。足の悪い年寄りを犠牲にしてまで車を優先させるんは逆さまや。わしは、歩道橋は絶対渡らんのや。横断歩道がついとれば、勿論其処を渡る。しかし、歩道橋しかない所は、わしは堂々と車道を横切るんや。轢くなら轢いてみい！　どうせ死にたい命や。何もコソコソすることはない。」

頑固な老人は開き直っていた。さらに、

「家内が死ぬとき、医者を呼びに車を拾おうと、わしは国道を歩いて横切ったことがあったんじゃが、そのとき警官に捕まってしもうてな。わしは言うてやったわい。人が死にかかっておるときに、交通規則も何もあるんもんかい！　てな。ハッハッハ。」

老人は傲然と笑った。

神戸税関行の銀色の阪神バスが雨の中をやって来た。僅か二つ先の停留所が夙川橋で、小父さんは身体障害者のパスを見せて、危なかしい足取りでバスを降りた。バスは白い飛沫を跳ね上げながら、夕暮れの第二国道を、私を乗せて更に西へ芦屋に向かって走った。振り返ると老人は、黒い鞄を腰の辺りで揺らせながら、ステッキを支えに、堂々と夙川橋を横切って歩いていた。

私たち夫婦の四人目の子は、一抹の不安を抱かせながらも、妻の腹の中で順調に生育しているようであった。妻が三十代半ばという比較的高年齢の経産婦であり、しかもＰＣＢやらサリドマイドなどの食品や薬品公害で、胎児にまで影響が現れるという昨今の情勢から、これまで以上に私は気を遣っていた。折からちょうど新聞が、兵庫県が全国に先駆けて、妊婦の羊水を注射針で採取して胎児の細胞を調べることで、

異常の有無を判定することができるので、この新しいシステムを採用し、一般人でも一万五千円程度で受診できると報じていた。全国で私たちの住む兵庫県だけが、しかも今年から実施するというニュースは、何か自分たちのために特別に計られた意味合いを持っているように、私には感じられた。

私は、妻にこの制度を利用して受診させようと考えた。以前、東京小平の会社のアパートに住んでいたとき、同じアパートにダウン氏症候群の症状を示す赤ちゃんがいた。その親御さんは自分たちの愛児が異常だとは認めたがらず、単なる発育の遅れと受け止めようと振舞っていただけに哀れに思えていた。そのアパートの近くの都営住宅にも、謂わゆるオカシナ児が居て、家族の人たちが苦労しているのも私は知っていた。こういう異常児が最近増大しているのは、昔なら死産となって自然淘汰されていた筈の胎児が、医学の発達で却って助けられてしまうからだと新聞は解説していた。それが果たして、本人にとって、また、周囲の人たちにとっても幸せなことなのであろうか？　早いうちに、まだ胎児のうちに発見して医師の判断で『優生学』という、これも価値観の伴う意味不明の用語であるが、科学的な理由を付けて処置してしまえば、法律的には責められることはないであろうに・・・。しかし、生命をそのように軽んずることは、科学という絶対万能的な近代の学問の思い上がりなのではないか？　この学問が、人類の制御の手を離れて、ドンドンと勝手に一人歩きして先に進んでいることの、一つの現われなのかも知れぬ。

自然の摂理に反する行為を、私は採りたくないと思い直した。特に、母体の羊水中に含まれる胎児の剥離細胞の染色体を調べる際に、同時に男女の性別も判る筈である。もし、産まれ出る児が女であることを知らされたら、わが家では女児が三人となる勘定になる。ヒョッとして私自身、変な気を起こし、適当な理由を付けて医者に処置を願い出たりはしないだろうか。

かつて、すでに医師となっていた大学時代の友人と酒の席で、産まれ来る前に胎児の性別が鑑定出来得るであろうかと論じたことがあった。その友人は専門が内臓外科なので産科の知識は乏しいとしながらも、現代の医学でもそれだけはまだ判らない筈だと言っていた。それに対して私は、妊婦の尿を分析すれば簡単に判る筈だと、妻が当時どこかで聞いてきた又聞きの知識で異論を唱えてみた。しかし友人は、産道と尿道は別であり、しかも、胎児は厚い二層の羊膜で保護され外部と遮断されているのだから、胎児の分泌物が妊婦の尿中に排出されることは有り得ない、もしそんなに簡単に判るのなら、どうして産まれるまで男なのか女なのか、親や周囲はやきもきしながら待ったり、産まれる児のための衣服の準備に迷ったりするのであろうか、医者も教えられるものなら予め教えてやるのにと笑っていた。それでも私は納得できず、胎児の性別の鑑定告知は産科医の職務の範疇外であることと、それより医者が本当に恐れることは、人為的に男女の出生がコントロールされたら人類は滅亡してしまうので、だから判っていても教えないのだと、当の医者である友人を目の前において、聖職である医者という職業を崇

めるように再度反論を試みたことがあった。だが友人は、買い被ってくれるのは有難いが、医者のモラルは君が思っているほど高くはないよと、再度笑っていたことがあった。

この議論はどうやら私の負けで、妊婦の腹の外から針を突き刺して羊水を採取しない限り、胎児の性別は判らないというのが今のところの技術水準で、それが安全に出来る技術が今度初めて兵庫県で開発、実施されるというわけである。しかし、そのような新しい文明の恩典に浴することが、いざ、私たちに出来るとなっても、却って逡巡してしまうのも妙なものである。私には、胎児の異常を発見することよりも、男女の性別が産まれるより先に判ってしまうときの自分の判断がどうなるのか、その方が怖かった。

だが、このような私たちの迷いが杞憂になるような結果が起きてしまった。六月の末、西宮分銅町の産院での定期健診を受けて、妻が顔を青ざめて帰宅した。胎児の心音が聞こえないというのである。

「お医者さんは首を傾げていたけど。小さいとよく聞こえないこともあるそうよ。」

そう彼女は自らを慰めていたが、二、三日置いて精密検査をしたところ、胎児は既に死んでいると診断された。

「きっとあの膀胱炎の薬のせいよ。だって泌尿器科の先生は、妊娠を告げたとき首を捻っていたもの。でも、産まれてきても不具者（かたわ）だったかもしれないしね。いいのよ。

何度も死ぬか生きるかの境を行き来して、とうとう本当に死んでしまったのだから、この子も業（ごう）の深い子だわ。」

妻は涙ぐんでいた。

私は、坂の多いこの住宅環境が、あまり丈夫でない、しかも四十にそう遠くない妻の肉体には負担が大きかったのではないかと思っていた。やはり、このような場所は、車を持たない者の住むべきところではないのかも知れぬ。しかしそのような原因を探すよりも、こうなった以上、死児をいつまでも母体の中でミイラのまま放置しておくわけには行かない。病院のベッドの都合がついて、妻は三日間、近くの市立病院で手術を受けた。死児の性別は、不明の欄に印がついていた。その間私は二日ほど会社を休み、何とか切り抜けた。

そのようなことやらを報告かたがた、七月に入り私は一人で『フタバ写真店』を久しぶりに自転車で訪ねてみた。例の和歌山の女性からの手紙の相談があって以来、私は意識して札場筋には足を向けてはいなかった。

薄暗い店の人隅で、写真屋の小父さんは何か本を読んでいた。顔を上げて挨拶を交わした後、彼は読んでいた一冊の本を私に示した。四柱

推命（しちゅうすいめい）の占いの本である。
「あんたがこうやって今訪ねてきて、わしがちゃんと店で待っていて会えるのも、みんな始めから定まっていることなのです。お互い通じ合えんと、ドンピシャリと会えることもなく、チグハグに互い違いになるんです。」
というようなことを、小父さんは真面目な顔で私に説いてくれた。それから自然に二人の会話は、運命論についての話題になって行った。
彼の語るには、つい最近、暫くぶりで店を訪れてきた旧知の占い師が、しげしげと小父さんの顔を見詰めながら、
「あんた長生きしまっせ。八十過ぎまでは確実や。」
と言うので、
「何言うか！　わしはこの八月に死ぬことに決めておるわい！」
と言い返したそうである。すると、
「いやいや、人の寿命はみんな最初から決まっておるんやから、何ぼ本人が死のうと勝手に決めたところで、死ねるもんやないんや。」
占い師は、ご託宣を、のたまわったそうである。
小父さんは笑っていたが、私は内心、ハハア、これは老人が死ぬ死ぬと盛んに強がりを言っては見たものの、矢張り決意が鈍って来て、とても自分で死ねそうもないので、その伏線として今から言い訳け作りを試みているのだと思い、ニヤニヤして可笑しかった。だが老人はキッパリと言った。
「わしは死にますよ。この八月にな。睡眠薬を沢山飲んで、写真の現像用の昇こう水も飲みますよ。あれは猛毒じゃからいっぺんだ。」
「いや、小父さん。そうは言っても人間、なかなか死ねるものではないのです。私の今度の子のように、これから後七十年も八十年も生きることを約束されて母胎で育(はぐく)まれていても、この世の光を当てられる前に自然に心臓が停止して死んでしまう者もあるかと思うと、何度自殺を試みても失敗して死に切れず助かってしまう人もいるのです。
昔、会津の白虎隊の少年でたった一人だけ、喉を突いても腹を切っても、どうやっても死に切れず助かってしまい、明治の時代まで生き永らえた人がいましたが、死に損なうと生き恥を曝すようで、却って惨めですよ。」
私は穏やかに言った。
「そう、死に損なうのはイヤだ。だから、来月に入ったら面会謝絶して、わしは誰にも会わず家で静かに寝ておって、絶食して肉体を弱らせておくつもりです。そうすれば、薬を飲んでもよく効くじゃろう。」

その日、私は小父さんと将棋を指してから帰宅した。彼の将棋の腕前はなかなか強く、会社仲間では強いと自惚れていた私でも、三番勝負で二番やられてしまった。囲碁の方ならばもっと強いそうである。何でも芦屋川西町の碁会所で、毎週指導を受けていたことがあったとのことである。しかし私が碁はやらないと言うと、囲碁を学べば、人生観も開けてきっとプラスになると薦めるので、それなら教えてくれますか？と頼んだところ、その意味を察したのか老人は笑っていた。

梅雨は例年になく雨量の少ないまま上がってしまい、早くも暑い夏がやって来た。関西の夏の暑いことは、新婚当初の西宮での生活ですでに経験済みではあったが、この年は特に異常である。私は土曜、日曜には時間潰しに、歩いて五分とはかからない市民プールに、子供たちを連れて行った。このプールは朝日が丘町から山手町に抜ける途中の高台に造られたもので、ちょうどその手前、私たちの家からつい目と鼻の先に新しく開校した小学校の広いグランド下の芝の斜面を這い上がり、校庭の金網伝いにコンクリート・ブロックの土砂止めを渡って進むと、そのプールはわが家とは庭続きで、水泳パンツの上に甚平を引っ掛けた姿で行っても恥ずかしくない近さだった。東京の練馬では、光化学スモッグという新しい公害で湘南の海が危険だというので、近くの『豊島園』に日曜などには子供たちを連れてよく行った。高い料金を支払って、若い男女で芋を洗うように混雑した流れるプールで一日中を過ごし、家にいた妻に直ぐ外の道路から、手を伸ばして昼の弁当を差し入れてもらっていたのだが、芦屋のプールは、料金も安く、泳ぐのは子供たちばかりなので、キャンデー売りの旗がはためいて、南に広がる市街を眺め下ろしながら、私は、まるで田舎にいるような気分でノンビリと甲羅を干していた。

この私たちの家の目と鼻の先にある朝日ヶ丘小学校は、増大する住民の数に応じるために四月から新たに設立されたものである。当然我が家の二人の娘たちも、トンネルに繋がるバス通りにある岩園小学校から、たった二か月通っただけで転校したので、それまで毎朝私が通勤バスの車窓から眺めた急な坂道を下る登校生の列も無くなって、生徒たちはそれぞれが行列を組むことなくバラバラに、我が家の下の道路を新しい学校に通学して行くようになった。ある朝など、二番目の娘は、同級生が下の道を通るのを認めて、追っかけるように一緒に学校に行ってしまい、校庭で遊んでいるうちに始業のベルが鳴り、教室に入ったところでランドセルを忘れたことに気付いて、慌てて家に飛んで帰って来たこともあった。校歌であったか、その小学校の歌に「リフトで運ぶ給食の」という一節があって、それを子供たちが唱うのを聴いていて、私たちの時代に学校で唱っていたのはもっと荘重な格式のある歌だったのにと、新しい時代とは隔世の感があると感心していた。

妻の快復は遅々としていた。出血がなかなか止まらず一時は再入院かと心配したのだが、七月も末近くなって、漸く自転車で遠出できるほ

どになった。土曜日の午後、ちょうどその日は、私の労働組合東京支部長時代に獲得した成果の一つでもあったが、東京、大阪両本社での夏の間だけ隔週週休二日制が実施されていたその日に当たっていた。午前中はプールに行き、午後に妻と長男を連れて、久しぶりに三人で札場筋を訪れた。あと僅かで『フタバ写真店』も店を畳むということで、もしその計画が正確に実行されるのであれば、これが恐らく最後の訪問になると私たちは意識していたし、結局はそうなってしまったのである。

私たち夫婦は小父さんに、今夜我が家でご馳走しますから是非一緒に芦屋まで来てくださいと誘った。食べたい物も無いと渋っていた老人を強引に私の自転車の後部荷台に座らせて、前には長男をハンドルに付けた幼児用の座席に乗せ、まだ陽の高いうちに我々は店を出た。すぐその途中で、私たちは『ラ・パボーニ』に挨拶に立ち寄った。

小父さんは、近くにいながら、これまで何十年もこの芸術的な喫茶店を全く知らない様子である。パボーニの奥さんもご主人の画伯と同じく絵描きさんで、その作品を私は何枚か見せて貰ったことがあったが、同じように芸術の世界に生きて来たこの二人の老人は、私たち夫婦の口からそれぞれ相手のことをそれまでに何回か話に聞いていたにも拘わらず、いざ引き合わされても殆ど互いに口も利かず、相手の身の上を気遣う素振りも見せなかった。ただ写真屋さんの方はしきりに店内を見回して、近くにこんな芸術的な店があったのかという風で、感心しているようである。

一息入れてから、私たち一行はすぐ『ラ・パボーニ』を後にした。小父さんは、自転車の荷台の座り心地が極めて悪く、しきりに苦痛を訴えていた。そして、自分はタクシーで行くからと、阪急夙川駅を目指してサッサと歩き出したのである。もともと身体の不自由な年寄りを、窮屈な体位で無理に自転車で運ぼうとしたのが悪かったので、私も自転車を降りそれを押しながら、慌てて老人の後を追って駅前のタクシー乗り場まで行った。

ちょうど土曜日の夕刻のこととて、乗り場には長い列ができている。運転手に行き先の芦屋の家までの道筋を教えるため、車を見送るつもりで私は暫く駅前で待つことにしたが、妻は夕食の材量を買い求めに、公民館の池の裏手にも当たる阪急の駅前の夙川市場に立ち寄っていた。彼女が買物から戻って来ても、まだタクシー待ちの行列は目立つほどには縮まってはいない。そこで、「私たちは自転車で先に行って待っていますから、芦屋霊園の管理事務所の前で必ず下りてくださいよ。」と言い置いて、急いで私たちはペダルを漕いで、緩やかではあったが登りの坂道を芦屋へと帰ったのであった。ところが、私たちの方が先に着くだろうとの見込みは外れて、フウフウいいながら自転車を押し上げるように、最後は急坂となる霊園前まで駆けつけてみると、「もう五分も待った」と、老人の方が早く先に着いていた。

我が家での晩餐は、妻の心尽くしの手料理で盛大に催されて、孤独な老人にとっては久しぶりの賑やかな宴(うたげ)となったのであろう。

「こんなに迄して貰うことを、わしは、今まであんた方に何もしておらんのに・・・。」
彼はさかんに恐縮していた。
「泊まっていきなさいよ。」
私たちは勧めた。
「いや、わしは若い頃はよく遊んだもんじゃが、家内と結婚してからは、一日たりとも外泊したことはないんや。」
老人は誇らしげに強く言い放った。私は恐れ入った。別にいかがわしい場所でなくとも、いっさい一人では外泊しないとの誓いを、相手が亡くなってからまでも、小母さんとの堅い約束を守る律儀さが、感心させられるよりも可笑しかったからである。これでは、写真屋のような個人商店経営者ならばともかく、私のようなサラリーマンは、会社の出張も断らなくてはならない。
私は思わず妻の顔を窺ってしまった。しかし妻の方は、小父さんの言葉を真に受け止めていたようである。
「今ごろ小母さんは、あの世で心配しているのじゃないかしら。無理に死ななくてもいいから、あなた長生きしてくださいよと思っているわよ、きっと。私ならそう思うわ。」
「いやいや、わしはもう疲れたですよ。早く家内のところに行きたいのです。」
老人ははっきりと応えた。
結局写真屋の小父さんは、その夜、九時過ぎに私の家を辞した。市立芦屋病院西口のバス停の前でタクシーを拾い乗せてあげてから、私たち夫婦は、家に戻ってから夜遅くまで話し合った。今や、小父さんの自殺の決意が動かし難いものであるのは明瞭である。あれだけの心構えと準備の下で死支度をしているのであるから、最早、説得して翻意させる見込みは無い。誰が意見しても同じことであろう。一体、死にたいといっている人を無理に止めて、生かしてやる権利や義務が誰に有るというのだ。却って、当人に対する惨（むご）い仕打ちになるのではないか？　放っておけばいいのだ。それが当人にとっても幸せになるのだ。
それに、法律上は、私たちは小父さんの親族でもなく、後見人でも保佐人や介護者でもない単なる通行人と云ったところである。しかし通行人だとて、目の前で倒れている人を介護したり通報したりする義務はある筈である。自殺しようと橋の上から飛び降りようとしているのを、死にたければ勝手に死ねばよいと放置すれば、不作為による自殺幇助の罪が被せられるであろう。刑法上の犯罪者に成りかねないのだ。そうでなくとも、道義上、一市民として公的機関に連絡するのが、少なくとも良識ある社会人の勤めである。民生委員の所在が判らなければ、警察か市役所に行くべきである。私は仕事があるので、月曜日には、妻に市役所に行って貰うことにした。

その翌々日の月曜に早速、妻は西宮市役所に電話で連絡を取り、その後で直接其処へ出向いて行った。彼女の話では、市役所の中にはもう一つ福祉事務所があって、そこで話をしてきたという。市の方でも、かねてから写真屋の小父さんをマークしていたそうである。六十五歳以上の身寄りの無い老人の保護と養老年金問題とで、市役所の吏員が、一、二度小父さんを訪ねたことがあったらしいが、市の世話にはならないと追い返されて寄り付けなかったそうである。市でも今や老人問題は重要なテーマとなって来たところで、写真屋の小父さんのようなケースも無くは無く、頭の痛い問題なのだそうである。できれば老人ホームに収容するのが一番よいのだが、入所希望者が多いので順番待ちの状況にあるという。何よりも本人が入りたがらなければダメなのは勿論のことである。一度、以前、私は写真屋の小父さんに、老人ホームに入ってゆっくりと余生を送ってはと話したことがあったが、

「あんなところに入るものではないですよ。この前、地元出身の労働大臣が、養老院に入るような年寄りは、若いときから他人からの嫌われ者なのだと失言して辞めさせられたことがあったが、あの発言は、一面の真実を突いていますよ。一人で生きていた方が、ずっとマシなのです。」

小父さんからは、ニベもなく相手にされなかったことがあった。その態度から見て、彼が施設に入る気の無いことは今でも明らかである。

そこで、この際の措置として、取敢えず民生委員にそれとなく彼を監視して貰うというのが、福祉事務所長の採った方法であった。受持ち地区の民生委員が、幸いにも亡くなった小母さんと顔見知りであったことも判り、妻と示し合わせて偶然のように、妻が小父さんの家を訪ねたときに来合わせた形にすることにしたそうである。妻が根回ししたこの作戦は成功した。とにかく、民生委員と小父さんとの接触は成り、表立った市の公職としてではなく、単なる話し相手という形で、時々買物などの便宜を図るという口実で、民生委員は、夙川橋の小父さんの家に出入りが出来るようになった。

七月の終わりから八月の初めにかけて、妻の父が九州から上阪して、一週間、我が家に逗留した。わざわざ持ってきてくれた夾竹桃の子株を庭に移植したり、雑然とした我が家の庭を思い切りよく鋏を入れて、綺麗サッパリと一新してくれた。我が家ばかりか、孫たちの通う新設の小学校の許しを得て、グランドの金網の外の崖に沿うように、余った夾竹桃を植えるなど、暑いさ中に小まめに動いていた。歴史上では戦争の名称としては今では禁句として使われていない義父の言う『支那事変』の初期、南京で足に受けた貫通創で右足が不自由で、写真屋の小父さん同様に身体障害者の登録を受けていて、国鉄も年に四枚だかの無料切符を利用して気軽に何処へでも行けるのだそうである。私たちが西宮の越水町に居たときから、東京の小平のアパートや練馬に引っ越したときも、不意に思い立ったように寝台車にも乗らず座ったまま夜行

列車で訊ねて来て、孫の顔を見たらいつも直ぐ帰ってしまうと妻からは笑われていた。今度は珍しく庭作業で長居をしてくれたが、六十二歳になるこの義父は、妻から写真屋の小父さんの話を聞かされて、

「死ぬ死ぬ言うて、死んだ験（ためし）があるもんかい！」

と言ったそうである。

義父の帰りがけに少し冷え込んだ日が続いたと思ったら、上の娘が夏風邪をこじらせて肺炎に罹り、二、三日ほど市立芦屋病院に入院させられてしまった。特別に気遣うほどの容態ではなかったのだが、それでも家の中はゴタゴタとなったのは止むを得なかった。

そんなこんなの真っ只中で、私は、写真屋の小父さんが予定通り七月いっぱいで店を畳んだということを妻から知らされた。そして私への言伝として、この機会に身の回りも整理するので、先祖伝来の槍の穂先を形見分けとして私に上げるから取りに来てくれと言っていたという。しかも八月も半ばを過ぎては困るので、出来るだけ早く夙川橋の家に来て欲しいと念を押していたとも言う。八月旧盆に自らを決裁する覚悟から急ぐのだと、暗に彼の計画の固いことを報せるのであろう。

私は夙川御茶屋所町にある小父さんの家を会社帰りに訪ねてみた。大変に蒸し暑い日であった。夙川の土手は青草が丈高く繁って、夏の真っ盛りを告げている。夾竹桃の薄桃色の花が力なく咲いているのは、見る人に遣り切れない暑さを感じさせる。

小父さんの家には珍しく先客がいた。小父さんと一緒に外出先から帰って来たところを私が訪ねたのである。見るからに七十を疾（と）うに過ぎたゴマ塩頭のこの老人は、写真屋が専属で仕事を与えられている幼稚園の園長であり、また、西宮市の市会議員でもあって、かつては市議会の議長を務めたこともある土地の名士だとして、私は小父さんから紹介を受けた。この人は、その他にもガソリンスタンドも経営していて、まずは資産家と云ったところである。しかし意外に腰の低い人で、言われなければ、どこか田舎の百姓か、街の煙草屋で店番をしている爺さんという感じである。この人に対して、写真屋の小父さんは例のごとくズケズケと物を言い、それにハイハイと頷く市議の園長先生の方が、立場が逆のように私は錯覚させられたほどである。

「今日は幼稚園の先生方が送別会をしてくれたんや。神戸の中華料理屋でなあ・・・。今、其処から帰ったところなんや。」

写真屋の小父さんはいささかご機嫌で、飲んで来たばかりなのに、またビールの栓を抜いて私に勧めてくれた。幼稚園での遠足や運動会などの行事の写真撮影は、結構な収入源になるそうであるが、その権利も、知り合いの若い人に最新の写真機まで添えて譲ったので、園関係の後事の心配もこれで片付いて、サバサバしたと言う。

「けど、なんであの若い女の先生は、わしと一緒に淡路に行かんのかいなあ。淡路知らん言うから連れて行ってやる言うのに・・・。金はわしが全部出してやる、十万円用意してるんや言うたのにな・・・。わしが年寄りでも男やもんやから遠慮したんじゃろ。だから、あんたの娘さんも一緒に三人ならええじゃろうと言ったのにな。」

小父さんは園長の方を向いて、何か訳の分からないことを口走って口惜しがっていた。園長先生は、ただニヤニヤと笑っているだけである。

部屋の中一面に散らばった白黒の四つ切り写真を、私は取り上げて眺めていた。かつて札場筋の店で見たこともある数十葉の作品は、整理中とかで、余白に小父さんの不自由な手による筆跡で簡単な説明が書かれていた。園長もその写真に関心を示し、その中の幾つかを手に取り眺めていた。それらを小父さんはいちいち解説して上げている。

「これ全部を部屋中に飾ってな、その中がわしの死場所なんだ。」

その言葉に、私は素早く園長先生の顔色を窺った。彼は、しかし知ってか知らずしてか気にも掛けずに、私もかつて注目した、香露園の浜辺で網を繕う漁師の写真に見入っている。

やがて、部屋の隅から、小父さんは新聞紙に包まれた細長い小さな物体を三本取り出して来た。

「磨けば大したもんになりますよ。」

そう言いながら、そのうちの一本を園長に、もう一本を私に手渡してくれた。中には小さな槍の穂先が包（くる）まれている。二十センチ程の薄く短いもので、黒く錆付いていたが銘が入っている。

「こんなもんは、家にゴロゴロあったんやが、いつの間にか、誰かが持って行ってしもうて、今はこの三本しか無うなってしもうたんや。残ったこの一本は、京都に取りに来い言うて置いたから、もう直き来るじゃろう。」

残りの一本を手にして、小父さんは、京都と言って、例の下宿人を指した。子供の無かった小父さん夫婦にとっては、事実上、養子のような人なのである。

この槍の穂先の出所を証明するに足りる資料が無いことを、小父さんは残念がって、代わりにとの意味なのであろうか、手文庫の中から、古ぼけた書類を持ち出してきて私たちに見せた。それは明治時代の戸籍謄本で、『士族』と右肩に書かれた欄中には、彼の祖父と父、それに家族一同の名前が列記してあった。最後に朝鮮総督の証明印が押してある。説明では彼の祖父は、對馬の宗（そう）家の家臣で、江戸勤番まで勤めた家柄だという。

私は、自分のように付き合いの浅い者が、古くからの小父さんの知人に混じって、このような貴重な品物を受け取るわけにはいかないと、

固く受け取りを辞退した。正直言って私には刀剣に趣味は無かったし、貰った穂先も古錆びた貧弱な鉄片に見えて、金を出してまで砥ぎにやることも、それから保存のための手入れも、億劫（おっくう）に思えたからである。一方、園長さんの方は、それがこの人の特性なのか、しきりに有難がって、自分が貰った槍の穂先を吟味するどころか、京都に上げるものまで小父さんの手から受け取って、欲しそうにシゲシゲと眺めていた。

「私のを上げますよ。持って行ってもいいですよ。」

私は園長先生に申し出たが、小父さんは許さなかった。どうせわしは死んでしまうのだから、形見として貴方が貰っておいてくれ、貴方にも貴方の奥さんにも、短い期間だったが、親身の世話を受けたことへのこれは感謝の印なのだと強く言うので、私は、それでは今度自転車で戴きに来ますからと言い置いて、早めにその日は其処を辞したのである。会社の帰りでもあり、実際持ち運んでいるとしても、いかに新聞紙に包んだ刃物が、短かいから銃剣等不法所持の扱いにはならないとはいえ、出張以外の通勤には日頃から鞄を持ち歩かなかったからその時には容れる袋も無く、武器の一部を素手に持ってバスに乗らざるを得なくなる。私はそうする気にもならなかったし、それに、口実を作ってまた小父さんの動静を探りに来る機会を残して置きたくもあったからである。

帰りがけに、私はこの市会議員という公職にある園長先生が、写真屋の覚悟の程をどの程度聞かされているのか訝（いぶか）しい気になった。一見、村夫子然（そんぷうしぜん）とした好々爺（こうこうや）に見えるのだが、その実、酸（す）いも甘いも噛み分けた老獪な人物なのであろう。そうでなければ、市議会の議長まで務められない筈である。死を前提とした小父さんの形見分けである今日の儀式に連なって、嬉々として贈り物を受け取るその神経が私には解らなかった。

それから二、三日後、妻が知ったところでは、写真屋の小父さんは、例の和歌山の母娘に十万円を送金したそうである。店を畳んで何やかやと整頓したら、数十万円の金がそれでも残ったそうで、そのうちの一部を、どうせ死んでしまえば不要の金だからと、不幸な人に残してやる意味なのであろう。妻は、勿体なさそうな口ぶりであったが、

「自分のお金なんだし、どう使おうと勝手よねえ、そうでしょ、貴方？」

と、それでも自分を納得させていたようである。

「本当に死ぬ気なのかしら、小父さんは。　今晩、様子を窺ってきてよ。」

そう、私を促すので、小槍の穂先のこともあるので、早めに夕飯を済ますと、私は自転車で山を下りた。

宮川沿いに阪神国道まで出ると、広い歩道を走ること二十分足らずで夙川橋である。小父さんはちょうど夕食中で一人食卓に向かっていた

が、私の顔を見ると喜んで、ビールを出して来て、牛肉を醤油で煮染（にし）めた自家製の肴を抓（つま）むよう勧めてくれた。私は、家の中が何の物音もしないので、上を見上げて二階の姉妹のことを小声で訊くと、もう、とうに解約してしまったので、今はこの家ではたった一人になってしもうたと笑っている。

「若い女の下宿人は、だらし無うて良うないわ。」

と、一般的な意味であろうが、そう付け加えてもいた。

聞きたくない話だったが、話題はそれから和歌山の婦人の方へと移った。彼は、彼女にやるつもりで、金を持って和歌山までわざわざ出向いたそうである。だが、駅で待ち合わす約束が国鉄と南海とを互いに取り違えて、一時間以上も待ちぼうけた挙句、会わず違いのすれ違いとなり、そこで帰宅した小父さんは、郵便書留で十万円を送ったそうである。

「この前、幼稚園の先生たちと神戸で一緒に食事したとき、若い先生が淡路に行ったことがないと言うから、わしが連れて行ってやるというのに、結局、その話は断られてしもうた。その時、十万円を用意しとったんや。そいつが手元にあったんで、それを送っといたんや。自分が使うも他人（ひと）が使うも同じじゃわ。」

私が幼稚園の園長先生の傍にいて聞いていた淡路行きの話を、私が知らないと思ってか、老人は弁解がましく繰り返した。

ところが今日、その婦人から電話があって、どうしても金は受け取れないから明日返しに来るというのだそうだ。

「一度上げたものは上げたもの、返しに来ても受け取れぬと言うてやった。しかし礼に来るんなら結構だからいらっしゃい。それは拒まない。暑い最中だから風呂を沸かしとく。死んだ家内が着ておった浴衣（ゆかた）も用意しとくから、遠慮なく来なさい。そう言ってやった。」

まるで落語の意地っ張りの大家（おおや）のようで可笑しい。しかも、最後はお風呂やら、浴衣やら表現が極めて具体的で艶（なま）めかしい。

「相手は女性なんですから、風呂だとか、浴衣なんぞ、口にすることは無かったんじゃないですか？」

思わず私は口を滑らした。

「どうしてじゃろ？　暑いから女御（おなご）が汗臭うて気兼ねせんように、ちゃんと前もって言うたんじゃ。親切心から言うたんじゃ。変に気を回すあんたの方がおかしい。」

私はたちまち逆襲された。

槍の穂先を自転車の前籠に入れ、私は九時過ぎに夙川橋を後にした。別れ際に、気になっていた小母さんの遺体の返還時期について尋ねる

と、大学の研究の都合上で、半年ほど予定が延びたとのことである。

「それでは、それまでは自殺は取り止めですね？」

声を弾ませて、私は念を押した。

「いやいや、もうわしは待ち草臥（くたび）れましたよ。一年喪に服したんじゃから、家内も満足でしょう。一周忌のこの二十一日までに、私は死にますわい。」

寂しげに老人は呟いた。

重苦しい気分で私は自転車を漕いだ。浜風が生暖かく吹いて、空が急に暗くなると、打出の踏み切りを渡ったころから、ポツーンポツーンと途切れ途切れに重い雨が頬を打ち始めた。翠（みどり）ヶ丘町を縦に突っ切って、阪急のガードを潜ると、今にも激しく降り出しそうな気配が感ぜられ、スピードをつけて私は岩園町から朝日ヶ丘まで駆け上った。ガタピシとガレージのシャッターを押し上げると同時に、雲の支えが外れて、ドッと音を立て驟雨が襲って来た。

「まあ運のいいこと！」

シャッターの音に気付いた妻が、居間のガラス戸を開けて顔を覗かせた。その顔にも、ガレージの中の階段を駆け上って庭先の芝生を蹴って居間に飛び込んだ私の全身にも、大粒の雨が、待っていたかのように降り注いだ。

炎暑もその年は特に激しいようである。夏の成熟を告げる高校野球の全国選手権大会も、八月十一日から例年通り阪神甲子園球場で開幕した。古くからの熱心なファンであるのに未だ一度も本場で観戦したことの無いのが心残りだった私の父が、漸く長年の念願を果たすため、数日の予定で、東京から芦屋の我が家にやって来た。七十二歳、ちょうど千九百年、つまり明治三十三年生まれの父は、自分の年齢は西暦でなら直ぐ分かるといつも言っていたが、十九世紀最後の年の生まれで、写真屋の小父さんより一つ上の年齢である。定年五十五歳まで中央銀行で働いた後、今も通勤に一時間以上かかる小さな会計事務所に毎日通っているのだが、さすがに年を取りすっかり老人らしくなっていた。顔を見るたびに、いつまでも働かせているのは申し訳ないと、自責の念に苛（さいな）まれている私であったが、父の方はせっかく取った貴重な数日の夏休みを無駄には出来ないと、現役のように張り切って、炎暑の中を動き回っていた。

新幹線で着いたその日の足で、父は私を道案内に連れて、市立芦屋病院の北東の方角にあたる高台で、それまでの高級住宅地としては古くなってしまった山手町に代わるように新たに開発された六麓荘（ろくろくそう）町に、何年ぶりかで、戦前世話になった銀行時代の上司の豪

邸を訪れた。この人は、名前にもその一字があるように豪快剛腹な人で、戦後は文部大臣や通産大臣まで務め、私の会社が主要銀行として融資を仰いでいる、関西系の大銀行の頭取となってピープルズ・バンクとしての基礎を築いた中興の祖である。その人の後輩で父も一緒の職場にいた人が、さらに引き続いてその銀行の頭取に就いて、その子息が今私の会社の枢要なポストにいるという関係からも解るように、私の会社に対しては、この大人物は大変に影響力があるということになる。

父は数え年で十五のとき、私の祖父にも当たる自分の父を亡くした。亡くなったその父が技師をしていた関係で、幸いにも国策の中央銀行で面倒を見てもらうことになり、最初は書生として働きながら夜学に通い、若くから一家の戸主として、残された四人の弟妹と母との生活を支える苦労を重ねて来た人であった。夜学ではあったが大学を卒業して正規の銀行員となってから、国営の中央銀行という学歴重視の職場ながらも、まだ三十過ぎの若さで島根県松江支店文書課長に抜擢され、そこで私が生まれたのである。周囲からはやっかまれたことであろう。このような苦労話を本人は恥と思うのか自ら話すことはなく、いつも陽気に酒を飲んで民謡を歌っていた。

その父が若い頃に仕えたこの元大臣でもある銀行中興の祖や、その後輩の元頭取のことについては、私は以前から名前は知っていたので、就職活動で今の会社に入る際に、父を通じて口を利いてもらうことは出来たのだが、そうすることで入社後の自分の行動が制約されるのが嫌だったので、私は親には何も言わず、また会社への大学の特別枠の優遇措置も使わずに、一般大学生として入社試験を受けて合格してから、初めて関西系の化合繊製造会社の名を親に報告したのだった。父の弟も、父の妹の嫁ぎ先も、また、私の姉の夫も、母の本家も皆銀行員だったから、父は寂しく思ったかも知れない。しかし銀行員という生活は私の性に合わなかった。近代的な大きなビルの中の静粛な環境で上品に働けるといわれても、実態は金勘定の金貸し業務に過ぎない。酒席では床の間を背に座り、中小の商人を見下し、上流社会にいるように三越や高島屋での買物を誇る私生活はイヤだったからである。物造りの会社の方がずっといい、そう思ってメーカーを選んだのである。

その六麓荘の豪邸の応接間からは、広々と視界を遮るものなく海が眺め下ろせる。八十数歳の元大臣閣下から私たち親子は半時間の謁見を賜ったが、案内人の私が勤める会社が自らの銀行系列にあることを知ると、彼は興味を示しながら私とも口を利いてくれた。そのとき、ほかの窓が開いていたのか急に風が室内に吹き込んで、バターンと大きな音を立ててドアが閉まった。その時のこのドアの音が、その後も私の頭から離れない思い出となってしまった。

その翌日、父は待望の甲子園に早朝から一人で出かけ、炎熱のアルプス・スタンドで傘もささずに座って観戦していたがため、顔が火膨れに腫れ上がって帰ってきた。私たちは心配したが父は平気で、ちょうど夏季休暇を二日ほど取れて家に居た私を促して、次の日には妻と孫三人を引き連れて有馬温泉に向かうという。山手町でも更に山際にある川沿いの停留所からバスに乗り、ホテルの予約をしていなかったので、

気軽に入れる大衆的なヘルスセンターで温泉に浸（つ）かった。私たち一家は湯上りに大広間で大勢の客たちと演芸を見ながら横になっていたのだが、父は上機嫌で、大きなジョッキーで生ビールを美味（おい）しそうに飲んでいた。その後で我々は、さらに宝塚の遊園地までお供させられたのである。

十六日は京都の大文字の送り火である。これも父は見たいと言うので、私たち夫婦が京都大学の楽友会館で結婚式を挙げた前日に、支度のため新郎側の宿として父も泊まったことのある下加茂の旅館『若づる』の女将に妻が電話して、不意ではあるが、満員の客の中、一部屋割り込んで借りることに成功した。その日は、二日間の公認の夏休みを消化したばかりなので会社に出ていた私は、夕刻七時までには『若づる』に直接遅れて行くが、妻と子供たちは父と一緒に先に京都に行っている手筈を整えていた。その間、父は空いた時間が勿体ないと、午前中は甲子園球場に再度出かけて、東京代表の人気者のジャンボ投手の応援をして来るというから驚きである。

ちょうど昼休みが終わって午後の勤務に机に向かった私に、これから京都に向かおうとしている筈の妻から電話が入った。

「写真屋の小父さん、とうとうやったわよ！」

直ぐに、私は妻の言う意味を理解した。そして、受話器で響く妻の声が落ち着いているのを確かめて、しくじったのだなと直感した。『やった』と言うだけで『死んだ』と言わなかったことに安堵したのである。

「いま私、病院に来てるけど、昏睡状態なの。昨日、薬飲んだらしいわ。幸い、京都の人が訪ねて来て発見したので、救急車で西宮の中央病院に担ぎ込んだのよ。

今朝から私、小父さんに何度電話しても出ないので心配してたら、さっき京都の人が電話に出てくれて判ったのよ。いま、タクシー拾って病院に飛んで来たところなのよ。ちょうどお父さんが甲子園に行ってて留守だったからよかったわ。

でも、小父さん何を飲んだのかしらね？　お医者さんも処置に困っている見たいね。」

「昇こう水と睡眠薬だよ。」

同僚に聞こえない程度の小声で、私は咄嗟に教えてやった。かつて小父さんが言っていたことを覚えていたからである。

「医者にそう教えて上げてくれ。まず大丈夫だろう。胃を洗浄すればよい。あの人の心臓は強そうだからね。

それで、今夜はみんなで京都に行けそうかい？」

「もちろんよ。でもお父さんには、このこと絶対に内緒よ！　心配させちゃ悪いでしょ。

さあ、これから急いで家に帰らなくちゃ。お父さん、そろそろ帰って来られる頃だし。」
妻の声が明るかったので、私も安心した。
『とうとうやったか！』
受話器を置いてから、妻と同じ言葉を私は心の中で呟いた。
『でも、よかったな。これで小父さん約束を果たしたのだから。もう食言を責められることも無い。』
そう思うと急に笑いが込み上げてきた。でも、なんとなく滑稽だった。死ぬという約束を果たすのは失敗したのに、決行した勇気は誰からも偉いと思われるであろう。
『小父さんは口惜しがっているだろうな。だが、死ねないものは死ねないさ。これで区切りがついたのだから、もう死のうとはしないだろう。後は成り行きに身を委ねればいい。』
私は気が晴れていた。まだ昏睡状態で重態だというのに、私は小父さんが助かるものと確信していた。
これで安心して京都に行ける、父にはこの事は矢張り隠しておこう、自分と同年齢の老人で、縁もゆかりも無い赤の他人を息子夫婦が懸命に世話していることを知ったなら、老人特有の嫉妬に近い心裡で、父も面白くないに違いない。

その夜の京都は大変な人出である。幸い私たちは旅館が取れていたので落ち着いていた。それでも慌ただしく夕食を済ますと、ちょうど八時に火が点けられ、それを二階の窓から眺めた後で、さらに表に出て、高野川の橋の袂で、夕涼みの人々の群れに混じって、私たちは『大文字』を眺めやった。それでも飽き足らなかった父を、その辺りに昔住んでいた妻の案内で、『舟形』や『妙法』、『左大文字』など、全ての火を一望できる場所を求めて百万遍まで歩き、四辻の角に建っている銀行の屋上に上げてもらって、その望みを叶えて上げたのである。
京都の街は明かりを消して暗かった。その暗闇の中、周囲の山々のみ中腹が燃えていた。年に一度、此岸に戻っていた死者の魂を彼岸に再び送り帰す仏事の意味が、とりわけ、この年の私たち夫婦には、重い響きを持って強く受け止めることができた。何も知らない父は上機嫌である。三人の子供たちも嬉々としている。下の男の子は、数日前に目の上のオデキが潰れて、その跡に大きな絆創膏を額に貼っていた。ちょうどあと五日で三歳になる年齢で、生まれて初めて『大』という、自分の名前がそれに点だけを足せばよい漢字を、しっかりと脳裏に刻み付けたことであろう。山々の火勢が順繰りに衰え始めたとき、私たちは、百万遍のレストランで生ビールとジュースで咽喉（のど）を潤（うるお）してから宿に戻った。これで夏も終わりである。そう思うと、私の胸の中に、一抹の寂しさが過（よ）ぎるのは止むを得ない。翌朝、私

一人は六時に起きて、下賀茂の宿から大阪の会社に出勤した。

病院に収容された写真屋の小父さんは、二日後に意識を取り戻したそうである。父も東京に帰ったので、妻はほぼ毎日、西宮中央病院に自転車で出掛けて行き、洗濯物や身の回りの手助けをしていた。

「貴方が年取ったら、こんなになるんじゃないかと思うと、他人（ひと）ごととして見ていられないのよ。」

自分が先に逝（い）って私が残ると勝手に決めて、妻は冗談めかしていたが、そう言われれば私も小父さんと性格的に似たところがあるので、自殺を試みるようなことはしなくとも、病気になれば同じように他人に迷惑を掛けないとは保障の限りではない。

「俺は小父さんほど貞節ではないから、若い奥さんを貰って世話させているさ。」

私は、憎まれ口を叩いて応じていた。

私は直ぐにでも見舞いに行くべきだったのだが、何故か気が進まず行き難かった。オムツまで当てがわれて、排泄物の始末も自分ではできない老人の姿を見るのは忍び難かった。彼もそんな醜い姿を私に見られたくないであろう。正直のところ、病院で顔を合わしても、何を話せばよいのか分からなかったからでもある。

「俺が行くと、笑い出してしまうかもしれないぞ。」

妻にそう言ったこともあるが、そのような態度を現実に採る可能性が自分にあることも、確かに否定できないことである。私は専ら妻の口から状況を聞くことで満足していた。

あの日、十六日、前夜に薬を飲んで眠り込んでいた小父さんを助けたのは、京都に住む元の下宿人夫妻であったことは聞いていた。小母さんの亡くなった時も肉親同様に湯潅までして上げて、葬式万端を整えたというこの二人は、一年ぶりに小母さんの新盆に、霊前に詣るため、その日午前中に夙川の家を訪ねたという。ところが戸は閉まっていて開かない。変だと直感した二人は、近所から借りてきた梯子で塀を攀じ上り、内庭からガラス戸を叩き割って部屋の中に入ったという。すると、扇風機が点けっ放しのまま回っていて、その下で小父さんが倒れている。驚いた二人は、救急車を呼んで病院に担ぎ込んだのである。

何ともタイミングのよいことで、このあたりの描写は、小父さんの好きな四柱推命では全て予め定まっていた筋書きとでも云うのかも知れない。いずれにせよ、私たちと違い写真屋さんと京都とは、余程強い繋がりで結ばれているのであろう。小父さんを病院に運び入れてから、京都夫妻は再び夙川の家に戻って、その日であったか或いは日を変えてか定かではないが、現金、預金通帳、カメラなどの貴重品を持ち出し

て行ってしまったという。勿論、留守宅となる不用心から、盗難を恐れての行為であろう。だが、と、ここで妻の京都に対する疑惑が芽生えて来るのである。

「預かったのだったら、後で小父さんの意識が戻ったら返すべきでしょう？　ね、そうでしょう？　小父さん、お金が要るのよ！　下着だって、鼻紙だって、それに病院の食事は不味（まず）いから、買い食いする必要があるのよ。」

病院では、小父さんの身の回りの世話のために、市から付き添いの看護人を付けてくれている。そのお婆さんに、京都は少額の金を預けて行ったそうであるが、その範囲内で遣り繰りするのはお婆さんは大変だと、妻は同情していた。

「小父さん、京都とうちに、遺書書いていたんだって。それ、京都が持っているんだけど、そこに京都にお金は全部上げると書いてあるのかしら？　民生委員の奥さんも付き添いのお婆さんも、口を揃えて、どうも京都は怪（おか）しいって言ってるわよ。特にあのお婆さんは、永年の経験から、人を見る目が肥えていて、とっても勘のいい人なのよ。」

妻は、いつもの主観的な論法で、他人の支持を特に強調して口惜しがっている。

「遺書は死んでから法律上の効力が発生するんだから、死に損なった小父さんのそんなものに、何が書いてあっても駄目さ。」

法学部出身の私は、いっぱしの知識をひけらかすようにそう言って、さらに、

「この問題は、僕らの問題じゃないよ。写真屋の小父さんが京都に言えば済む問題だよ。僕らは京都に比べれば、小父さんとは極めて薄い関係さ。お金のことに口を挟むと、痛くも無い腹を探られることにもなりかねない。

ほんの通りかかりの通行人の立場に徹しようよ。」

私は、次第に感情的な見方をしてくる妻を抑えた。

西宮中央病院に、自殺未遂の小父さんを私が初めて見舞ったのは、ちょうど小母さんの一周忌にあたる二十一日の夜のことである。たまたま会社の出張で東京に行く前の日であり、また長男の三歳になる誕生日でもあった。会社から帰宅して誕生祝いの晩餐を終えた後で、妻は私に、是非、小父さんを見舞って、貴方の口から二度と馬鹿な真似は仕出かさないことと、もう一つ、退院したら老人ホームに必ず入ることを約束させてくれと頼むので、まだ明るかったから自転車で家を出た。阪神甲子園の全国高校野球を二日続きで順延させていた雨も上がっていた。

何でも、妻の話では、ついこの間、付き添いのお婆さんがチョッと目を離した隙に、小父さんが一人で階段を這い下りるのを見付けて取り

押さえたそうである。川に飛び込んで死ぬのだと口走っていたという。それを聞いたとき私は、そんな馬鹿なことがあるものか、死ぬなら窓から飛び降りればいいじゃないか、わざわざ病院を抜け出して、直ぐ近くとはいえ水深の浅い川まで這って行けるものか、それに一度死に損なったら、もう自殺する気にはならないものだよと笑って、妻の伝聞を何かの間違いさと否定しておいた。周囲の人たちが、特別の目で自殺未遂者を眺める弊を、私は恐れたのである。

中央病院は、かつて小父さんが脳溢血で倒れたときに見舞いに来た同じ病院である。九年ぶりになるであろうか、汚く臭気を発するドブ川を、これが小父さんが飛び込もうとした宮川かと思いつつ渡って、暗くなってきた夜道を記憶をたどりながら自転車でグルグルと探し回った挙句、やっとその建物を見付けることができた。通用門から忍び込むように入って病室を探す途中、通りがかった開け放された一室から、洗濯した何枚ものシーツにアイロンを掛けているその蒸気が、白く廊下まで立ち籠めて、それが強く鼻を刺激した。思わず私は吐き気がして口を押さえた。並んだ病棟の連なる室々からは、長い療養生活に慣れ過ぎた人が多いのか、雨上がりの蒸し暑い夏の夜を持て余すかのように、ステテコ姿で窓際に乗り出して、ラジオでナイターの野球放送を聞きながら夕涼む姿が、あちこちと認められる。

小父さんの部屋は、北側の棟の二階にある。其処に一人で彼は入れられていた。私が入って行くと、どこからか付添いの老婆が私の姿を認めて、すぐ後を追うように黙って随いてきた。寝ていた老人はすぐに私であることに気が付いた。薄い胸と青い血管の浮き上がった細い腕が痛々しく、下半身に当てられたシーツ代わりのビニールがゴワゴワと鳴った。

「ダメだったヨォ。」

長く間延びした声が、遠くの人に話し掛けているように、上を向いたまま老人の口から放たれた。

「ビールと睡眠薬と昇こう水を飲んだんやけどなァ・・・・・・・・・・。

あの昇こう水は飲みにくかったなァ・・・・・・。」

その声は、伸びやかで、却ってユーモラスだった。

「その日に死ぬつもりは無かったんだよォ・・・。ビール飲んでたらいい気持ちになってなァ・・・、このまんま寝ながら死んで行けたら楽でいいかなァと思ったんだよォ・・・。でもなァ、目が覚めたら此処に居ったんじゃ・・・・・・。」

小父さんはチョッピリ口惜しそうだった。

私は急に可笑しくなってきた。本人にしてみれば、それこそ一世一代の大事を決行したのに、その純粋な行為を邪魔されて挫折させられたのだから、何と運の悪いことであろうか。ちょうど薬を飲んで意識不明となっていたところを見計らったように、遥々（はるばる）京都から、

まるで鞍馬天狗のように助っ人が駆けつけてきて、梯子を伝って家に入り込み、危機一髪で彼の周到な計画を挫いてしまったのである。そうでなければ今頃は、こんな病室で苦しむことも無く、綺麗サッパリ憂き世とおさらばして、あの世とやらで小母さんに、「お待っ遠さん」と声掛けていたところなのに・・・。

「さあ小父さん！　これで区切りが付きましたね。死ねないときは何をしてもダメですよ。もう後は成り行きに任せましょうや。」

私は努めて明るく話しかけた。

「小父さん、今まで貴方は立派に生きて来ましたよ。これからは、生き方を変えて、他人に迷惑を掛けてやりましょう。もう、我侭をして他人（ひと）に世話をさせてもいいのではないですか？」

「いやァ、他人に迷惑を掛けたらあかん。」

「相変わらず頑固だなあ小父さん。まるで駄々っ子みたいですよ。小父さんのお父さんやお母さんが見たらなんて言いますかね？　坊や、強情張ったらダメですよ・・・。」

ここまで話したとき、突然、不覚にも私に嗚咽（おえつ）が襲って来た。自分でも意識しないうちに涙が溢れて来たのである。

かつて夙川の家を初めて家族で訪ねた夜、見せてもらった古いアルバムの中の一葉の写真を思い出したのである。朝鮮で撮ったというその変色した七十年前の白黒の写真には、鬚を生やして軍人のように堂々とした父親と、高い髷を結いきちんと和服を着こなした母親、それに振袖姿の姉に囲まれて、まだ幼い可愛い姿が写っていたではないか。今、たった一人、全くたった一人で、生まれ故郷を遠く離れた病院のベッドに横たわる老残の人の、紛れも無く、かつて確かにあった暖かい平和な家庭を思い出したのである。

「そうそう、今日は小母さんのご命日だったですね。一緒にご冥福をお祈りしましょう。」

慌てて誤魔化すように話題を変えると、いきなり静かに私は般若心経を唱えだした。涙が出て来るのを気取られたくなかったのだ。

「この人の奥さんはなァ、わしは何にもして上げていないのに、こんなによく面倒を見てくれるんじゃよう・・・。ほんまになァ、実の子でもなァ、こんなにはでけん。わしの着てるものまで脱がして洗ってくれたんじゃァ・・・・・。

十年ほど前、結婚したてのこの人の奥さんに、確か一回か二回、わしは金を用立てて上げたことがあったんじゃよう・・・・。いつでもいい言うとるのに、ちゃんと月給貰うたら律儀に返しに来るんや。本当にいつでもよかったのになァ・・・・・・。」

小父さんは、私の隣で長椅子に腰掛けて、先ほどから黙って話を聞いている付き添いのお婆さんに、ゆっくりと話しかけた。しかし、此処まで話すと突然言葉が途切れ、彼もまた嗚咽し始めたのである。

「ダメやないかい。静かに寝とらにゃあかんが！　さ、オムツ取替えようかい。」
叱りつけるように老婆が立ちあがったので、私は、見てはいけないと思い、その間、席を外して階段の踊り場で待つことにした。風が全く凪（な）いで、ラジオの音があちこちの病室から賑やかに聞こえてくる。
「私の爺さんがなァ、江戸の藩邸で死んでるんですョ・・・。何処かわしは東京のことはよう知らんので判らんのだが、そう聞いておるだけに何となく懐かしゅうて、いっぺん行ってみたかったなァ・・・・・・。」
病室に戻った私に、私が明晩東京に出張するという話から、小父さんは、若いとき一、二度上京してみたことはあるが詳しくは知らない東京の模様を口にして、自分の祖父の思い出に結び付けていた。
「藩邸ならすぐ判りますよ。對馬の宗氏でしょ？　江戸末期の地図を調べれば簡単です。大学の図書館に寄って、見てきて上げますよ。」
私はそう言って。老人の示したささやかな関心でも、それを繋ぎ留めることで再生の契機を与えることになるのではと、気軽に請け負ったのである。

東京への出張は、月に一度か二ヶ月に一度ある。早い方がよいと思ったので、私は明晩からの東京行きを利用して、早速調べることにした。浅草言問橋近傍の雑誌社に、皮革関連の統計資料を翌々日の午後貰いに行く用事があったので、その途中、正午、私は地下鉄で本郷三丁目で下りて、大学の図書館に寄ってみた。卒業直後、入館証の発行を求めて、毎年書き換えて常時定期券の中に入れていたので、いつでもこの巨大な大学図書館は利用できる。
江戸古地図は、発行年次別に何枚も保存されていた。私は、江戸末期の嘉永と慶応版二枚を借り出して、閲覧室の机の上いっぱいに広げて覗き込んだ。しかし思いの外この作業は楽ではない。大名でも、御三家とか加賀、薩摩、仙台などの大藩は、屋敷の面積が広いので直ぐそれと知れる。だが、米が採れないため石高（こくだか）さえつけられない對馬藩の江戸屋敷は、旗本同格の扱いなので、それこそじっくりと時間を掛けて、縦、横、斜め、逆さまにして捜さなければならない。昔の人は、地図を作るのに方角に重点を置かず、家の正面に重きを置く発想だったのか、書き入れられた字の方向がバラバラで、その都度、図面をひっくり返して眺めなければならないのである。小さな字を嘗めるように拾って見ているうち、休み時間はドンドン無くなっていく。意を決して私は、日本橋を中心に徐々に目を広げていくやり方に変えた。幸い直ぐ小石川と浅草橋の両方で、目指す名前と家紋が見付かった。どちらも小さなものであるが、それでも、脇坂淡路守の屋敷の隣に接する浅草橋の方が、形から見て本宅であろうと判断した。これから仕事で行く途中に当たる。ラッキーとばかり、手帳に略図を描きとって、私

は図書館を出た。
夏休み中のキャンパスには動く学生の数は少なく、三四郎池の樹木の茂みに蝉を求めて、近所の小学生が捕虫網を付けた竹竿を持って遊んでいた。構内バスで上野まで出て、駅前から墨田公園までタクシーを走らせる途中、私は運転手に『しゃみせん堀』という堀は、今でもこの近所にあるのかと、先ほど図書館で広げた古地図で對馬藩の江戸屋敷があった辺りの地名を尋ねたところ、「さあ？」と彼は首を捻っていたが、
「左衛門橋という橋があるところですよ。」
手帳を見ながら私が補足すると、「ああ」と頷いて、
「そちらにやるんですか？　そこの角を右に曲がったところですよ。」
と方向を変えようとスピードを落としたので、私は慌てて、
「いや、いいんだ。昔あの辺りに行ってみたことがあったので・・・。」
言葉を濁しつつ、まるでタイム・スリップしているような錯覚を私は楽しんでいた。

小父さんは、西宮の市立中央病院に、結局一ヶ月ちょっと入っていた。身体の方はほぼ旧に復しつつあったのだが、落ち着く先がないので、保護観察の意味も兼ねて、病院が預かっていたというわけである。
「いつまでも此処に居てもいいと、医者は言っておったからなあ。」
知ってか、知らずか、彼はもっと長く其処に居たい口ぶりであったが、裏では工作が着々と進められていた。これには、妻が大いに関わっていたのである。また、市会議員を兼ねるあの幼稚園長も一方で骨を折っていたらしい。しかし妻に言わせると、園長先生の動きを、却って市役所の担当者は迷惑気に受け止めているようである。議員の特権で圧力を掛けられるので、仕事がやり難いのだそうだ。妻は民生委員と共に、市の福祉事務所に掛け合い、順番待ちが多い中を、小父さんのケースは最優先の特例に当たる筈だから、市営老人ホームに収容して貰えないかと強引に事を運んでいるらしい。
「小父さんは、さも、自分が市会議員と知り合いだからという顔をして、市の施設へなら、入ろうと思えばいつでも入れるような口振りだけど、本当は、私と民生委員が、正規の手続きを通じて決めて貰ったのよ。」
妻はそう強調していた。

案じていた小父さんの意向も、意外にあっさりと同意を与えてくれ、いよいよ九月二十三日、秋分の日に退院し、翌二十四日、市の中央部の上ヶ原台地に位置する愛宕（あたご）山の無料老人施設『寿（ことぶき）園』に収容されることが決定された。

この間、数度、私は病院に小父さんを見舞った。二度目に訪ねたときには、彼は個室から五人部屋に移されていて、付き添いの老婆も姿を消していた。帰りがけに久しぶりに札場筋を自転車で走ってみると、『フタバ写真店』は様変りしていて、ガラス戸に『電話売買斡旋』の貼紙やら、不動産の紹介文がベタベタと貼られて、ちょうど中年の男が脚立に乗ってペンキを戸口に塗っているところであった。訴訟相手の写真屋の小父さんの境遇を知ってか知らずか、家主は計算違いの幸運が舞い込んで来たので、かねて考えていた事業に早速乗り出したことが窺われた。

秋分の日、朝のうちどんよりと曇っていて雨が案じられたが、私たち夫婦は、上の二人の娘を留守番役に家に残し、長男の手を引いて早めに家を出た。小父さんを車で運ぶつもりだったので、その日ばかりは自転車をやめて、バスで国鉄芦屋駅へ出たのである。国電を一駅乗って、西ノ宮駅から病院に着いたのは十時を少し回った頃であった。予（か）ねて妻が定めておいた手筈どおり、小父さんの身柄を受け取りに、退院の手続きを済ませて、夙川の家まで送り届けるつもりである。しかし何ごとも思う通りには運ばない。病室に入った私たちは、ベッドが既に綺麗に空になっているのを見て驚いた。同室の患者で妻と顔見知りになっていた学生が、ついさっき、誰か迎えの人が現れて、小父さんを連れ出して行ってしまったと教えてくれたのである。

「どんな人？　夫婦連れ？　京都よ、きっと！　いや、あの園長かも知れない！」

彼女は顔を引きつらせた。

「せっかく決めておいた約束を破って！・・・」

妻は先に立って、血相を変え、走るように病院を出た。今度は、私たちは西宮東口から阪神電車に乗り、香露園で下りた。夙川の土手を妻が足早に急ぐので、私と長男は土手のブランコで遊んでから、一足遅れで御茶屋所町の小父さんの家に着いたのである。

これまでに、私はまだ一度も会っていなかったが、京都と妻との関係は気まずいものとなっていることに、既に私は気付いていた。市会議員の園長先生についても、彼女の目から見れば、この、人を食ったような園長が京都と腹を合わせて小父さんから金を巻き上げている片割れと見えるようである。小父さんの所持金は三十数万円あることが判り、この金を京都と園長は強制的に取り上げ保管しているという。必要なその都度、彼らは小父さんに代わって支払うか、付き添いのお婆さんに小銭を小刻みに与えて買物の用に充て、決して大金を小父さんの自由

にはさせていない。まるで、幼児か準禁治産者に対するような扱いであるが、それというのもかつて小父さんが、縁もゆかりも無い和歌山の女性に十万円の大金をポンと気前よく上げてしまったことを、言わなくともよいのに小父さんはこの事を、自慢たらしく誰彼となく吹聴するものだから、息子代わりを自認する京都が怒ってしまったのに起因している。金を持たしたら精神状態の普通でない老人は、気前良くみんな他人にやってしまうだろう、また、これは後で確認をしたところそうではないと判ったのだが、市の無料老人ホームに入る資格としては財産を少しでも持っている人は該当しない、だから京都と市会議員でもある幼稚園長の二人が代わって預かっている、という理屈になる。

これに対して妻の理屈はこうである。小父さんは、病院に入っていても事故の処置さえ済めばすぐ元通りの体になる、特に病人というわけではない、食事も普通の人と同じように食べられる、まして、常日頃から、年寄り夫婦だけの気楽な所帯生活をして来て、口も奢って贅沢である、病院に居ても美味（うま）いものを食べたいことであるし、また、下着なども入院生活では通常よりも余計に買わなければならない、勿論、京都や園長先生に請求すれば出して貰えるだろうが、毎日訪ねて来るわけではないし、また、その都度貰うのも煩わしい、何と云っても自分のお金ではないか、他人に頭を下げるような真似をどうしてしなければならないのか。

私は、金銭に絡んだ人間関係に首を突っ込むのは、嫌だった。妻の気性は充分弁（わきま）えているので、一面的な見方から、感情的に物ごとを判断してはならないと常日頃から注意していた。この問題でも、私が小父さんの金を預かることになったら、矢張り京都や園長先生のように、法律上の善良な管理者の注意義務を持って、本人、つまり小父さんの金銭であってもその本人の自由にさせず、本人のためを思って厳格に扱うだろうと思ったので、差し出がましい口を入れてはならないと、妻を抑えたかった。まして京都にしろ園長にしろ、写真屋一家とは二十数年来の付き合いをしている仲なのだ、一人は息子同然な間柄であり、もう一人も大切な仕事上の客であり恩人でもある仲である。私たちとは付き合いの深さが違う、あくまで、くどいようだが私たちは、通りがかりの通行人の果たすべき控えめな義務だけを提供すればいいではないか、いずれにせよ、善意の人たちの集まりに、険悪な感情を持ち込んではならない。私はこれまで、何回となく妻にそう言っていた。

このようなことをあれこれと考えながら、私はブランコに遊び飽いた長男の手を引いて、妻よりもかなり遅れて小父さんの住居に着いた。其処には、市会議員の園長先生夫妻が礼服に身を包み、対照的に寝巻き姿の小父さんとともに部屋の中でウロウロとしていた。退院手続きを取ったのは京都ではなく園長先生だったのである。彼らは自分の車で写真屋を此処まで送り届けたのだが、これから結婚式に参列しなくてはならない彼らとして、小父さんを一人にして置く訳にはいかず、そのようなことは判っていた筈なのにどうしたものかと、京都からの遅い連絡を待っていたところなのである。そこへ、血相を変えて私の妻が飛び込んで来て、打ち合わせていたのと違うと不実を詰（なじ）ったのである。ひと悶着あったことは想像に難くない。

私の顔が仏（ほとけ）のように見えたのか。園長夫妻は、支払いは全て済ませましたのでと言い置いて、
「チョットこれから婚礼なので・・・・。」
ホッとした様子で、後はよろしくと、そそくさと去ってしまった。
私たちは、直ぐに帰るべきであったろう。しかし借主の小父さんは、明日は老人ホームに入り、もうこの家には戻って来ないのである。家の中を今日中に整理してこの家を家主に明け渡さなければならない。
しかし、肝腎の小父さんは、
「面倒くそうて敵（かな）わんわい。古道具屋を呼んで、みんな売り飛ばしたらええ。」
と、具体的な指示は何ら与えない。全部売り飛ばせと言われても、道具屋も困るだろう。整理屋ではないから、売れそうなものだけ選んで、後はそのままにして帰って行ってしまうに違いない。また、小父さんの方だって、最低限、施設での生活のため、衣服などの身の回りの生活に必要な小物を仕分けて持って行かなくてはならない。
そんなところに、京都の夫婦がライトバンで駆けつけて来た。私とは初対面である。夫婦とも私たちより数年年上といったところで、亭主の方は眼鏡越しに柔和な目を向けて、大柄でなかなか腰の低い男である。奥さんの方は、矢張り眼鏡を掛けていたが、顔は浅黒い。女性だけに、眼鏡がしっかり者と云った印象を与えていた。この女（ひと）の父親が京都で印刷屋を始め、その店を奥さんの兄弟と一緒に自分の亭主を事業の中心に据えて引き継いでいるそうである。これではご亭主は、借りてきた猫のように頭が上がらないであろう。
奥さんは妻に、「つい最近、婦人科の手術を受けたばかりなので、小父さんの世話が行き届かなくて済みません。」と詫びていた。
亭主は、私の手元を見咎めるように、早速訊ねてきた。
「その荷物どないしはるつもりですかい？」
「こちらに纏めた物は養老院に写真屋さんが持って行く物、此処に置いてあるのは、古道具屋を呼んで売り払うつもりです。」
「あなた、今どき古道具屋もないでしょ！　市の清掃車でも、お金を出さんと持って行ってくれまへんよ。そないなことしはってもあきまへん。それよか、世話しとうた私らで、必要なもんは引き取りましょ。お金払うてもええですわ。」
「そうですか。では、もし、要るものがあれば小父さんに言って、貰って下さいよ。小父さんは、さっきから、あれもやろう、これも貰っとけと言ってくれますが、我が家では、みんな揃っているのでお断りしたんです。それでは、碁盤を持って行け、囲碁の関係の本も一緒に持って行けと言うんですが、私は碁はやらないので、誰かやる人に上げればと言っているのですが、囲碁は覚えておくと役に立つから是非持っ

て行けと言われているんですよ。」

実際、私は囲碁よりも将棋の方が好きだった。囲碁は、父が四段の資格を日本棋院の本因坊から与えられて、大層厚い栢（かや）か柘植（つげ）の木で作った重量のある黄色の碁盤に、那智の黒石と、膨らみを持った貝殻の白石を並べて、日曜になると、それを陽のよく当たる縁際に近い座敷の端に持ち出しては楽しんでいたので、とてもその趣味が高尚なものに思えて自然に敬遠するようになり、庶民的な将棋の方に興味を持っていたのである。

「私も碁はやりません。誰かにやる云うても、すぐには相手は見付からんのやし、あんた、それまで預かりはってくれまへんか？

他の物は、うちらで分けましょうや、何があるかいな、あの額はよう判らんけど値打ちもんかも知れんな。」

彼は傍らの奥さんに、長押に懸かった大きな字体が書かれた扁額を指差した。

「冷蔵庫もええわね。本箱も立派やし。こないな物は、施設では個人の持込は、禁止やろ？」

二人は、真剣な眼差しで、部屋の中を見回している。

「何でも欲しい物があったらみんな持ってけ！」

小父さんは、横に大きく手を振って、どうにでも勝手にしろという仕種（しぐさ）をしていた。本人にとっては不本意なことであろう。三十年近く住み着いた思い出の詰まる我が家との訣別のときに、ゆっくりと名残を惜しむこともできない。一ヶ月ぶりに病院から帰ったその家は、他人が寄ってたかってひっくり返している。

「今月いっぱいは家賃払うてあるんや。わしは、もう自殺せん言うとるんじゃ。わしは約束は必ず守る。何も急いで養老院に入れんでも、暫くこの家で落ち着かせてくれんかいな！」

老人は悲鳴に近い嘆願を先程らいしているのだが、京都や私の妻の耳を貸すところではない。

家の中は修羅場となってしまった。その中で、折から民生委員の婦人が差し入れてくれた天婦羅蕎麦を、五人の大人と一人の幼児とが、小さな茶卓に寄り集まって、額を合わせるようにして啜った。呉越同舟で、皆それぞれ胸のうちの想いは様々である。

片付けは、その昼食が終わってから直ぐ再開された。その取り込みの真っ只中、二人の婦人が相次いで訪ねて来た。最初に現れたのは、『フタバ写真店』隣の和菓子屋のお女将（かみ）さんである。写真店が店を閉めた後、まだ客が受け取りに来ないＤＰＥの残りを預かっていたとかで、入金した少額の売上金を届けに来たのである。私が思っていたように、写真屋の小父さんは頑としてこの金を受け取らず、今までの交誼にこの金を和菓子屋に差し上げると言った。その言葉に乗るように、妻が横から口を入れた。

「この水屋（みずや）、和菓子屋さんに引き取って貰ったらどうでしょう。まだ新しいしね、小父さん。」
「おう、そうそう。あんた、よかったら、この水屋もらってください。」
小父さんに言われて、和菓子屋の女将さんは、
「まあまあ、こんないい物を・・・。」
と愛想を言いつつ帰って行った。
もう一人の訪問客、と云っても遠路ではなく、それは二軒置いた隣に住む大家のお婆さんである。もう八十はとうに越えた年恰好であるが、なかなか元気な足取りで家の中に入り込み、したり顔であちこちと点検し出したのである。二十数年ぶりの引越しということで、大家の役割を果たすつもりらしい。
「フンフン。なかなか綺麗に使うて下さりはったのう。フム、これなら行けるわい。」
手を腰の辺りに後ろに組んで、小太りの顔を崩しながら、何が行けるのか、彼女は頭の中で計算しているようである。それから、借主の小父さんの視線を避けるように、
「ハイ、さいなら！」
目も合わさず気軽にサンダルを突っかけて、帰って行ってしまったのは面白かった。
「何を！　あの欲張り婆あ奴（め）が！　わしはこの家を借りてから、何から何まで全部自分で手入れして使うて来たんや！　大家の世話になってないわい！」
老婆の後ろ姿に罵声を浴びせて、写真屋の小父さんはいまいまし気（げ）である。
片付けは、午後になってもまだまだ長く掛かりそうであった。それほど物が沢山あるというわけではないのだが、皿一枚に至るまで帰属を決めかねているので大変なのである。横から観察していると、妻の役割は専ら、
「このミシンは大家さんに差し上げたら？」とか
「この扇風機は町内会が買ってくれるって、民生委員の小母さんが言ってたわ。」とか、
できるだけ家財を京都に持って行かれないようにと努めているのがよく解る。
私はボンヤリと、一ヶ月程前、京都夫妻が割って入ったというガラスの割れた引き戸越に、庭を眺めていた。狭い庭の中央に赤い彼岸花が咲いている。

『ああそうだ。今日はお彼岸の中日か。』
私は気が付いた。
「おい、この花、貰って行こう！」
私は妻に声掛けた。だが、妻は、何ごとか夢中で京都夫妻と話し合っている。
「おれはチョッと、この子を連れて遊んでくる。」
ちょうどむずかりだした長男を口実に、私はその場を逃げ出すことに成功した。
夙川の土手に登ると、線路際の地蔵堂に灯明が上げられ、幕が引かれて三々五々人々がお詣りにやって来るのに気が付いた。たまたま祭礼の日に当たっているのであろう。平素は寂しげに取り残されていたお堂も、今日ばかりは晴れがまし気（げ）である。長男の手を引いて参拝すると、堂の中に腰掛けていた初老の婦人からお菓子を貰って、三つになったばかりの息子は喜んでいた。狭い堂内にベタベタと貼られた紙には、和讃やら御詠歌が書かれている。私は気分が次第に安らいでくるのを感じていた。こんな一坪にも足りない小さな祠なのに、国道の方からもポツリポツリではあるが参詣の人々は絶えなかった。殆んどが婦人か子供である。みんな土地の人なのであろう。朝方の曇天が晴れ上がり、暑くもなく寒くもなく、いかにも穏やかな秋日和となったお彼岸の中日を、彼らはゆっくりと楽しんでいる。そのすぐ近くの家の中で繰り広げられている地獄絵図などまるで別世界のように、みんな仏（ほとけ）心を顔に浮かべて平和である。
鉄橋を潜って公民館の池の畔まで行って、私たち親子二人が小父さんの家に戻ったときには、作業は大方一段落していた。小父さんの身の回りの物は、老人ホームに持っていける当座の衣類を除いて、冬物は全て箪笥に押し込んで、私の家で預かることになっていた。また彼がこれまでに撮った写真のネガは、大切な記録として捨てるのはどうかと案じ、私たちが預かることにした。ポジの四つ切りは、すでに帰属が決まっていて無くなっていた。店のショーウインドを飾っていた万博のロシア人形の写真は、和菓子屋の娘さんが早くから目を着けていて懇望されたとかで、また、かつて私も感心した香露園の漁師の図は、市会議員の園長先生が市の貴重な資料にと既に持ち帰っていて無かった。
京都は扁額と本箱のほか、冷蔵庫と皿の類を貰っていた。後に残された品々は、洗濯機と、ポータブルテレビ、それに小型扇風機といった電気製品ぐらいなものである。これ等は、病院の付き添いをしていたお婆さんにでも差し上げたらという妻の意見も出たのだが、結局は帰属が決まらなかった。
小父さんご本人の身柄は、今晩一晩だけ私たちが芦屋の家に連れて帰り、明日の朝、老人ホームに収容するため市の係員が、この夙川の家に迎えに来る時間に合わせて、妻が責任を持って此処へ送り届けるという手筈になった。つまりは私たち夫婦が、保護観察の役割を担わされ

たのである。
私たちが預かる荷物は後で運ぶということにして、今夜のところは小父さんのみを連れて帰ろうとして、フト、私が茶卓の上を見ると、京都の亭主が紙切れに何か書いている。
『
一、碁盤、碁石、本、箪笥、衣類、布団、写真ネガ・・・・・・・・・・・・・・・・芦屋
一、本箱、冷蔵庫、皿、額・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・京都
一、水屋・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・和菓子屋
一、扇風機（大）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・民生委員
』
それを読むと私は大変不機嫌になった。後々の記録として書いたものであることは解るが、貰った所有物と、預かった借用物とが区別無く同列に書かれているではないか。まして大きな扇風機は、民生委員が譲り受けた物ではなく、夙川町内会に有償でこれから売ろうとしている物である。私は抗議しようと思った。しかし返ってくる答えが分かるので、すぐに思い直して、妻に対して声を荒げた。
「オイッ！　うちが小父さんの身の回りの物を預かるのは不可解（おかしい）じゃないか！　愛宕山の養老院に家が近い園長先生にお願いしたらどうなんだ！　その方が出し入れにずうっと便利じゃないか？　すぐ、電話しなさい！」
私の剣幕にビクッとして、妻は受話器を取り上げた。因みに、この電話は隣家と親子で繋がっているもので、単純に小父さんだけの一存では処分出来ない。大家さんが、次の入居者に買わせると、既に請け負った物である。しかし、園長先生夫妻は婚礼の席からまだ帰宅していなかった。
全てに決着をつけてから、もう薄暗くなった阪神国道を、私たち親子三人は、京都の車に小父さんを一緒に乗せて芦屋へと西に走った。助手席に座った私は、京都の亭主が話し掛けて来ても、ほとんど口を利かなかった。最後に見た紙切れのことで、私の京都に対する印象は、妻と同様、決定的なものになっていた。
車が宮川を渡ってから、右折して国鉄のガードを潜った頃、私は、小父さんの家の庭から彼岸花を持ってくることを全く忘れてしまっていることに気が付いた。
翌朝、写真屋の小父さんは、家内に連れられて、タクシーで再び夙川の家に戻り、民生委員や市の福祉関係者の案内で、無事に愛宕山の無

料老人ホーム『寿園』に入ったそうである。その際、京都の夫妻もわざわざやって来て、立ち会ったという。

「それなら、昨夜、小父さんを京都で預かって貰えばよかったじゃないか！　お前、あまり出しゃばっちゃいけないよ！」

私は妻に語気強く注意した。これまで市役所関係の手続きに駆けずり回って、漸く無事に施設に小父さんを収容するというところまで漕ぎ着けた彼女は、頬を膨らませていた。

写真屋の小父さんの入った市営老人ホーム『寿園』のある西宮市愛宕山は、私たち夫婦が新婚当時住んでいた越水町の東北で、距離も近い。近いと云っても約二キロメートルは離れた上ヶ原台地の一角で、当時はその愛宕山より遠い関西（かんせい）学院にはたびたび散歩していたのに、何故かその辺りには足を向けたことがなかった。山と名付けられているのは、ちょうど台地の南外れに位置していたので、市の中心街からは急勾配の坂道を登らなければならなかったからである。同じく台地の東外れに当たる岡田山とは谷で隔てられ、その谷を越えて、岡田山に建つ神戸女学院の茶色の洋館が、愛宕山から手の届きそうな位置に望めた。この二つの学院は、いずれも古くからのミッション系の学校である。

このように、谷とか丘のような低い山で変化を付けられた一帯は、自ずと恰好の住宅街になる。芦屋から西宮にかけて陽当たりいい北側丘陵地帯が高級住宅地となったのも、地の利からして当然である。『寿園』もこの住宅街の一角に設けられていた。東西に並列する数棟の平屋最北棟に、小父さんは一室を宛がわれた。一室と云っても八畳の間取りに四人なのである。畳二枚が一人の占める面積と意列

いう計算になる。窮屈な環境の中に押し込められるのでは、プライドの高い小父さんにとっては、まことに不本意なことであろうが、自活の術（すべ）も、また意欲も無くなったのであるから、贅沢は言えない。

小父さんの荷物は、妻の取り計らいで、芦屋の我が家に毎日豆腐を売りに来る若い商人が、夙川市場に店を持っているので直ぐ近くだからと気安く引き受けてくれたので、その人の善意に甘え、御茶屋所町から我が家のガレージに運び込まれた。あれだけ大人四人がまる一日がかりで整理した筈なのに、小物でも、集めると軽四輪にいっぱいとなる。衣類を詰めた桐箪笥に、寝布団、座布団といった物ばかりであるが、京都が持って行く筈の小母さんの鏡台と、中央病院での付き添いの老婆に京都が電話して一万円で売りつけようとして一蹴されてしまった洗濯機など、落着き先の定まらない物は、自然に我が家が預かる形になってしまった。

車を所持していないので、数台の自転車を片隅に押しやると、ガレージは物置としての用は何とか果たせる。ただ、湿気抜きが工夫されていないので、衣類など収納しても、時々は干してやらないとカビが生えてくる心配がある。その点で、箪笥ごと老人ホーム近くの園長先生宅

で預かって貰うべきであると、私は再三、妻に言っていたが、妻との間が多少気まずいものになっていた園長先生を煩わすこともなく、いい按配に、もっと立地条件のよいところに住む人で、小父さんとも旧知の人が現れたのである。

小父さんが愛宕山に収容されてから一週間も経たない九月末の土曜日であったが、私は妻の頼みで、老人ホームに小父さんの掛け布団を四つに折り畳んで、自転車に積んで施設に届けたとき、その人に出会ったのである。『やまぶき』と名付けられた小父さんの部屋で二人で話しをしていた時である。他の同室者は、折りよくどこかに出掛けていて留守だった。

「わしは、できるだけ相手の立場を考えて、好意的に考えて見るんやが、何としても今度の場合、裏切られたとしか思えんのや。死んだ家内も、どうも京都の好意には、下心があるようだと言うとったが、女の直感から分かっていたんかいなあ。」

小父さんは、京都に対する疑惑をそのとき初めて私に聞かせた。依然としてまだ彼の金を京都が持って来ないのが解せないと、環境の激変で血圧が二百を超えて、そのために体調の優れない老人は、怒りを露わにしていた。ちょうどそのとき、突然、その人が現れたのである。

廊下から大股に威勢よく、その人が部屋に入って来て、私たちの会話を中断させた。

「おい！　何であんた、わしに連絡してくれんのや。何でこんなしょもない所なんかに入ったんや！　あんたなら、世話する人はなんぼでもおる。何でこないなことになったんや？」

その人は大声で、早口にまくし立てた。傍らにいる私のことなど眼中にない。

私は帰る切っ掛けも掴めずにそのまま座って、その闖入者と小父さんの会話を黙って聞いていた。その中身から、この年恰好六十前後のおっさんが、『寿園』のすぐ近くに住んでいる人で、以前から小父さんとは懇意にしていたのだが、最近、札場筋を車で通ったら、『フタバ写真店』が無くなってしまっている、どうしたんやろうと案じていたところ、つい二、三日前のこと、煙草を買いにホームを出た小父さんとこの近くでバッタリと出逢ったのだそうである。その時は、車に乗って仕事に行く途中だったので長話は出来ず、ただ『寿園』に居るとだけを確かめて別れたのを、今、此処に訪ねて来たところなのである。

二人の話は長引きそうで、しかも立ち入った内容になりそうだった。

「また来ます。これで失礼します。」

私は、小父さんの方だけに会釈して立ち上がった。

「この人、誰でんねん？」

そのおっさんは錆びのある声で私を指して小父さんに訊いている。後から他人の会話に突然割り込んできて、先客である私を捕まえて誰だ

も無いものだが、そのような傍若無人な態度も何となく憎めない愛嬌がある。私は、小父さんが吃音（どもり）ながら説明しようとするのを遮って、簡単な自己紹介をした。一方の相手のおっさんの身分は、小父さんが本人に代わって紹介してくれた。おっさんは、この施設からものの三分とはかからないところに住む造園業を営む庭師さんで、古くからの知人だという。私はその庭師に簡単な目礼をしただけでその場を立ち去った。

その晩、今度は打って変わった丁重な態度で庭師から私の家に電話が入った。早口で、しかも土地の言葉で喋るので、私には方言を聞き分けるのに苦労した。何でも、「写真屋のことについて詳しく話を伺いたい。幸い明朝早く御影（みかげ）に行く所用があるのでその帰りに九時半ごろお宅に伺うつもりだ。いや、お宅で話を伺うのではない。是非うちにお越し頂いて、うちで話を伺うので、その迎えに行くのである。」そういった内容であることを何とか私も掴めた。

翌日曜の朝、私は約束どおり指定された岩園幼稚園の前に長男を連れて歩いて下りて行くと、目印と電話で聞いていたスカイラインの新車は既に待っていた。中には、昨日わざわざ私が自転車に積んで老人ホームに運んだ掛け布団が無造作に置かれていた。

「これは冬の布団やから、夏の薄いのんと取り替えて来てくれと、頼まれましてんな。」

庭師はこう言うと、その布団を取り替えかたがた、私の家にいったん立ち寄った。

「でけんことです。そうでんか、そうでんか。ようやりはってくれました。礼を言わして貰います。こんなとこから自転車で、ようもまあ。もうわしが出て来たからには、大船に乗った気で居ってください。」

庭師は、今日に至るまでの小父さんと私たちとの交流、取り分けこの一年間の自殺騒動に至るまでの話を聞くと、直ぐに涙を浮かべ、大仰に感謝の言葉を述べて、私たちを恐縮させた。

「さあ、これから、車で上ヶ原の私の家に行きまっせ。お子達にちょうど食べごろの柿が生（な）ってますよってな。誰も食べるもんが居らんよて、腐らせるばかしや。」

強引に誘われて、私たち一家五人は、とうとうスカイラインに乗り込んで、庭師の家まで連れて行かれたのである。

上ヶ原にあるその家は、庭の大きな樟の木が遠くからでも目に付き、入母屋造り二階建て旧家で、その構えから、いかにも威勢のよい若い衆が大勢出入りしそうな棟梁の家と云ったところである。なるほど、『寿園』からは数百メートルの近さである。木に登れば見えるのではないかと思われた。

その家に庭師のおっさんは、若い奥さんとたった二人で住んでいるという。何か複雑な事情があるようである。彼は、かつて苦境に陥った

ことがあり、その際小父さんに精神的に助けられたのだと語っていた。後で知ったのだが、もともと彼は、この家の人ではなく先妻の家であったのを、其処に婿に入った養子なのである。ところが、その先妻が勝手に事業に手を出して大失敗をしてしまい、そのため、ゴタゴタが続いた挙句、親族会議が開かれて、他家の庭師が後継者に指名され、先妻は家から追い出されたそうである。他にはチョッと例を見ない収拾のやり方であるが、結局庭師のおっさんが旧家を乗っ取った形になったわけである。いろいろな経緯（いきさつ）があったのであろう。

その日、庭師の座敷に通された私たち一家は、改まって交わす話題も無く、すぐ庭に出て、私は大きな石や手入れの行き届いた植木を眺めやっていた。子供たちは、おっさんに柿の木に登ってもらい、上から赤く熟した実を椀（も）いで貰っていた。

帰りは庭師が芦屋の家まで車で送ってくれた。その車中でおっさんは、今度是非、彼が世話になっている親分で、県会議員の何とかという人に会って欲しいと私に頼む。その先生に昨夜私のことを話したところ、その先生は、欲得なしでそんな事はなかなか出来るものではない、是非一度私に会いたいと言うのだそうである。恐らくは保守的な土地の親分であるその人に会うのだけは御免蒙りたいので、私は言葉を濁しておいた。しかし、この庭師のおっさんは、あの市会議員の園長先生よりも信用の置けそうな人物に私には思えたので、いずれ機会を見て、我が家のガレージに預かっている小父さんの荷物を引き取って貰うことを頼んで見ようと考えていた。

相い前後するように、その頃、妻に京都から手紙が届いた。小父さんの強情なのにはホトホト手を焼いているという愚痴混じりの内容である。小父さんの方には、次から次へと善意の手が差し伸べられているのに、それを感謝するどころか却って甘えを利用している云々と書かれていたので、その手紙を読んだ妻は激怒した。私もその文章を読んでみた。その中に「あんた方は、キリスト教の方達ですか？」と書いた部分があったので、私は不愉快になった。自分の得にもならない無償の行為を、一所懸命にやっていると、すぐに背後関係を探ろうとする。労働組合の時でもそうであった。彼らには理解不能なことは、全て、変人のする異常の行動か、外部組織に踊らせてやらされている、普通の人ならば絶対にやらない身のためにならない行動と位置付けることで、自らの不明と後ろめたさを誤魔化そうとする発想である。

封書には、小父さんが書いた私たち宛の遺書が同封されていた。妻がそれを見たいと京都に頼んでいたので送って来たらしい。この遺書を送るついでに、手紙の方が添え書きとして書かれたのである。

死に損なった人が死の決行直前に書いたという遺書を読むのは気持ちのいいものではない。まして、宛先が私たち夫婦である場合には尚更である。そのようなものは読まないでおくのが、まだ生きている人への友誼であろう。しかし、妻が先に読んでしまい、しかもその中身を喋ってしまったので、仕方なく私も遺書なるものを手に取った。

『私を自転車に乗せて御馳走して上げると家にまで連れて行ってくれた芦屋の二人よ。何もして上げられないのに大変よくしてくれました、

有難うよ。
お互いに余り求め合わないで仲良く生きて下さい。さようなら』
どうも私たち二人とも小父さんの前で、それぞれ相手に隠れて知らず識らず、不満やら愚痴を零（こぼ）していたのかと、私は思わず苦笑した。

小父さんを老人施設に入れてしまえば、それで私たちの義務は果たせたので、それ迄でも大したことはしていないのだが、今後続けることは、却って小父さんのためにマイナスであると私は判断し、妻にもそう言っておいた。一刻も早くホームの生活に溶け込んで貰わないと、小父さん本人にとって不幸なことになろう。ときどき無聊（ぶりょう）を慰めるために休日に面会に出向くことは、私たちにとって別に億劫（おっくう）なことではない。芦屋からは自転車で岩園トンネルを抜けて一直線、苦楽園口で右折せず満池谷のニテコ池を回って廣田神社の裏を通れば近いものである。もと住んでいた越水町界隈を通るので、その頃の残臭を嗅ぐ懐かしい行路である。特に用が無くとも走りたいコースである。しかし、私たちがたびたび訪れては、身寄りの無い寂しい人ばかりが収容されている老人ホームでは、気位の高い小父さんは同居者から遊離してしまうのではないか。それに、私たちも、ずっと長く芦屋にいつまでも住んでいられるわけには行かない。仕事の関係で、いつ転勤を命じられるか分からない。転勤しなくとも、ニューヨークから家主が帰ってきて私たちを追い出すかも知れないのだ。そうなれば、私たちは、気軽に西宮まで出掛けて来れなくなるか、あるいは全く出来なくなるだろう。そのような時、小父さんをガッカリさせないためにも、足しげく愛宕山に通うのは遠慮すべきであると思っていた。

実際、転勤話は仮定の話ではなく、私の場合、起こりそうな気配があった。もともと、大阪に東京から転勤になったのも、会社の労組対策的な臭いは濃厚であった。私が労組東京支部長に在任中、組合の業務は専従ではなく非常勤で、会社の企画の業務が本業であったのであるが、その間、私の属していた新規事業開発を主務とする企画部が、既存の繊維事業を管理する営業管理部と合併させられて企画管理部となり、その営業管理部長が新しい企画管理部長となって、大阪本社と東京本社の両本社に一つの部を分けずに、発令なしに部員をいつでも動かせる体制にしていた。新規事業開発と既存の繊維事業を管理するという両本社にそれぞれ位置する両部を合わせてまで、そこまで姑息な手段を弄して私を移動させたいと会社が思っているのかと、私は苦笑せざるを得なかったが、黙ってこの露骨な組織改正を観察していた。その企画管理部長は会社の労務政策上の意を受けて、部内組織をいじり、担当替えを私に命じて、それまで私が担当していなかった人工皮革の開発という新規分野の探索に充てたのである。その事業は前任者らの数年間の検討結果、まだ機が熟さず、かつ品質も確立していないとして企業化は見

送るべきと旧企画部では結論付けていた。しかし、文字通り命をかけて工場で研究に当たっていた技術者たちの熱意と、何か裏工作があったのであろうがそれが成功して、結局は会社の幹部を動かすことになり、旧企画部の結論を覆す形で企業化決定が下されたのである。いかにそれまで企業化に反対していたとはいえ、いったん決定されれば、旧企画部を引き継いだ新しい企画管理部としてもその新規事業に人を出さなくてはならない。しかし旧企画部時代の担当者は、これまでの経緯上から見ても工場の研究者との間に軋轢がある。そこでその前任者を外す形で私がその新規事業に出されるということになったわけである。会社は新規の人工皮革事業を、自ら企業化することをせず、別会社として百パーセント子会社を設立し、その本拠地を大阪本社内に置くことにした。私が労組の東京支部長という要職にいる限り、そのような移動は、いかに会社と労組本部とが仲良く気脈を通じているとはいえ、法律的には不当労働行為に該当する虞があるので簡単には出来ない筈である。その辺の事情は私は充分心得て身構えをしていたし、会社も、絶対スジを曲げない私の気性を知っていて、私が労組幹部在任中は、新規事業の決定があってもその本部機構は東京本社に置かざるを得なかった、しかし、四月の支部労組定期大会で、私がかねての公約どおり満期で支部長職を退任するや、子会社の本店を親会社の大阪本社内に置くとする会社設立登記事務を、皮肉にも私に命じたのである。

しかし、この新規事業の企業化は旧企画部の検討結果通り無理で、新子会社には難しい船出となった。技術が充分に確立していなかったことは最大の理由であるが、マーケットの方も、天然皮革の牛革高級製品と、低級安価な塩ビ・レザーなどの合成、化学製品とに挟撃されて進出を阻まれていた。会社を設立しても売るべき商品がないので、子会社に親会社から全員出向していた営業部隊の動きは空回りとなっていた。私の役割は、その子会社では総務、企画、管理という業務を一人で担当していたので、物が造られて来なくとも、取り分け困るということもなく、むしろその機会を捉えて、当然やらねばならない新会社の組織造り、つまり権限規程や管理マニュアル、その中でも、銘柄別原価管理計算式の設定などを整備していた。これらの計算式を用いていろいろプロダクト・ミックスを想定して何度か収益計算をやってはいたが、計算をやり直す度に、企業化決定前に工場の研究部隊が出していた計算諸元が大幅な単位ですっかり変わってしまい、そのために損益分岐点もアップして、経済単位に叶う設備投資規模は大きなものになってしまっていた。これでは、かつて企業化を決定したときの基礎となった数字を無視するものであり、大きな判断ミスを会社に与えるとして、責任を技術者が問われるのは必至である。

この事実を、私はありのままの形で子会社の幹部に上申し、ことの重大性を指摘して、それまでのやり方を改めて、抜本的な対策、特に親会社からの財政援助を仰ぐべきことを具申した。だが、私の出した試算結果は幹部連中の気に入る数字ではない。特に社長職にある人は、親会社の取締役を二期務め、自ら手を挙げてこの新規事業に余生を捧げるつもりなので、悲観ともみえる私の指摘する事実を認めたがらない。それどころか、いかに百パーセント子会社で、従業員は全て親会社からの出向者から構成されているとしても、新会社は親会社とは別会社だ

として、子会社の現状を社外秘という名目で親会社にも秘匿するよう緘口令（かんこうれい）を布いたのであった。そのような秘匿行為を、百パーセント株主の親会社に対してすることが、親会社の委任を受けて子会社の代表取締役になった自分が忠実義務違反を犯すことになることなど、いかに技術者だから法律のことは解かりません、と言って済むことであろうか。

私は子会社の経営幹部にとって、煙ったい存在になっていたようである。しかし、社長は忍耐強く私を遇してくれた。おそらく労組東京支部長として、会社、労組本部双方を相手に戦ってきた私を、簡単に追い出せない筈である。というのも、親会社の人事担当重役から私の身柄を預けられていたからである。その辺のことは私も読んでいた。しかし、私が労組時代にやり合った窓口の労務担当部長が、来たる十一月末の親会社の株主総会で取締役に昇進することが内定していたので、権力を掴むと誰でも横暴な行為に出ることも案じられた。そうなれば、大阪にいつまでもいられないかも知れない。

何処に移されても私はその土地での生活を楽しむつもりなので困ることはない。だが、本心としては、私は当分大阪を動きたくなかった。いや、芦屋の家を変わりたくなかったのである。あまりにも芦屋生活が楽しいものであるだけに、まだ一年にもならないうちから、このように会社の出方を窺うのも、このすこぶる好ましい状態が長続きしないのではと気遣うからなのかもしれない。

この芦屋での私たちの生活を更に快適なものにする行事が九月から加わった。その年の八月、かねて川西町の芦屋川沿いに建設中であった市の青少年体育会館が完成して、一般にも開放されるというニュースが新聞に載ったのである。そこには、会館の四階に設けられた弓道場の道場開きの写真が写されていた。高校時代に弓道部で初段の段位を持つ妻は、その写真と記事に大いに気をそそられて、再び弓を十数年ぶりに始めたのである。

「貴方も弓を始めなさい。」

妻は私まで引っ張り込もうとしたが、私が学生時代にやっていたのは水泳であり、弓は大学での体育の単位としてチョッピリ手を出したことはあるが全くの素人だったので、今さら一から妻の手ほどきで始めるのはいささか気が引ける、弓は年寄りの遊びで一種の儀式ではないか、大体、道場で年寄りが幅を利かせているスポーツが他にあるものか、あれでは碁会所の老人クラブだ、俺はまだ若いのだぞ、どうせ一から始めるのなら、庶民的な柔道を始めるさ、と変な理屈を付けて一階の畳敷きの柔道場の方へ入門したのだった。学生時代は体重が五十キロそこそこと軽量だったのが、結婚後急速に目方が異常に増え、今では八十キロを超えている。「私腹を肥やしたのさ。」と笑っていたが、その重量を生かせば面白いと思ったのも事実であり、また一方、その体重を、汗を掻くことで減らす必要もそろそろ感じ始めていた。柔道の練習日は

毎週火、木、土の三日で、時間は午後七時から九時である。週日の場合、会社を終業のチャイムとともに割り切って、サッと退社するのをモットーとして、午後六時過ぎには帰宅して夕飯を軽く済まし、道衣を自転車の前籠に入れ風を切るように山を下りる。阪急沿いに芦屋川に出て、川に沿って国道の手前の道場に駆けつけるのが毎週当日の日課となっていた。仕事帰りの勤め人たちが、疲れきった足取りで家路に向かう中を、颯爽と汗を流しに道場通いをするのはいい気持ちである。関西の強豪校として名高い大学出身で、軽量級では全国クラスの若い先生の指導の下で、自分の息子のような小学生に混じってドタンバタンと受身の練習をして、当分は辛抱しながら黒帯を目指していた。

妻の方はと云えば、柔道場より半月前に再開した弓道場に通っていたのだが、直ぐに先生方から、二段の昇段試験を受けてみるように薦められ、その気になって一時期集中して精を出していたところ、九月十五日に灘道場で実施された阪神地区昇段試験にアッサリと合格して、たちまち二段の資格を取ってしまった。

そのような訳で、私たち夫婦ともども武道に熱を入れ始めた頃が、ちょうど小父さんの退院騒ぎから愛宕山老人ホームへの収容と重なった時期である。あの庭師のおっさんが何度も我が家に電話して家が留守だったためイライラさせたのも二人とも道場通いだったからである。十月十日体育の日もそうであった。その日芦屋市は、スポーツ大会を催し、朝から県立芦屋高等学校の校庭に全市のスポーツ選手が勢揃いして開会式が行われた。ポンポンと花火が勇ましく打ち上げられる中を、妻は長男に手作りの小さな袴を着せ、それに竹で作った短い弓を持たせ、自らも道衣に正装して、行列の先頭に立ってカメラマンの被写体になっていた。式が終わると種目別に分かれて各種の競技を行うことにスケジュールされている。妻は礼射をするとかで、体育館へと弓道部の年寄り連中と早々と引き上げて、私は専ら子守り役をさせられ、一階の柔道場で行われていた一般、高校の団体戦を観戦後、飽きると芦屋川の浅い流れで水遊びをするなど、妻の行事の終わるのを待っていた。昼ごろ、漸く開放された妻ともども私たち一家は、午後はそのまま河口に出て、埋め立て造成中の海辺で夕刻まで遊んで家に帰った。健康的で体育の日に相応しい過ごし方である。

玄関を開けると電話が長く鳴っている。同じ日に直ぐ隣の西宮で不健康な揉め事があったことを知ったのである。電話の主は上ヶ原の庭師からで、先ほどから彼の家で小父さんと京都夫妻が話をしているところなのだが、難しい話になってますねんと言う。京都が『寿園』を訪ねて来たので写真屋ともども自分の家に来てもらい、あんたにも来て貰おうと何度も電話しとるんやが留守で繋がらない、やっと今掛かったところやけど、これから来てみてくれまへんかとのことである。

私は、そのような修羅場に乗り込む気も無かったので、時刻の遅いことを理由に断った。するとまた電話である。いま京都が帰った、これから写真屋と一緒にお宅に伺う、いや、どうにも酷いことですわいと言う。待つほどもなく二人は現れた。

小父さんと京都夫婦は、その日上ヶ原の庭師の家で、結局、喧嘩別れになってしまったらしい。小父さんが強く返金を促しても京都は頑として応じない。小父さんに金を渡したら、また和歌山の女性にやってしまうという、例の理由を強弁するのである。京都が預かっている金額は約二十万円弱であることは確認できたのであるが、庭師の質問で、もし小父さんが死んでしまったらその金はどうするんやと訊いたところ、そうなったら本願寺さんに寄付して、小父さんの菩提を弔って貰いますと、奥さんはしゃあしゃあと言ったそうである。これにはさすがに庭師もムッとして、「写真屋が見ず知らずの和歌山の女性に気前よくポンと十万円渡したんは非常識やったかも知れんが、しかし、どう云われようと、自分のお金やないかい。自分が働いて貯めた金を何に遣おうが勝手やないか。外（ほか）から差し出がましく云うことはあっても、金を取り上げるんはようない。もう老い先短い人なんだから返してやんなさい。」そうおっさんは言ってやったそうである。だが、この苦労人の意見も、すでに偏見と強欲で凝り固まった京都夫妻の耳に入るものではない。彼らは最後に、写真屋は気が変になったのだ、自分たちを見ず知らずの他人の家に連れ込んで脅かされる筋合いはないと、憎まれ口を叩いて帰って行ったという。

その夜、私の家で、私を混じえて三人の男が、額を集めて、京都への対策を話し合った。小父さんは怒りから体をブルブルと震わしていた。それも無理はない。今までわが子同然に思っていた人から、一番肝腎の時に背かれたからである。

私はなぜ京都が二十万円そこらの金に執着するのか解らなかった。印刷会社の経営者ならば、いくら中小企業であっても、そのような端金（はしたがね）に困る筈はあるまい、それとも事業に行き詰って、僅かな金でも当てにせざるを得ないのであろうか、貧すれば貪（どん）すると云うが信じられないことだ。そう私が言うと、庭師のおっさんは、では一度、京都の素性を洗ってやろうか、いやなに、わしの親分は警察に顔が利くからすぐ調べてくれはります、京都の公安に訊けばいっぺんに割れると恐ろしい事を言うのだった。しかし小父さんは、そん事はせんでええ、どうせ人間が腐っておるから欲に釣られるのです、自分にはよう解っておると言った。

いずれにせよ、尋常一様な手段では京都から金を取り返すことはできない。とすると、訴訟ということになるが、民事ならば長引いていつのことになるやら分からない。と云って、刑事の扱いにするにせよ、相手方は、この金は盗った金ではなく預かっているものだと主張するであろう、しかもこちらは自殺騒ぎまで演じているだけに、いくら庭師の親分が警察に顔が利いても、果たして検察が採り上げてくれるか難しい。そこで私が、思案に余って彦一頓知噺にヒントを得て、ひとつ芝居を打ってみてはどうか、相手は欲が深いのだから欲で釣ろう、写真屋名義の預金通帳を作り、そこに数百万円の定期預金口座を記載して、それを京都に見せ、満期になったらそのうちいくらかを遺産代わりに分けてやるといえば、十数万円ぐらいの金はすぐ返してくれると思うがどうだろうと持ちかけた。すると、そいつは面ろい、わしがその金を貸すから早速通帳を作ってみようかと、金持ちのおっさんは乗ってきた。しかし結局その案も最後には冗談として終わり、決め手を欠いたまま

妙案は出なかった。
「あの幼稚園の園長先生にでも間に入って貰ったらどうでしょうか？」
思案に暮れて私は提案した。
「あの野郎に何が出来る！　ニヤニヤ笑いやがって、要領のええ、煮え切らん奴ちゃ。あいつも写真屋の金預かって返しょらん奴ちゃ！」
何を言うのだとばかり、おっさんは感情も露わに、市会議員の園長先生の、姓ではなくその下の名を呼び捨てにして激しく罵倒した。恐らくおっさんの親分と園長先生とは派閥を異にするのかも知れない。彼の園長先生に対する見方が、強弱の違いはあっても、私と同じであることは、自分が偏見を持って他人を評価していないことが判り、私も自信が持てた。
「いずれにせよ、京都が小父さんの金を預かっていることの証拠だけでも握っておかないと、今に、その事実すら否定されるかも知れませんよ。預り証でも京都に書かせておくべきです。」
最後に私が言うと、二人は口を揃えて、
「そんな馬鹿なことが許されますか！」
呆れるような顔付きで私の顔を見て、帰って行った。彼等のような根っからの善人たちに、訴訟のイロハを理解させるのは難しいことなのだろう。

このような訳で、私たちはなかなか小父さんから離れられなかった。力強い庭師のおっさんのような人が現れて一安心したのに、そのおっさんも、何か不幸な星を背負っている人らしく、私たち夫婦にもあれこれと相談したい事があるような素振りである。他人から信頼を受けるのは有難いことではあるが、そのような力は私たちは持っていないし、それに、妻はともかく私はもうこれ以上の深入りはしたくないと思っていた。それだけに、なかなか解放してくれない悪縁に苦笑せざるを得なかった。だが、妻の方も、別の理由から、写真屋の小父さんを遠避けるようになってしまったのである。
十月のある日、突然、写真屋の小父さんが私たちの家に現れて、暫くこの家に居させてくれと言うのである。何でもホームの同室者と衝突したらしい。ホームでは約五十人の老人を収容しているが、そのうち四十人ほどが老婆で、男性は三部屋に合わせて十二名しかいない。その一部屋に小父さんは入っているわけであるが、予めホームの方でも気を利かせて、ときどき部屋替えをして同室者に配慮しているのに拘わらず、小父さんは不満らしい。彼に言わせると、養老院は世間から爪弾きされた行き場のない人たちの終着駅なのだそうで、何をやって来た人

間が居るか解らず、服役経験者もいるようである。書物に親しむ人はいないとかで、一緒に生活していなくとも、凡そその交際の中身の程度は知れようというものと彼は言う。喧嘩をしても、刃物でも持ち出されるのではないかと、身の危険すら感じたようである。今回も何か面白くない事があったのかも知れない。会社から帰ってきた私に、別室で妻は訴えた。

「小父さん我侭よ。こっちが親切にしたら、却って小父さんの為にならないのよ。いつまでもホームの人と馴染めなかったら孤独になってしまうわよ。」

彼女は小父さんの来訪を明らかに歓迎していないが、その言うことは私にも理解できる。

「まあいいさ。あんな狭い所に居たら気詰まりになるさ。たまには家に来てもらって、徐々にホームの生活に慣らしていけばいいさ。」

私は、一応執り成すように宥めたのだが、気休めに過ぎないことは解っていた。

「もう私たちの役目は済んだのよ。私、亡くなった小母さんにお世話になったから、そのお返しのつもりでこれ迄小父さんの面倒を見てきたのよ！　小父さん、面倒を見て貰える施設に入ったのだから、私、もうイヤよ！」

妻はハッキリ言い切った。男の私の方は、昼間会社に出勤しているからいいものの、女の彼女の身にとっては、何やかやと身辺の世話をするだけでも大変なのに、舅でもない他人と一日中顔を突き合わせていなければならない。小父さんの場合は、あの『ラ・パボーニ』の画家のように、延々と一方的に哲学を述べる訳ではなく、ただ耳が遠いので相手の言うのを聞かないで一方的に喋るだけなのだから、ただ、ハイハイと頷いていればいいのにとも思うのだが、それは家に居ない男の勝手な言い種（ぐさ）と云うものであろう。

「この辺で厳しい態度に出るのが、却って小父さんの為を思う私たちの務めよ。」

妻の冷ややかな態度に気付いたのであろう、小父さんは、それでも二晩ほど我家に泊まっていった。三日目の朝、出勤前の私に妻は今日、庭師のおっさんに電話すると告げて、その通りおっさんはやって来て小父さんを連れ戻して行った。そのついでに妻は、庭師の広い家に、私たちがそれまで預かっていた小父さんの家財を移し変えることも頼んだらしく、次の日曜日、律儀なおっさんは、御影に行く仕事の途中、一人、小型トラックで訪ねて来た。あまりにも手の平を返すようなこともできないので、ガレージのシャッターを押し上げて中の荷物を見せながら、

「いつでもいいんです。取り敢えず、湿気が強いので衣類を容れた箪笥だけでも運んでください。」

私は小声で、囁いた。

庭師のおっさんは、その日暫く、自分の身の上を話してくれた。彼は大変疲れているようであった。何でも、まだ先妻とその間の息子さん

との間には解決していない問題があって、つい先日も数百万円の金を渡したという。そのために、ここ数日、毎晩、二、三時間しか寝ていないので、体が酷く堪えるとこぼしていた。その話の中で、先妻とおっさんとの間にはもう一人長男に当たる息子さんがいたのだが、何の事情でか知らないが、自殺してしまったということを知った。私には想像も出来ない不幸な家庭生活を送って来た人なのである。

妻の小父さんに対する感情は、小父さんが私の家に二泊三日して以来、混惑し屈折したものに変わってしまった。それまでは京都が専ら攻撃の対象であったのにだが、それ以来、京都はスケープゴート（贖罪の山羊）の役割を免れ、写真屋の方が妻から鋭い陰の舌鋒を真面（まとも）に受けることになった。我侭だ、世間知らずで、いい恰好しい年の取り甲斐がないなどと、非難、悪態が彼女の口からポンポン飛び出して、私に同意を求めて来る。それに取り合わないと、

「貴方もよく似た性格だから、きっと年取るとああなるのよ。」

と憎まれ口の矛先をこちらに向けてきた。それでもまだ無視していると、同意を求める相手先を探して、まるで、敵の敵は味方だと云わんばかりに、こともあろうに、京都に電話をしたと言う。さすがに私も腹を立てた。訴訟が起きるかも知れない相手に、有利な材料を与えてはならないと、厳しく妻に注意せざるを得なかった。

長年連れ添って来ただけに、私は妻の心理状態はよく解る。夏からの活躍ですっかり疲れ果て、体も心も安らぎを求めているのである。それにも拘わらず、四囲の情勢が彼女の活躍をいまだに期待するので、それに応えられない口惜しさから、思わず口汚い悪態が心ならずも口をついて出るのであろう。そのように好意的に解釈してやらなければ、私も神経が参ってしまうのだった。

十一月の初めに、とうとう妻は体調を崩して、一時、寝込みがちの日々を送るようになってしまった。あれほど一時期、一所懸命通っていた芦屋川沿いの弓道場の方も、そのとき以来、途端に嫌気が差したらしくぱったりと顔出しを止めてしまった。その代わりといってよいのか、彼女は新しい友人を見つけて、山手町とは芦屋川を挟んだ対岸の山芦屋町にあるその家に行くようになった。その友人というのは、長女が肺炎で芦屋市民病院に入院していたとき、同室に入院していた女児の母で、私も昔から知っていたプロ野球の阪神タイガースの元投手の奥さんなのである。奥さんの父親は事業家で、今流行（はや）っている遊戯のボーリング場をいくつか経営している資産家で、熱狂的な阪神ファンだった縁で、その娘さんが選手の奥さんとなったようである。長女が入院中見舞いに行った際、私はその元プロ野球選手と病院の喫茶室で話したことがあった。山梨県大月にある進学校の県立高校出身で、キャッチャーとして甲子園に出たことのある彼は、阪神に入団後、その肩の強さを見込まれてピッチャーに転向し、豪腕投手として新人王に輝いた有名選手であったが、二年目は肩を壊して出場の機会がなくなり直ぐ

に引退してしまった。当時、神宮球場で私の目の前のブルペンで、キャッチャーを立たせて投球練習をしていた彼の投げた球がスタンドに逸れて入り、怪我人は出なかったものの、そのような事例はプロでは滅多にないことだったので彼も憶えている筈だと、あのとき貴方の目の前で私は観ていましたよと病院の喫茶室で話そうかと思ったのだが、あまりに無口な彼だったので、私も口を噤（つぐ）んで、日常的な挨拶を交わしただけであった。山芦屋の彼の家には私は一度だけ妻に連れられて行っただけである。鉄筋コンクリート建ての白い洋館で、その豪邸に妻はよく遊びに行っていた。奥さんは、大柄で開けっぴろげな明るい人で、運転手付きの外車で我が家にも来ていたらしい。

一方の私はといえば、妻とは違って精神的にも肉体的にも極めて健康で、体育館の柔道場通いを続けていた。もともと足腰と腕力が強かったので格闘技に向いていたのか、黒帯とも結構互角に戦えて、すぐ辞めて行く白帯の若い人とは違って、私は一頭地を抜く存在となり、初めてではないだろうなどと煽（おだ）てられ、来年早々に予定されている昇段試験を目指して張り切っていた。しかし、技術の習得には時間がかかるものである。得意技は支え釣り込み足と体落とし、それの連続技だけで、いずれも体重を利用したものである。切れ味の鋭い豪快な跳ね腰とか一本背負いを早く習得したかったので、寝技は全くやらなかった。練習に通う行き帰りに自転車で走る芦屋川の土手が楽しみで、月の光の下で冽（せせ）らぐ浅い川底を眺めやりながら、こんな生活をしている都会のサラリーマンが、いったい今の日本に何人いることやらと高度経済成長の真っ只中で日夜脇目もふらず働かされている会社の同僚を思いやって、わが身の幸運を噛み締めていた。

そうこうするうちに、私たちの快適な芦屋生活を短くするような会社の工作があるのではないかと思っていた私の不安が、現実となって姿を現したのである。十一月に入って直ぐ、私は会社で上司の部長から、別室に用があるからと呼び出された。その人は、人柄のいい苦労人で、私の無理も日頃から聴いてくれていて、昼食や、お酒の飲めない甘党だった彼と、梅田の和菓子屋などでお茶を一緒に喫することもあった。彼は、東京の親会社から取締役の資格を与えられ子会社に出向させられ、主として経理を見るようにということで、転勤させられ、大阪に単身赴任していた。取締役といっても子会社では単に会社法上三人必要なので、員数合わせのための役職であるが、子会社の経営幹部であることには間違いない。しかしその人は、私と同様に社長や他の幹部陣に対して、経営の数字の悪さを理由に批判的な見方をしていた。その上司から、私は別室に呼び出されたのである。

「いま（親会社の）人事部から、君をニューヨークの、ある研究所に留学して貰う話が持ち上がっているのですが、奥さんの健康状態が良くないように聞いていますが大丈夫ですか？　もし支障がなければ、悪い話ではないので、進めさせて貰うよう言っておくがどうですか？」

例によってこの人の人柄である丁寧な口調で、私の意向を問われたのである。私は驚いた。会社には私が入社したときには留学制度が設け

られていて、私の同期入社の友人や先、後輩の数名も、この制度を利用して留学していた。その制度は応募制で、しかも留学後十年間は費用を弁償しない限り中途退社はしませんという誓約書を書かされる。それでは、帰国後に、会社の言い成りになって無理難題にも黙って従わなければならない。私はその制度に納得できず、これまで応募しなかった。男らしく会社に辞表を叩きつけて堂々と浪人生活を続ける恰好よさに憧れたというよりも、応募制での受験科目である語学、就中、会話の勉強に時間と金を割くのが嫌だったことも否定できない。その後この制度は、語学の勉強に時間を掛けられる閑職の社員に有利な制度で、そのような社員は、留学から帰国しても会社の役に立つことが少ないとのもっともな理由から廃止され、留学生は会社よる指名制に変わり、これでは人事発令と同じことなので、誓約書も書く必要も無くなっていた。しかしこの新しい制度に変わったとき、わたしの会社生活も十年以上経っていて、家族も増え、今さら留学する年齢ではなくなっていた。そのとき部長から話のあったニューヨークの研究所というのは、友人たちが留学したボストンのハーバード大学、ＭＩＴ（マサチュセッツ工科大学）や、フィラデルフィアのペンシルヴェニア大学など日本人がよく行く一般大学とは異なり、私のような年齢の者を集めて、あるテーマを与え研究させるという、一種の調査機関なのだそうである。

私は戸惑った。親会社の人事部が、どうして私のようにこれまで楯突いてきた異分子を指名することがあるのだろうか。これは罠かも知れない、あるいは私の組合活動などを当時工場にいて知らなかった人の好い部長が、親切心から私の意向を聴いてから人事部にこれから提案しようというのだろうか、いやそんな筈はない。彼は人事部からの依頼を受けた監視役なのだ。当然私について詳しく知っている筈だし、ニューヨークの研究所などと具体的な留学先を挙げられる訳がない。それに、わざわざ別室に呼んでこのような人事上の重要な話を告げるのは、慎重な彼の性格から見ても、彼独自の判断によるものでないことは確かである。瞬間、いろいろな憶測が私の頭の中を駆け巡った。一番ありそうに思えた理由は、明春早々労組役員の二年任期の改選が行われるので、労組大阪支部の役員選挙に私が立候補されては困るので、その意向を探るための画策ではないかということである。しかし、もしそう私がしようと思ったとしても、私の信念としては、まず一般組合員として職場環境を観察し、問題点を見付けたら、職場委員をやった後、支部役員に立候補するのが常道で、それには二年はかかることになる。事実、東京ではそうやって来た。しかし二年後には、私は人事上では同期入社者の誰でもがそうなるように、自動的に管理職の資格を得て、労働組合員の資格を失ってしまう。

私は回答をどうしようかと迷った。暫く考えさせて下さいということもできたが、

「会社の命令とあれば従います。この件は部長にお任せします。家内も今は病気ではありません。」

私は、こういうときに相応しい無難な返答をその場でして、ボールを会社に投げ返した。

その後、妻の弟の結婚式で上京して実家に寄ったとき、父にこの留学話をしたら、父は、直ぐに、それはあの六麓荘の元大臣閣下のご配慮だろう、あの方はよく下の人の面倒を見てくれるからと喜んでいたが、私はまさかと思っていた。

私の会社に対する警戒心は杞憂ではなかった。会社への不信感は増幅されることになったのである。何となれば、それからちょうど一ヶ月後、部長は極めてバツが悪そうに、

「あの話は無かったことにしてくれ。」

と私に告げたからである。その間、私の方もどうなっているのかと打診もしなかったのだが、一ヶ月も店晒（ざら）しされた挙句、無かったことにしてくれもないであろう。しかしこちらから持ち出した話ではないので、文句を言う気持ちにもならない。

「ああ、そうですか、解りました。」

私は平然と頷いた。これで会社に対してまた一本取ったと思うと却って闘志が沸いてきた。

小父さんの自殺騒動以来、私たちは夙川の『ラ・パボーニ』へはご無沙汰してしまっていた。一度小父さんを我が家の夕食に招待したついでに立ち寄って、小父さんとパボーニの奥さんとを引き合わせたことはあったが、それ以来この芸術的な喫茶店を訪ねていなかった。

十一月の二十日過ぎ、珍しく妻が西宮の『双葉市場』まで買物に出かけたことがあった。この商店街は阪急神戸線が高架になったとき、その下に移転していたが、相変わらず買物バスを甲山の近くまで定時巡回させていた。妻が『ラ・パボーニ』の店を訪ねると、奥さんは元気で、明日は勤労感謝の祭日で、また亡くなった画伯の月命日の三の日でもあるので、お墓参りに一緒に行きましょうと誘われたのである。給料日もボーナスも前なのでお金が無いという妻に、自転車でみんなで一緒に行きましょうというので、それならばと無邪気に妻は承諾してしまったそうである。私は奥さんに出費を迫るようで気が進まないが、画伯の墓を見ておきたくもあったので、一緒に随いて行くことにしたのだった。

雲が灰色の肌寒い朝だった。私たちは夙川の店まで自転車で向かった。

「風がありますね。寒いから車にしましょう。」

店に着くと、私たちの扮装（いでたち）を見ながら奥さんはそう言った。画伯の墓地は、いったんは甲山の麓の共同墓地に決まっていたのだが、都合で、逆瀬川にある市営の墓地に変えられたのだという。車でもそう遠くは無い。しかし歩いて夙川の駅のタクシー乗り場に着いてみると、奥さんはタクシーの方は見向きもせず、阪急今津線逆瀬川駅まで、私たち家族の分も含めて切符を買ってしまった。こういうあたり

奥さんは何でも心得ているといった風で、私も図られたと、不承不承後に従わざるを得なかった。

墓地は川沿いに造られていた。満池谷の墓地とは異なり、まだ歴史の浅いことは大きな樹木のないことでもよく判る。長方形の平面的な造成墓地のほぼ中央に、どれも似たような他家の墓石と前後左右を整然と区画されて、画伯の新しい墓は建っていた。なぜ『アートガーデン』に建てなかったのだろう、その方がずっと画伯らしく、彼も喜ぶ筈なのにと、私はいらぬお節介なのに、一人、心の中で失望していた。

画伯の墓銘には奥さんの名前も並刻されていたが、まだ朱は入っていなかった。これでは死んでいる人みたいで可怪（おか）しいから、早く朱を入れて貰わねばと、奥さんが管理事務所に掛け合いに行っている間、私たち一家は、武庫川の河川敷に下りて、水量の乏しい汚れた水に向かって、波切りの遊びに興じていた。秋は急速に深まり行き、見上げる六甲の山色も赤見を帯びている。

帰路、私たち一家は夙川のお好み焼き屋で昼飯までご馳走になり、私自身は大変な負い目を感じた窮屈な一日になってしまった。他人に負い目を持つということを極力避けて来たのが私のこれまでの生き方なのであり、その意味で真（まこと）に不本意な一日であった。妻に言わせると、こういうところが、私の自意識過剰で世間知らずの、大人に成りきれないところで、相手も直ぐにそれに気付いて気まずい思いをさせてしまうから、その悪い性格は改めなくてはならないそうである。もっと素直に差し出された好意に甘えなければ、写真屋の小父さんのようになってしまうというのが妻の意見である。

その写真屋の小父さんはと云えば、さすがにそれまでのようには芦屋の私たちと交際を続けることはしなかった。妻の歓迎せざる存在に自分がなっていることに気が付いたのか、あるいは上ヶ原の庭師のおっさんが忠告したのか、とにかく私たちを電話で呼びつけることもなく、専ら自分の気持ちを葉書に託して近況を報せてくれるようになった。文の末尾には必ず短歌や俳句、果ては都都逸（どどいつ）まがいの端歌や詩が書かれ、そのうち文章が無くなって、ただ詩歌のみ『愛宕山山人』の号で届けてくれるように変わって行った。興が乗っているときには、三日に上げずにそれらの作品が我が家に届き、中には意味深長な童謡やら、自虐的な狂句も混じって、自らを諧謔的に眺められる余裕（ゆとり）を彼の内に取り戻しつつあることが推察された。

私は気の毒でならなかった。なまじ中途半端な私たちの対応は、却って彼にとってマイナスではなかったろうか、安っぽい同情なら最初からしない方が良かったのではないか。しかし、これで良かったのだ、全ては成るように成るさ、私は自分を納得させていた。

六甲山に登るには、私の家から一番近くのコースとしては、芦屋霊園を抜けてその裏山を直線的に登っても行けるようであるが、急勾配で

山道がハッキリと付いていないように思えたので、六麓荘からゴロゴロ岳と名付けられた標高五百六十五・六メートルの山を抜けて行くことができる。秋の半ばごろ私たち一家が登ったとき、赤松の中を抜ける道で強い松茸の香りがしたので、ここら辺にあるぞと探したが判らなくてガッカリしたこともあった。しかし最も普通の登山道は、例の元プロ野球選手の家がある山芦屋から高座谷の滝口を経て、ロックガーデンを抜けるコースである。ここは文字通り六甲登山の銀座通りとでも云えるほどで、休日には気軽な服装で、京阪神から多くのハイカーが訪れていた。

晩秋のある日、妻が私の服のポケットを探って、甘党の部長と一緒に入った梅田の和菓子屋のマッチを見付け出した。そのような場所へ貴方が行く筈がない、きっと誰か会社の女の子と一緒に行ったのだろうと邪推して絡んで来たことがある。そこで、妻と性格の似た次女がいつも妻から離れなかったので、私は長女と長男を連れて、逃げるように何の用意もせず軽装のまま、足が自然に山芦屋の方に向いたので、そのままロックガーデンに踏み入れたことがあった。普通であれば其処から引き返すのだが、時間もあり、また直ぐに帰宅するのには抵抗があったので、勢いに乗る形で、私たち三人は強引にゴルフ場を抜けて最高峰を目指したのである。さすがに三歳の長男は一人で登山するのは無理で、途中から負ぶい紐を使って背中に括り付けて長女を励ましながら、これから有馬に抜けて温泉に入って帰るというリュック姿の完全装備の若いサラリーマン風の男と相前後しながら夕刻、標高九百三十二メートルの山頂に登ったのである。登ってしまったという表現がまさに適切なほど呆気（あっけ）ない登山であったが、その頂上を下から見上げると大きなパラボラアンテナがそそり立っていかにも山頂という感じであるのに、這い上がったところが小屋のごみ捨て場で、その小屋というよりも飲食店の裏口から表に抜けると、店の前は舗装された広い道路になっていて、車がひっきりなしに往来していた。空車でも拾うつもりで左に向かって歩き出したのが悪く、流しのタクシーなど走っているわけはない。そのうちに、日が完全に暮れてしまい、しかも尾根道であるだけに初冬の風はさすがに冷たく感じられる。背負っている長男の半ズボンからはみ出した素足は冷え切って、またしきりに空腹を訴えるので、こんなに車が多く走っている場所で遭難もないだろうが、それでも手を挙げて日曜の夜のドライブを楽しんでいる人たちに運んでもらうのも、妻ならそうするであろうが、私の性格がその時だけ変わる筈もないので、覚悟を決めて長女を励ましながらケーブルカーの駅を目指した。まことに幸運にも、途中にバスの停留所が見え、そこが始発停留所らしく空車が動かずに停まっていたので、私たちは、手を挙げ叫びながら、救いの神のバスに駆けこんだのである。バスが動き出してからケーブルカーの駅まではまだかなりの距離があり、あのまま歩いていたらと、無謀な登山にゾッとする思いであった。ケーブルカーで下界に下りるとそこは市街地で、阪急六甲口駅の中の喫茶店で、子供たちに軽食を食べさせながら飲んだコーヒーの温かさに、私は、地獄も天国も隣り合わせなのだと、しみじみ思い至ったのである。その店で帰り際にマッチを貰うと、長女が、

「お父さん、そのマッチ、うちに持って帰っちゃいけないよ。」
と言ったので、子供たちはちゃんと親を見ていたのかと、少なからず可哀想であった。

早いもので、私たちの二度目の関西暮らしは、あっという間に十二月で一年が経過してしまった。その年も押し詰まって、私たちの元に送られてきた愛宕山山人、つまり写真屋の小父さんの手紙にはこう書いてあった。

『私のことを何も心配されることはありませんから御放念下さい。金子十八万二千円也を京都が市会議員の園長のもとに持って来たそうです。持って行くのなら私の方にこそ寄越すべきです。昨日、京都の嫁さん宛に手紙を出しておきましたので、反応を見るまで放っておくつもりです。

上弦下弦　妻死にたり　冬の月　　』

その年が明けて、年始回りに私たちは愛宕山に出掛けてみた。小父さんはホームには居らず、上ヶ原の庭師の家に居るというので、そのまま私たちはそちらに行った。

久しぶりに、正月の儀式とはいえ、私たちと顔を合わせて、小父さんもおっさんも大層喜んでくれた。そのついでに、私は年末に小父さんから来た葉書に書かれていた京都からの返金、と云っても園長預かりではあるが、その事実を確認してみた。やはり訴訟事件、しかも刑事事件にするぞと写真屋側が腹を決めたのが効を奏したようである。おっさんの尽力で、その親分に当たる県議先生が京都の警察を動かしたようである。市警から事情を問われて、おっさんが一部始終話したのだ。窃盗か横領罪を構成するとして、市警は京都の印刷所まで出向いて、取り調べたようである。それが決定的に効いて、金はひとまず園長の市議先生の方に移されたのである。何はともあれ、取敢えず京都の手元から金が離れただけでも成功である。市議のあの園長先生なら、小父さんが取り戻すのには苦労はない。私たちもこれで一応、お金の問題は片付いたとヤレヤレの気持ちになった。

挨拶を済ませて家に帰ると会ってきたばかりの愛宕山山人から賀状が届いていた。例によって発句がいくつか連ねられていた。

『白い道　影と二人で　歩を数へ　』

そのうちの一句が寒々と私の心を打った。小母さんの死は小父さんにとって、他のどの夫婦の場合以上に大きな打撃を与えたことはよく解かる。いや、彼の生存の理由すら失わせるほどであったのだから、その打撃は決定的といってよい。夫から見て妻を、無くてはならない人と思っている人が何人いるだろうか。死んだ後までこんなに夫に慕われて、短歌や詩句で常に偲ばれるなんて、小母さんも何と嬉しいことであ

ろう。本当の恋女房とはそういうものなのだろう。中国の呼称ではないが、夫婦の一方は、他方からは常に『愛人』であるべきであろう。

その小母さんが身をもってこの世に残した唯一の形見であるべき遺骨も、遂にその愛する人の手元に帰って来た。一月の末に、阪大病院から漸くのことで、約一年半かかって小父さんに返却されたのである。これで本当に全てが片付いた。愛宕山山人もさすがに感慨無量になって、その事実を伝える葉書の末に、「これで全くつとめは済みました」と書いた後で、

『ただ一人骨つぼ抱き這入る門
　　お前を拝む我が姿かな
　連れ添ふて長き年月有難う
　　安らかにあれ寺の中にて　』

と、巧まず素直に、何の飾り気もなく、その気持ちを歌にしてあった。歌の内容から、私は遺骨がどこかのお寺に無事に納められたことを知り安心した。

次の年、新年になって、私は『鏡開き』という、一度は経験して見たかった柔道場での儀式を、四十歳近くなって味わうことができた。同じように道場に来ていた気のいい二人の若者が、私の気を汲んだのか、やりましょうと言って、七輪と鏡餅を何処かから車で運んで来て酒を飲み交わしたのである。そのうちの一人が岩園トンネルの上に住んでいると言って、帰りに私の家まで送ってくれたので、お礼を言うつもりでその後其の辺りを探したのだが、それほど多くはない家の表札を見て回っても判らなかった。そのことを道場で次に会ったときに言うと、「在日です」と、彼の本名は別にあって、私の知らない彼の本国名の方を表札に出しているのだと、暗示するように不機嫌な返事をされたので、私は、自らの軽率な言動が、態（わざ）とでなくとも恩知らずになっていることに慙愧（ざんき）に耐えなかった。このように本人の私は善意でやっていることなのだが、無神経に出しゃばって、相手の気持ちを忖度出来ずに却って傷つけてしまうのが、私の大きな欠点なのである。写真屋の小父さんに対してもそうなのかも知れない。

実は、私たちの芦屋生活は、その年、正確には一九七三（昭和四十八）年八月末で終わりとなった。ちょうど一年と九ヶ月の短い二度目の関西生活であったのだ、その転勤の内示を、私は部長から七月八日に告げられた。転勤先は再び親会社の東京本社で、海外への技術輸出を扱う部署である。つまり、子会社出向から親会社に帰ることになったのである。同時に部長も、部は異なるが東京本社に帰ることになったということである。彼は出向していた子会社の経営責任を逃れることに成功したのである。この転勤を私は予期していないわけではなかった。と

いうのは、私が従業員として雇用契約を交わしていた会社（親会社）には、自己申告制度という人事制度があり、その制度が出来たばかりの一九六四（昭和三十九）年オリンピックの年に、私は大阪本社の営業から東京本社の企画へと、この制度の最初の適用者として転勤していた。毎年一回、一定の書式に拠って自分で人事面の希望を書いて提出することが義務付けられていたその書式には、自由記載欄があり、何でも思ったことを書くことができた。上司の課長、部長らの中間管理職に気兼ねせずに平社員が、個人の気持ちを自由に書ける欄である。せっかくこのような欄があるのに、書き入れる従業員は少ないと聞いていたが、私は思う所を率直にいつも書いていた。その年三月に提出した自己申告の自由欄に、私は、昨年十一月上旬に人事部が私に対して部長経由で打診して来た、あのニューヨーク研究機関への留学問題を厳しく追求する文章を書いたのである。この追求は、部長に対するものではなく、まさに人事部に向けて問い質すべき私自身の問題なのである。これに対する人事部からの返答は、私への人事異動などの処置となって返ってくるだろうと思っていた。

職場の方でも、子会社の社長は、部長と私という企画担当者の提言を無視して、生産の諸元も固まらず品質も確立していないのにも拘わらず、強引にも増設の決定をしてしまっていた。しかも親会社に対しては、事業は初期の計画通りに全て順調に行っていると報告していたのである。商品として耐えられない品質の不良在庫を大量に抱えていても、それらは評価の仕方如何で子会社の資産状況はどのような数字にも書けるので、親会社の幹部連中には暫くの間は、実態は把握されないであろうとのことなのであろう。

子会社の社長としては、事業が走り出してしまった以上は、止むを得ないと同情の余地もないわけではないが、しかし、これは賭けである。まして親会社に全て内情を話しての措置ならばともかく、欺いたということが判ったときにどう釈明するのであろうか。いくら資産内容や損益計算を粉飾しても、資金繰りで直ぐに行き詰り、親会社に融資を仰ぐか銀行への保証を依頼しなければならなくなり、直ぐバレてしまう。長年工場の生産活動に携わって、営業のことも経理のことも知らないこの子会社の社長は、ただ、親会社の老社長で政財界の大物としていつもマスコミから追いかけられている大人物の振る舞いだけを見習って、「何でも言って来い、俺が決めてやる。」とふんぞり返っているだけの、いくら人柄だけは良くとも、彼にはそのような自明なことが解らない。彼が責任を取らされるのは勿論であるが、私の上司部長を含めた三人の取締役はもとより、企画や管理担当者として私まで一蓮托生となるのは御免である。

取締役を兼ねていた私の部長は、立場上言えないこともあると理解していたので、彼になり代わってと、私はズケズケと幹部連中に苦言を呈してケジメを付けていた。そして、その子会社には長くはいられないだろうと覚悟を決めていたのだが、行き場が何処になるのか不安でもあった。その様な時の内示である。

新しい職場が海外関係の営業とは意外であった。もともと語学の力など無いので、海外駐在員や海外留学とかの経験をした後ならともかく、

そのような海外経験が豊かな商社から途中入社した営業マンに混じって、四十歳近くなって初めて、いきなり外人と商売でやり取りができるものではない。だが、私は平気だった。当てられた会社の仕事が難しいからと云って、従業員が自責して苦しむことはない、それで業務に支障をきたして困るのは会社の方なのだ、その従業員が満足に仕事を果たせず会社がそのために困るのであれば、会社はその従業員をもっと楽な、彼か彼女の適性を充たす職場に配置換えをすればいい、私はそう割り切っていた。しかし仕事の方よりも、住居を移されることは私には有難くなかった。まさか、あまりに快適な芦屋暮らしを私がしているのをやっかんで、人事部が住居換えを企んだのではないかとも思ったのだが、私の引っ越した後、待ってましたとばかり、社長秘書室の若い後輩が移り住んだのには、成る程と思わなくもなかった。

転勤の内示を受けたときに至るまで、その年の我が家には多くの親しき人たちが泊まりがけでやって来た。父は春には花見と選抜高校野球を観るために母と来て、野球見物に興味のない母を私は京都の金閣寺、竜安寺の石庭や苔寺に案内したものだが、帰りに大阪で合流し、『美々卯』の『うどすき』を食べながら、そのとき近くで公開中だった造幣局の八重桜の『通り抜け』を見逃したことは私の心残りであった。夏にも父は二度来た。一度は京都の祇園祭を見るために矢張り母と来て、そのときは、帰路、電車を乗り違えて私たちを心配させたが、阪急乗換駅の十三(じゅうそう)で先に着いて待っていたということもあった。もう一度は父が親代わりになって育て上げた親子のように仲のいい弟、つまり私の叔父に当たる人と、大文字焼きと、再々度全国高校野球選手権大会を観にやって来たのである。叔父は父が野球を観ている間に、私たちにその夜は夕食を御馳走すると言って、わざわざ神戸の中華料理店まで下見に行ってくれていた。父は野球見物の合間に近くのプールで孫の泳ぎ遊ぶのを眺めながら、よしず張りの茶店で生ビールのジョッキを美味（おいし）そうに傾けていたという。妻の両親も、下の息子が山梨県櫛形村の養子になるための挙式に、私たちと同道すべく二泊した。義父は写真屋の小父さんから私が貰った槍の穂先に興味を持っていたので差し上げたのだが、研ぎにやってみると大変喜んでいた。当の穂先も自らの故郷近くに戻れるので幸せだろう。このように、親孝行が出来たことは芦屋暮らしの賜物である。母から聞いたところでは、父はＯＢとなっても通っていた中央銀行の碁会に顔を出して、芦屋の孫の所に行ってきたよと無邪気によく自慢していたそうである。

そのほかで芦屋生活の中で特筆すべきことと云えば、目出度く私が、柔道で黒帯を許される初段になったことであろうか。会社の終業時刻を待ってましたと帰宅して、雨の日も、また六甲颪（おろし）の吹き荒ぶ霙（みぞれ）混じりの寒い日も、倦むこと無く、コーデュロイの黒いヤッケを着込み、フードを被った恰好いい姿で、坂道を自転車で駆け下りて体育館通いをした成果の表れと云ってよい。

当初、私は昇段試験を直ぐに受ける気は無かった。勿論黒帯を締めることを目標に励んでいたことは間違いないのだが、まだ力不足である

ことは自覚していて、もっと技を磨いて寝技なども教えて貰いたかったからである。しかし道場の練習相手で私よりも弱い男が黒帯を締めていたのが、道場の先生もこれは拙いと思ったのか、しきりに私に受験を勧めていた。二月に初めて受けてみたときには、籤運が悪く、全出場者中一番初めの試合が宛がわれ、全く勝手が解らないうちに高校生の相手が逃げ回り、寝技に持ち込んで首を絞めたのだが、締め方を習っていなかったので力任せに締めても落ちず、そのまま五分が経過して引き分けとなって失格してしまった。収穫といえば道具を使わずに素手で人を殺すのは、大変難しいことだと学んだぐらいである。出場者の肩書きが出身学校を表示されて、会社の名前が出なかったのは良かったのであるが、大学名を出されるとは思っていなかった。格闘競技では強い大学ではないと嘗められたのかも知れない。次の昇段試験は四月中旬の日曜日に、芦屋市の浜手にある精道中学校で催された。その機会を逃せば次は九月まで待たねばならないという。私は必死な思いで朝早く会場に向かった。いい年をして何でこういう思いをせねばならないのかと、まるで大学受験当日のような深刻な気分にさせられていた。

試験に合格するには、五分間の試合で連続して三人続けて一本とって勝たなくてはならない。もちろん運が左右することは云うまでもない。強敵に当たればそれまでだが、二月のときのように相手に逃げ回られて引き分けてもダメである。霊園の横にある兵庫県警察学校の警察官とか、西宮市の、野球では有名だがむしろ柔道の方が全国制覇を何度もしている強豪校の報徳学園高校の生徒とか、阪神地区でのこの昇段試験には強敵が多い。しかし幸運にも、私は立て続けに二人の高校生と一人の大学生を連破して、出身大学名を傷つけないで済んだのである。その後での勝ち抜き者の『型』の披露は、道場にも時々顔を出していた報徳学園の顔見知りの先生が審判で、「君はいい」と免除してくれた。

私は、歓声を上げて家に帰った。昼飯を食べると早速、次女と長男を連れて折からの雨の中を、西宮恵比寿神社近くの商店街に黒帯を買いに行った。練習を始めて八ヶ月そこらで、三十七歳の中年サラリーマンが講道館の免状を手にしたのである。

愛宕山山人からの葉書は途絶えることなく続いて私たちの手元に来た。こちらからは返事も出さないのに、一方通行で彼の息吹は届けられていた。老人の精神はしっかりと立ち直りつつあった。それを、私は、彼の葉書に書き留められた詩歌で確認できた。カタルシスとして始められたこの老人の創作活動は、しかし、彼に物事を客観視する余裕（ゆとり）を与えて来たようである。自己をしっかりと見詰めることが出来れば、もう大丈夫である。

『雪の降る夜の茶碗酒　グラリ倒れる手枕に　夢は流れる四畳半』

これは一月の末に来た都都逸。

『雨になりみぞれに変り雪になる　百円の豆腐朝餉より落つ』

これは二月初めの短歌。

『包帯を巻けばこぼれて膝に落ち　ただ一息に解けて流れし』

これは三月の末。

『独り坐す煙草の煙りゆらゆらと　柱時計は秒をきざみつ』

四月末のこの歌の後で、六月に入ると『雑草』という題の詩文が届けられた。諦念を通り越し、その中に力強さを私は見出した。

『雑草に水をやっても
　肥やしをやっても
　大木になれない
　雑草がそよ風に吹かれて
　なんとなく良い気持ちでゐるのに
　高いところからいきなり
　牛の暑（ママ）い小便が降って来る
　湯浴みをしている気分になれるだろうか

　いきなり大便が落ちて来て
　真下敷になってしもう
　水分が蒸発しからからになるか
　雪が降って洗い流されてしもうまで
　苦難から這出すすべもない
　雑草は苦しい呼吸を続けて
　生き伸びる　』

この詩は六月になって最初の土曜日、衣替えの時期を正確に守って、全く久しぶりに、写真屋の小父さんが、芦屋の我が家で預かっていた夏用の衣類を受け取りに来た後で、郵送されて来たものである。その際小父さんは、私を前にして、今まで語り足らなかった分を取り戻すか

のように、数時間も話し続けていたが、その話の中で、財産作りのため株をやって見たくなったのだと、つい最近、大型鉄鋼株千株を買ったと言っていた。その資金は、市議の園長の預かり金の中から出させたと云うことだったので、こうやって一部でも取り戻せれば、もうお金の心配はなくなったと私も安堵した。老人は再び未来を持ち始めたのだ。何とかまとまったお金をこしらえて、もう一度、養老院を出て店を持ち商売をやってみたい、そう彼は抱負を述べて帰ってから、この詩を書いたのである。

芦屋を離れる前に私たち夫婦は、子供を連れて三田（さんだ）のアートガーデンを訪ねてみた。八月も二十日を過ぎた暑い日曜日のことである。妻にとっては十年振りである。夏蝉の激しく鳴く中を、丈高き草が繁り、主を失った楽園は、パボーニの奥さんが時々見回っているというのに拘わらず荒れていた。折からちょうど、近所の若者なのかオートバイが二台、すぐ隣の丘を上下するように爆音高く飛ばしていたが、私たちの姿を見るや、何処かへと行ってしまった。このままでは、確実に芸術の園は荒廃して消えてしまうであろう。画伯の意志を継ぐ芸術家は出て来ないのであろうか。いや、画伯はそのようなことは少しも心残りではないのだろう。楽園はその意義が失われない限り、みんなの心の中に永遠に存続する。画伯一人だけの楽園ではないのである。芸術の真髄を、彼は全身全霊を持って凝結したのでる。形が残らなくとも良いのだ。そう画伯は答えるであろう。

引越しの日は八月の二十九日と決まった。引越し先は以前住んだことのある小平市の会社のアパートになった。犬のいることも考慮したのだが、今度は巧くいかなかった。ただ一階だったので、張り出したヴェランダの下が地面になっていることを利用して、そこに繋いで、毎朝の運動さえ怠らなければ、ご近所に迷惑をお掛けしないで済む。

その時までに私たちがまだガレージの中で預かっていた写真屋の小父さんの荷物は、上ヶ原の庭師のおっさんがやって来て、みんな持って行ってくれた。私は何もかも持って行って貰いたかったので、私が貰ったことになっていた碁石と碁盤、さらに囲碁の書物もみんな持って行ってもらった。結局それらを私は一度も使わなかった。私の関心は当分囲碁の方には向かいそうも無い。

それでも庭師のおっさんが積み残した雑品が幾つかあった。『フタバ写真店』で使っていたポータブルテレビなどがそうである。それらは纏めて粗大ゴミとして市役所に引き取りに来てもらうよう連絡して家の前に置いていたところ、まだその引取りが来ないうちに、いつの間に見つけたのか、誰かが車で乗りつけて拾って行ってしまったのには驚かされた。

引越日の行事として、私は予（かね）てから決めておいたスケジュール、つまり全てが片付いて、トラックを送り出してからご近所への挨

拶を済ませた後で、霊園前のバス停に向かって建つ高級マンションの中二階にあるレストランで、夕食を家族揃って食べることを楽しみにしていた。『モンテローザ』と名付けられたその店は、毎朝の通勤時にバスを待っているときから目を付けていたのだが、芦屋にあるこの種のレストランは、私たちのような貧乏サラリーマンの家庭では、家族連れで気軽には入れる所ではないと敬遠し、いざ入ってみればそうでもないのに勝手にそうと決めて、一番最後の機会に取っておいたのである。しかし私の場合、このように深い配慮を持って長い時間暖めていた計画には、必ずといっていいほど邪魔が入り、計画通りには事が進まない。このときもそうであった。引越しの二、三日前から熱を出して寝込んでいた四歳になったばかりの長男がハシカの徴候を示し、しかも痙攣（ひきつけ）まで起こして苦しむので、とうとう阪急芦屋川駅の前の古い歴史を持つ個人経営の病院に入院させる破目になってしまった。運送会社の手配があるので引越しの日時は変えられない。そこで、私は長女、次女との三人で先に東京へ発つこととし、妻は長男と二人で病気が治り次第、遅れて東京に来るという手筈を取らざるを得なくなった。

その日、家財道具と、芦屋の家に入るための口実ともなった忠犬をトラックに積み込んで送り出してから、私は娘二人と憧れの『モンテローザ』に入って、コーヒーとジュースだけを頼んだ。見下ろす市街地とその先の海の色は、白く静かに動かなかった。思いもよらない形での芦屋との別離であった。すべてこんなものなのであろう。私は苦笑した。自分が行路を敷いたつもりになっていても、案外、自分ではコントロールできない大きな力の下で、もがき足掻いているということかも知れない。この一年と九ヶ月の芦屋生活で、また何か拭えない跡を私たちは印したことであろう。この街にとって、また、写真屋の小父さんを始めとする人たちにとって、私たちは単なる通行人かも知れない。しかし、私たちはつねに何処かを歩いていなければならないのだから、いつも通行人そのものなのだ。これから新幹線に乗れば、その日のうちに再び新しい住まいに着いてしまう。前に一度住んでいたことがあるとはいえ、其処でも私たちは通行人である。まあいいさ。通行人なら通行人らしく徹してやろう。

妻が病み上がりの長男を連れて、まだ梱包の解けない荷物が、狭いアパートの部屋を埋めていた小平市の社宅に着いたのは二日後であった。去りがたい芦屋に残した二人が合流し、私たち家族の二度目の東京生活も、何とか再スタートすることができた。

東京での生活は、何から何までそれまでの芦屋での生活と異なってしまったことは云うまでもない。しかし、初めて東京に住むわけではなく、このアパートも二度目だったので、別に途惑いを感じることもなかったのだが、ただ、容れ物の大きな家から小さな３ＤＫに移り住んだためか、家財道具が収まりきれず、これには弱ってしまった。西宮の新婚当時の何もなかった所帯が、国家と歩調を合わせるように物持ちになってしまい、芦屋で十畳敷きの応接間を埋めるため買い揃えたステレオセットとソファが、小さな部屋を塞（ふさ）ぎ、さらに、まだ包み

を解けない荷物が場所をとり、それらの荷物と荷物の間に僅かな隙間を作って、布団を敷いて辛うじて寝られるという有様であった。それでも、休日に少しずつ片付けると、何とか住まいらしくはなってきた。可哀想なのは芦屋住まいの功労大の忠犬である。どこに連れて行かれるのか、死ぬ思いで再び狭く暗いトラックの荷台に押し込まれ、ふらふらになって更に窮屈なヴェランダの下に縛られるとは、彼にとっては何たる恩知らずの、動物愛護の欠片（かけら）もない飼い主と思ったことであろう。

ある日、片付けをしていた荷物の中に、掛け軸が出てきた。床の間のないアパート暮らしでは掛け軸を掛ける場所はない。ともかくも開いて見ると、細い毛筆で白居易の七言絶句が書いてある。夙川御茶屋所町の写真屋の小父さんの家で見覚えのあったものである。長押の上にあった扁額は京都が持って行ったので、この掛け軸だけは引き取り手がなく、私の家の荷物に紛れて東京まで運ばれて来てしまったのであろう。

『　　對　　酒

蝸牛角上争何事　石火光中寄其身　（蝸牛角上何事をか争う　石火光中其の身を寄する）

随富随貧且歎楽　不開口笑是痴人　（富に従い貧に従い且〔しばら〕く歎楽せよ　口を開き笑わざるは是れ痴人）　』

いつの日か、この掛け軸を床の間に掛けられる時が来ても、恐らく私たち夫婦は、何やかやと些細なことで相変わらず埒（らち）もない諍いを続けていることであろう。

了

おわりに

書き終えてから四十年になろうとする今、約半世紀前の阪神地区において、まだ若かった私たち夫婦の生活誌を此処に公開するきっかけは、この三月に、印刷、製本以外は全て手製で出版した長編小説『終わりの始まりーー虚構の中の演技』を読み終わった私の姉が、作品の登場人物のモデルの一人である私のその直後の関西での生活が知りたいとの要望に応えるためでした。すでに、日記代わりに書き上げてダンボールに入れておいた手書きの読み難い、四百字詰めで二百六十枚の薄汚れた原稿用紙を探し出し、そのままの姿で読んで貰うのが気の毒でもあり、また下手な字を恥ずかしくもあったので、二十日を要して私がやっとパソコンでＷＯＲＤ化し、今度は前作の小説よりも六分の一と短かかったので、外部の印刷所に依頼することなく、娘婿の遠藤克巳氏と共同で印刷、製本した文字通り完全に手作りの本となりました。

前作の小説とは異なり、この作品は全て事実を記した、謂わゆるノン・フィクションです。六甲山麓の美しい阪神間での若夫婦一家の生活を、谷崎の『細雪』を手本に、気侭なスケッチとして、絵のような風物を詩のように描こうと書き始めたところが、いつのまにか、連れ合いに先立たれた一人の老人の生き様を追いかける小説風なテーマに収斂してきたのは意外でしたが、全て内容は真実です。当初の意図とは異なりましたが、今となって読み返すと、現代風の老人介護物語としても読める作品になったようです。

作品の登場人物中、私より年上の人物は、私の父母と叔父、妻の両親、子会社の部長など全て冥界に入りました。中心人物である写真屋の小父さんの死亡通知が西宮市から東京に届いたのは、本書の『はじめに』を書いて暫くしてからでした。パボーニの奥さんも風の便りでお亡くなりになられたようです。市会議員の園長先生や京都夫妻、それに庭師のおっさんの消息は判りません。それよりも、何といっても私よりはるか年下の、ランドセルを忘れて学校に行った次女が、今から三年前に亡くなったのは残念でした。『はじめに』には書き落としましたが、私たち一家の芦屋暮らしに恩のある忠犬は、小平市の会社のアパートの一階から間取りの広い四階に引っ越すとき、引き取り手もなく連れても行けなかったので、結局、断腸の思いで市の保健所に処分して貰いました。その忘恩の措置の祟りは覿面(てきめん)で、その後の私たち一家は、公私ともども大変な目に遭いました。妻と私は離婚もせずにそれぞれが一人暮らしをしていましたが、長い人生をインターバルの短距離走法で走り抜けようとしていた妻は、疲れ果て、目（緑内障）、耳（難聴４級）、歯(総入歯)、心臓（ステント挿入）にそれぞれ障害が出て、生来の統合失調症に認知症も伴い、果ては転倒して大腿部を骨折するなどで入退院を繰り返して要介護４と認定され、今は、私が、長男一家が住む東京都国分寺市で、家賃も、地上からも高い公営マンションを一時的に借りて、お互いに八十歳を過ぎた今、私の老々介護を受けながらすっかり従順となって、近くの病院と施設に通っているところです。

二０一七年五月十日

著者略歴

本籍　東京都港区麻布鳥居坂町

出生　一九三六年七月二十六日
島根県松江市北堀町

学歴　島根県立師範学校附属国民学校入学
新潟市立新潟国民／小学校転校
東京都港区立南山小学校転校・卒業
東京都港区立城南中学校卒業
東京都立日比谷高等学校卒業
東京大学法学部卒業

職歴　帝国人造絹糸（現・帝人）株式会社入社
フランス国家資本ローヌ・プーラン・ジャパン株式会社法務部長を経て一九九四年より学校法人白鷗大学法学部・同法科大学院教授（知的財産法・国際取引法専攻）を二〇〇七年まで歴任

作品　教養小説『実習期』（ペンネーム　時枝幹輝）
絵入寓話『現代イソップ物語』
企業小説『終わりの始まり～虚構の中の演技』ほか

二〇一七年　五月　三十一日

著作　岡本幹輝

パソコン文章ＷＯＲＤ作成

発行　岡本幹輝
静岡県熱海市上多賀
一〇六六－三七二
e-mail / m.okamoto@grace.ocn.ne.jp

銀行口座　ゆうちょ銀行　店番 018　記号 10120
普通　番号 59269351

印刷・製本　岡本幹輝
（著者次女篤子の夫）
遠藤克巳

頒価　一〇〇〇円（送料こみ）

パボーニ画伯作 皿絵 『甲山（かぶとやま）』